

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九六六号



日川協加盟

No. 966

第13回川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的に利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 $\frac{1}{9}$ 頁 二、〇〇〇円

$\frac{1}{6}$ 頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル 201号室

TEL 06-6779-3490

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。
■締切 11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時。

平成十九年（二〇〇七年）

十一月七日（水）アウイーナ大阪

十二月七日（金）アウイーナ大阪

平成二十年（二〇〇八年）

一月十日（月）アウイーナ大阪

二月七日（木）アウイーナ大阪

三月七日（金）アウイーナ大阪

「写真名鑑」

河内 天笑

5年に一度の「全日本柳人写真名鑑」が来春刊行の運びとなりました。昭和五十五年に「日本川柳人名鑑」として第一回目が刊行され、次いで昭和六十年に二回目が同じくB5版で刊行されたが、製本の不備でしょうか何回も使っている内にはぱらと剥がれ易かった事を記憶しています。

平成四年に「社団法人・全日本川柳協会」へと改まり翌平成五年にはそれまでの厚手の上質紙からA1ト紙へと変えて写真版のキメも細かく、より美しい印刷物に進化した事をご承知の通りです。また昭和時代の二冊はB5版でしたが、平成五年以降はA5版とし、より扱い易くなっています。

昭和五十九年に雄山閣から発行された「川柳総合事典（尾藤三柳編）」とこの「全日本柳人写真名鑑」は十数冊ある座右の書の中でも一番頻繁にお世話に

なっていて頼りになる本です。例えば毎月送られてくる柳誌に目を通していい作品に出会った時などすかさず「どんな人かな」と写真名鑑を繰っています。会いたい人が名鑑に載っている時などは「やったア」と思わず感動致します。一日に何回も名鑑をひらく事もあります。載っていないければやはり残念です。名鑑に参加して自分をアピールして下さい。一冊の句集を出すのと同じくらい、否それ以上価値のあること請け合いです。これを川柳塔社だけで写真名鑑を出すとするば優に一冊二万円くらいは必要です。川柳塔同人の皆さま、誌友の皆さまふるって写真名鑑にご参加下さいますようお願い申し上げます。

（出版委員長）

自選句

雄鳥のお洒落たましい入ってる

天笑

自由競争が道徳踏みになり

〃

保険屋は錯覚させてふんだくり

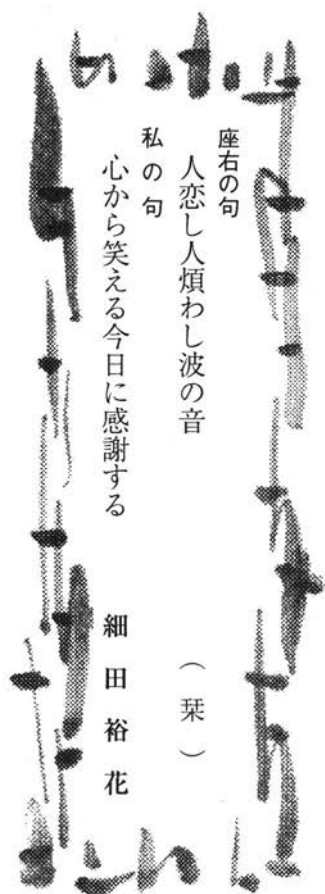
〃

隙あらば自慢話を聞かされる

〃

自分のこと好きになれるか鏡みる

〃



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

心から笑える今日に感謝する

(葉)

細田裕花

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「竹内街道」

■巻頭言 写真名鑑

雅号

河内天笑……(1)

川柳塔(同人吟)

板尾岳人……(2)

川柳塔の川柳讃歌 (35)

河内天笑選……(4)

自選集

木津川 計……(49)

温故知新

(50)

水煙抄

西出楓楽選……(54)

愛染帖

新家完司選……(78)

第13回 川柳塔まつり

(82)

同人総会・各賞表賞・記念句会・懇親宴

俳風柳多留 一篇研究 27

(94)

雅号

板尾岳人

その昔、毎日会社から帰ると座敷に上がらず、必ず登山靴を出してたつぷりと油をすり込んで手入れをしておいて、次の山行きに備えてロマンに浸っていた。

ある日、上本町五丁目のお寺であった川柳雑誌の句会に初出席した。戸田古方選に入選、その時は凡吉と呼名して一冊の柳箋をもらって帰った記憶がある。

それからたびたび句会に出席。路郎・霞乃両先生が会場の右前に二人並んでおられたのが目に浮かぶ。和服で角帯、白足袋の潮花さん、赤いベレー帽の阿茶さんを想い出す。

「君は山の句が多いが山が好きか」と声をかけて下さったのが、ひよろ長い(失礼)長身の橘高薫風先生だった。

鰻谷の中島生々庵宅の二階が川柳塔本社で、常任理事会の帰りはいつも心斎橋筋をぶらぶらと歩いて宗右衛門町の割烹大萬へ。

葉・小松園・好郎・形水・薫風・多久志・一三三諸先生の面々。特に鮑の好きだった好郎先生、その席で「岳人」と言う雅号を付けて頂いてから40周年、本名よりも岳人が好きである。

檸檬抄「飛ぶ」……………鈴木公弘・西口いわる共選…(96)

「ピント」……………高橋岳水選…(98)

一路集「黄」……………石谷美恵子選…(98)

「不思議」……………亀岡哲子選…(99)

初步教室「自分」……………三宅保州…(100)

秀句鑑賞「同人吟」……………穴吹尚士…(102)

水煙抄……………黒田能子…(104)

■句集鑑賞「雪ぼとけ」今 愁女著……………波多野五楽庵…(105)

■エッセー 選おそろし……………早川清生…(106)

瀧本きよしさん、さようなら……………峯村勲弘…(108)

各地柳壇(佳句地十選/時広一路)……………(110)

柳界展望……………(125)

十一月各地句会案内……………(126)

■編集後記(ひとこと/井上桂作)……………希久子・恵子…(128)

座右の句

ちっぽけな善意でもよし心満つ

(操子)

私の句

口軽に喋ったあとの自己嫌悪

土橋房枝

名前、雅号と言えば、それぞれの人間、人物

を表現するのに用いられ、特に最近亡くなられた作詞家、阿久 悠氏も悪友をもじり、とても素敵な響きのある名前であって入っている。

「着てはもらえぬセーターを……」

艶歌も歌謡曲も興味の無い僕は、都はるみの

「北の宿から」だけは知っている。

川柳を知る以前は文楽が好きで、当時の四つ橋にあった文楽座へ母に作ってもらった弁当を持って、日参した。人形遣いになるつもりはなかったのに、後に人間国宝になられた吉田文五郎師の楽屋へ、何の断わりもなく住みついた猫のように師のお世話をさせて頂いた。文五郎師も「お前誰や」とも言われず、毎日顔を見合せていた。

着物や袴を畳めもするし、洗濯板で洗濯したお蔭で、現在も妻の秘書兼お手伝い代りをして

いる。
文楽とは浄瑠璃・三味線・操り人形の三業を一体させ、ぴったりと呼吸を合わせて演じる、統合舞台芸術である。

「冥途の飛脚」

恋人の梅川の前で忠兵衛が公金に手を出して封印を切る場面

「八百屋お七恋緋桜」

お七が雪の中、火の見櫓に登る振り袖姿両場面共涙を誘う。



河内天笑選

八尾市 高杉千歩

夢でしか逢えない人に守られる
小気味よく捨てる若さが恐ろしい

暗算の出来る範囲で暮らして

活発な意見を嫌う老人会

温暖化秋の七草文字にする

贅沢は敵だで育ち嫌われる

尼崎市 山田耕治

パレードのうしろのほうはだれている

漫画読む寸暇惜しんでいる如し

割引のカードでいらぬものを買い

若者の特権檻樓がよく似合う

花ほめて西洋の名はすぐ忘れ

宵闇が迫る頃には酒を恋い

米子市 政岡日枝子

カルチャージョック河童街から戻れない

クレヨン画妻は不思議な彩を出す

人間とくらし金魚も朝寝坊

マネキンがふうつと息してポーズとる
カルテから残りの日々が洩れだした
ツアー客同じリボンで群れうごく

羽曳野市 三好専平

祖母の香が残る筆筒をゴミに出し

新しい点滅死んだ子の代わり

明日のない人が集まるネットカフェ

砂漠化がすすむ格差の底に泣き

終止符のない音楽に騙される

おとなしい子供でものを言いません

藤井寺市 鴨谷瑠美子

別れ際ぶつきらぼうにまた会おね

花束は目立つし心そつとあげ

縄跳びが出来る自分に拍手する

都合よくすすきと萩と丸い月

すぐ秋がやって来そうな雨が降る

嫌われた想像だけで泣けてくる

弘前市 高橋 岳水

クーリングオフという名の助け舟

敬老の日だけ授かる銀の椅子

杖なしで歩けるうちが花である

何もかもご破算にする竹の花

少子化の何とも寒い近未来

アバウトに生きて炎暑を遣り過す

吹田市 穴吹 尚士

マンシヨンの理事長決めるあみだくじ

憂国の志士が並んだ縄のれん

大勢にいつも従うDNA

嘘ついた口をビールでよく洗う

生き下手を承知で筋を譲らない

敬老の一日だけを祝われる

吹田市 山本 希久子

たそがれへ駆け足ばかり霜の月

ふっ切れたようだするするもつれ糸

新聞溜まるどんどん遠くなる昨日

忙中閑言葉の森を散歩する

点線に沿って歩いているのです

幸せを使い果たさぬよう長寿

海南市 三宅 保州

ネクタイは刀の名残りだと思ふ

ベレー帽被りたくなる美術館

聞いている振りをするのも疲れます

一生に幾つ眼鏡を踏み潰す

おひとりですかと念を押された観覧車

ケータイという写真機に馴染めない

河内長野市 山岡 富美子

イエスでもノーでもきつと残る悔い

お賽銭箱の本音が生臭い

少子化の明日を覗く針の穴

平行線親の本音と子の本音

美しい国の行方に乱気流

褒められて思わず本音でてしまう

豊中市 藤井 則彦

ピカソより凜凜しい顔の福笑い

アンコール聴かなきゃ損と舞い戻る

休止符にも想いを刻む作曲家

無駄足を重ねて挙げた大成果

見比べてまた取りに行くバイキング

ガンのこと知っていたよと言うて逝く

豊中市 吉田 あずき

風九月いのちが丸い実を結ぶ

朝刊を開いて今日の風を読む

親の持つ鍵では開かぬ子の心

手のぬくみ問題一つずつ解ける

年金の予算で誘い合う仲間

目まぐるし医療現場の変り様

堺市 志田千代

天職と思えぬままに勤めあげ
カルチャーの空気吸うてるだけでよい
不用品ですがボロではありません
園児でも脱いだらちゃんとしためます
婆ちゃんの大変がまた始まった
聞く耳はないらしいけど話しく

さいたま市 星野育子

自画像に笑顔は描かぬものらしい
億ション完売ネットカフェ満席
嘘の数まだ八百に届かない
看護師と博士の読みにまだ慣れず
旅の恥捨てずそのまま持ち帰れ
井戸端会議はしない家事ロボット

出雲市 園山多賀子

同居して紙風船を膨らます
ふる里へやがて鬼火が帰り着く
孤を守る女火宅を生き残る
清濁を流して海は冗舌に
美しい嘘聞き分けるのも卒寿
土踏まず微熱が残る修羅いくつ

雲南市 毛利幸

順送りしては波風避けている
足湯するそつと隣の顔覗く
全開で老人力が走り出す

ひんやりと流しそうめん舌に乗る
鏡見て一寸老けたと気がめいる
少子化が国の運命左右する

八尾市 山本宏至

金のない友を沢山知っている
順調に子供が育つ反抗期
親の夢裏切った子が世に受ける
人間と出くわす運の悪い熊
悪い世で馬まで風邪をひいている
飼犬がおろおろしてる家庭不和

愛知県 早川遯行

ガーデニング花の機嫌を取りながら
お隣はかなりサンマが好きらしい
俺よりも下手なのがいたボーリング
本人はあまり気付いていない癖
ばちばちでいい定年後の暮らし
高くて国産がいい肉野菜

東京都 岸野あやめ

蟬の声消えて鳴いてるちちろ虫
老人の知恵はちよい食べちよい歩く
安請合いしないところが老舗だな
高い利子出すと電話が喋ります
玉手箱煙は元に戻せない
見栄を張ることも気力のうちですね

鳥取市 近藤佳子

絢爛と向日葵咲いて夏が逝く

公金のばくり屋でした大臣さま

人間の脆さしぶとさ八十路生く

お墓建て直して安らぎを貰う

一畳半ほどの寢床が砦なり

しなやかにすすきはどんな風も耐え

島根県 伊藤寿美

新しい海にわたしを浮かばせる

蜘蛛の巣に心残りが引つ掛かる

空っぽの電車が止まる秋の海

秋灯下好きな頁に置く葉

みぞおちに石が居ついたまま秋に

寝返ってみてもひとりの蓮の花

檀原市 居谷真理子

合掌で見送られてる見舞客

うすもにけぶって逢える日の鏡

咲いて散る君の曠野の片隅で

忘れねば忘れねばとて身を縛る

この路地をまがると秋の日が暮れる

コスモスの強さは風にゆうらゆら

堺市 村上玄也

領いて聞くが賛成してくれず

パチンコの前では粘り強い父

ばあちゃんをATMと思う孫

家中の白い目突き刺さる紫煙
実力が運を引つ張り込んでくる
忘れてはないが忘れた振りをする

弘前市 高瀬霜石

路地裏へ入ると温い音がする

悪人の必需品たるシユレツダー

寝ころんで天動説を唱えけり

北朝鮮へ飛んで行けない千羽鶴

豆を煮る豆と禅問答をする

ぱっくりを願ってばかりいるお経

堺市 柿花和夫

飲み足りぬ幹事を囲む三次会

様付けで呼ばれた私患者です

看板に国産とある漬物屋

あと出しのジャンケンポンが特技です

記念碑は悲喜こもごもの顔で建つ

マスターの問わず語りで飲んでます

出雲市 伊藤玲子

盃のひと巡りしてみな仲間

野に居たい摘まれた花の音がする

芋の露ころころ笑うわたくしも

向かい風蛇行しながら逢いにいく

何か言いたいローソクを揺らす風

うつらうつら眠る楽しみあるこの世

松江市 小川 注 湖

その言葉痒いところに届く手だ
すると味みる前に喉を越え
足湯には白や日焼けの歴史あり
右ひだり振り子も僕も揺れている
太陽はすれすれルック見て笑う

松江市 津 川 紫 晃

ぜいたくな暮らしが見えるゴミの量
花よりは葉で観る鉢の数が増え
明快な答えを太陽から貰う
初恋が解凍されるクラス会
目移りが男の本音語る夏

松江市 三 島 淞 丘

ライバルも今逆風の中に立つ
青い実のまま落ちてゆく反抗期
すつきりといかぬ鉦とぼたん穴
赤い実を食べたら鳩になれますか
元氣かと朝の鏡に問うてみる

松江市 安 食 友 子

夢二描く果敢無さたぎる眼差しよ
ローレライ罪なポーズをしたのね
ああ乱世我が子危める人非人
流暢で度胆抜かれたジャパニーズ
童顔につい油断する下心

松江市 松 本 知恵子

子の描く絵がはしゃいでる三輪車
馴れ合いのハウスミカンが甘すぎる
古代ハス生流転見続ける
歳月の流れが碎く胸の岩
流れには任せるも良し糸蜻蛉

松江市 銭 山 昌 枝

自堕落な一日だった夫は留守
絵手紙をトイレに吊って自画自讃
クラス会時効の話ばらされる
子や孫をスカッと叱る肝っ玉
お寝しよした孫にも嫁が来るそう

松江市 川 本 畔

秋風が吹いて古里近くなる
吾木香もういいかいと声がする
百日紅 哀しいことがあり白に
医者の前何故か素直になれる場所
やってみる努力しますと約束し

松江市 佐野木 み え

溝掃除して台風のそなえする
頬よせて桃のうぶ毛に触れてみる
秋雨にもういいのよと梨の声
秋海棠アンバランスの葉がうれし
不整脈忘れ石段かけ登る

出雲市 佐藤 治代

平凡に生きるって事難しい
おしゃべりな友に唾然となった口
立つ位置をずらしただけの風の向き
私を見るわたくしが居る現在地
老いたなと思うそれでも赤を着る

出雲市 小白金 房子

畔ごしで稲穂見上げる休耕田
墨衣汗拭く和尚の盆つとめ
もみじ背に野点一服秋を呑む
鬼瓦月のしずくを抱きよせる
六十年祝う夫婦の共白髪

出雲市 持田 多輝子

楽しさは笑い袋の中にあり
横文字のカルテに生命ゆだねてる
新米と告げて捧げる御仏飯
世も末になる問題が多すぎる
身から出た錆でバツジを外す破目

出雲市 石倉 美佐子

浮き沈み激しい此の世を流れゆく
優しさが重なり合うて万華鏡
過去形になってしまった好きな人
カアカアに嘗められている家のポチ
無愛想な風と連れ添い五十年

出雲市 多久和 敬子

真実は日記の中で眠ってる
時流れライバル同士手をつなぐ
お隣もうちも仲良くさんま焼く
平凡な暮し朝から欠伸出る
新しい言葉辞書にはのってない

出雲市 小豆澤 歌子

亡母の声今も聞える子守唄
許されて流れ流れていく筏
新しい風が欲しくて本捲る
ちぎれ雲今がチャンスと風になる
決断を貫き通す茄子の花

出雲市 富田 蘭水

カントもヘーゲルも呼ぶ秋書斎
大軒はたと止んでは妻安眠
大変に慣れて今年も半分すぎ
盆踊り逢える目的まで秘めて
酒うまく一合までが止められぬ

出雲市 岸 桂子

日が沈むさよならしよう影法師
時時は他人の顔になる夫婦
夫の手欲しいと思うサロンプス
水面に誤解ばかりが浮いている
仏飯のゆげに安らぎもらう朝

出雲市 竹 治 ちかし

言い足りぬ事を残したまま別れ
青春を昨日のように語る老い
あいまいな想い出合わせはむ過ぎ
過ぎ去った年だけ話す事があり
人間の心に戻す里の盆

倉敷市 撰 喜 子

ストレスをためて仏に会いに行く
殺虫剤蚊帳という家具死語にする
ダイエット指導の医師の太鼓腹
久しぶり花嫁のせて島へ着く
切り分けて小さい方をとる齡

美作市 大石 あすなろ

喜びを共有したく手を叩く
ひと昔前の火の粉が飛んで来る
女の美学ネイルアートでおしゃれする
不器用で同時進行出来ませぬ
ハーモニ―少し崩れて来たふたり

美作市 福 原 悦 子

生きてゆく向い風にも甘んじる
一件落着深い眠りの中にいる
頂点に立つ日の棘は怖くない
介護の手厚さ父に手を合す
絵手紙と遊んでいるのは無の時間

美作市 小 林 妻 子

西の旅優しい風のあるうちに
八十円で長い親父のお説教
何食わぬ顔でリーチになっている
独りで遊ぶ腹の立たない詰将棋
否応はない赤紙と身に覚え

真庭市 国 米 きくゑ

土かすかに動いて花の種芽ぶく
ムートンの座布団が待つ八十の椅子
吹き渡る風もかすかに秋の彩
人柄が回りの空気円くする
通夜の席重い空気を破る鉦

真庭市 福 嶋 智恵子

盆帰る一と言だけのメール来る
逆らわず愚痴は言わずに暮す老い
青春へ形状記憶戻すべし
路地裏の世間拾いに行く散歩
改革のはざままで田舎枯れてゆく

竹原市 岩 本 笑 子

ポプラ並木若さを追ったことがある
虹というときめきウツをはね返す
日曜日ごとに刈りゆく田んぼ道
ウソ少し日一日を丸く住み
検査検査ガンを恐れてなるものか

竹原市 時 広 一 路

東かがわ市 川 崎 ひかり

男独り見ないチラシの資源ゴミ
平凡な一日明日も平凡に
使用ゼロでも携帯は離さない
春夏秋冬体重計よ何故同じ
家事万端やらねば今日が進まない

竹原市 石 原 淑 子

草の根の生きる力をもらいうけ
深呼吸一つ平常心になる
歎びが大地に弾む孫育つ
好物を届けてくれる友の情
大空に平和祈願の白い雲

宇都市 平 田 実 男

名作をこま切りにするコマーシャル
孫受験天満宮を梯子する
だんだんと青信号が減る余生
メイドインジャパンは妻とお米だけ
苦を楽の種にしてくれない政治

美祿市 安平次 弘 道

この橋を渡ればきつと転ぶだろう
侘び寂の話に戻る万華鏡
飯の世にしてはチャンスがまた巡り
腹割って話し空気を入れ替える
行間にある真実が掴めない

別れた日長所ばかりを思い出す
孫が来るカレー空揚げハンバーグ
受け皿にいつも夫がいてくれる
二泊三日月へ行くほど大きわぎ
極楽は遠慮気兼ねのない昼寝

東かがわ市 清 川 玲 子

やがてやがて消える命でいと嬉しい
明日生きる命に日銭かぞえてる
秋の皿またダイエット先のぼし
バイキングの皿血糖値忘れさせ
玄関に入るとパパの顔になる

東かがわ市 神 保 坊 太 郎

姑さんの手前味噌には歯が立たぬ
四面楚歌鬼が味方の顔で来る
一人だと暑いと言わぬこの暑さ
ライバルの愚痴は戦略かも知れぬ
飯の世を曲がりくねって九十年

東かがわ市 原 賢

呑み込んだ言葉が喉にひっかかる
神様を試して絵馬を掛けて置く
朽ちてゆく身体に鞭を打って生き
くたびれた辞書に残っている初心
背伸びしたつげが回って来た余生

東かがわ市 伊勢 八重子

真実の愛でほぐれた反抗期

台風の恐怖おしこめ一人棲む

買うよりも捨てる勇気をもっといる

一筋の愛が女を強くする

暮れなずむ里に梵鐘こだまする

東かがわ市 成重 放任

もう一度歩む望みのリハビリー

手の甲の厚さが語る苦労性

読みもせぬ新聞義理が持つて来る

無駄のない暮らしに母の雑記帳

細い娘もなぜダイエット ダイエット

松山市 古手川 光

蝉しぐれ終り淋しくなりました

物忘れだけは誰にも負けません

お日さまも休み欲しかる雨降らぬ

中国製好きで買ってる訳でない

ご先祖の遺産は癌のDNA

松山市 高橋 宏臣

コットンのおしゃれが似合う夏帽子

しなやかに生きて強気に蓋をする

満足の端っこにいる以下同じ

順風の中で聞いている子守歌

掌中の花にはいつも水をやる

松山市 宮尾 みのり

一石を投じる海と知りながら

若者の足の長さを知る足湯

現実は夫婦別居のUターン

蛍光灯名残惜しげに寿命尽き

団塊へ招待状を出す過疎地

大洲市 中居 善信

脱ぎ捨てたのはしがらみか蟬の殻

遊び駒かも知れない退職後

神様の悪戯だろう瓜二つ

神さまのいけずひよっとこなど作り

内部告発する気のメモを取っている

西予市 黒田 茂代

千の風まで星になると思ってた

別世界忙しない世の能舞台

いつまでも今が続くと限らない

ストレスが離してくれぬ偏頭痛

扇風機もテレビも夫婦一つずつ

高知県 赤川 菊野

八十路坂まだ一灯を追いつづけ

これで最後これが最後とパスポート

まばたきをする間に変るカレンダー

底辺を生きた人なら信じよう

マネキンもたまには横になりたかろ

高知県 小澤 幸 泉

黙ってるただ黙ってる男の子
つれづれの愚痴相談にのっている
ご近所の視線気にして子を叱り
わかれ道見上げる空が青すぎる
昼の街まだまだ今日がつかめない

高知県 小川 てるみ

気力体力ふるい起たせている晩夏
手抜きしてどうにか残暑切り抜ける
失敗を笑い話にする余裕

認知症信じられない友になり
子や孫に戦後を語るふかし芋

唐津市 市丸 晴 翠

切り抜いた記事要るときは雲隠れ
本心に儲かるならば誘わない
晩学の辞書積み上げてする昼寝
一歩ずつさぐり八十路の崖っぶち
義母看取るみんな忘れたことにして

唐津市 坂本 蜂 朗

子が巣立ち妻軍配を持っている
へそくりがじつと耐えてる冷蔵庫
祖父の守りちゃんとしている三歳児
君のため幻の酒封を切る
日本の土産原爆記念品

唐津市 宗 水 笑

惜敗の汗がなおよし甲子園
敗れると根性足らんなど傍は言う
ぐうたらと不思議な糸で結ぶ美女
わびさびがまるきり死語となる日本
幸せな野草咲きたい場所で咲く

唐津市 井上 勝 視

趣味嗜好個性ゆずれぬボタン穴
裏ごしをしたら欲だけ残ってる
反論も出来ず耐えてる脛の傷
伝い歩き幼児のような齢になる
まさぐった乳房忘れた母殺し

唐津市 山口 高 明

脳トレだメタボリックだと世は平和
近頃は親に似ぬ子が良く産まれ
ポスターを貼りには来ても剥ぎにこず
世間とは没交渉の神崇め
大蒜を食べると楽に席が取れ

唐津市 樋口 輝 夫

佐賀北が全国制覇の金字塔
司令塔の妻も今では認知症
隠し金ばれたら保管中と言う
こんな日もあったねと見る高島田
エアコンをこまめに切って爺達者

熊本市 永田俊子

開口一番おいくつですかに慣れてきた

義理を欠く老いを嘆いている団扇

買わないが莫塵売りに出す麦茶

それからのことは知らない花時計

なかなか急に足がもつれ出し

熊本市 高野宵草

秋時雨泣く電光掲示板

居眠りで地球が四半分回り

窓開けて光陰を知る秋の風

玄関に靴脱皮してパパとなる

縁台の団扇で亡母に諭された

熊本市 岩切康子

月食で初めて見る赤い月

網戸からわたしを狙う蚊二三

親切な地名の札に感謝する

理由はどうかあれ結局頼まれる

御先祖の歳チュックして余命決め

シドニー 坂上の子

カリスマの大統領の凄い地位(シドニーAPECを間近に見て)

何はともあれ見事だあれがリーダーだ

アメリカに世界をリードする資質

人道支援して企んでいる資源

生きるとは与え得ることボランティア

砂川市 大橋政良

ふと消えてみたいと思う落し穴

ライバルと平行線に火花散る

電子辞書おぼえた頃に動かない

落書の裏にかくしてある本音

鈍感をよそおい肚の底を読む

弘前市 岡本花匠

四捨五入 四捨の余裕に生かされる

傘寿祝 持病抱えるクラス会

春に祈り出来秋祝う歓喜の日

乱立のビルに夢売り来てくれぬ

ちかごろは無理をするなの声かかる

弘前市 今愁女

逃げやすい秋の日を追う洗たく機

つるべ落し秋の入日は華やかに

お山参詣朔日山のご来光

豊穰と安全祈り岩木山

高速艇でゆけば二時間蝦夷の国

弘前市 櫻庭順風

朝夕のラッシュに揉まれ行く元氣

椅子並べ徹夜でテストする頑固

松根油からガソリンに賭けた日日

剣道の師範と手合せする至福

敗戦の誤算しあわせすぎる土地

弘前市 福士慕情

十和田市 阿部進

五分毎掛けてゐるのに話し中
留守電に舌打ちをして切る電話
物知りが少し五月蠅い絵画展
スーパ一のボトルで水を持ち帰る
ハタツと風止んだら雨が降ってきた

弘前市 須郷井蛙

平川市 小寺花峯

朝顔のすだれ自然の風を入れ
定年の夫ネコより手がかかり
図書館で新聞代を節約し
エルニーニョ畑の野菜狂わせる
パセリにはパセリにあつた指定席

黒石市 佐藤古拙

日高市 根岸方子

夏帽の父子追いかける蟬しきり
人の目を避ける帽子を深くする
家系図は大黒柱に埋めてある
二番果のつばめが帰る高い空
炊飯器おこげ冷やめし死語にする

黒石市 相馬一花

さいたま市 八田敏

がぶがぶと飲ませてくれぬ妻の酌
人前でこれ見よがしの薬指
古傷がしくしく痛む正義漢
口ポットのように夫を抜き使う
一杯の酒に煽られミスマツチ

価値観の違いで夢は消え失せる
ガラクタは皆んな捨てよと娘にいわれ
ほめられて孫のやる気が湧いてくる
二人で食べあつと片づけは妻がする
ようやくと年金ぐらし板につき

パトカーが後ろを走るハツとする
ゴミの山支援しているのがカラス
呱呱の声聞いてふれあう箸の数
片減りの靴は茶柱グツと飲む
悩みごとあるから明日も生きられる

蜂被害コースを替える散歩道
遠景にメタボが映る診断書
雑穀に換えてメタボに立ち向う
外食の魚の名前知りません
いい人でいられる距離をいとおしむ

十三年闘病の妻遂に逝く
医師宣告なお七ヵ月生きた妻
物言えず苦しみあえぎ妻逝きぬ
介護なき日々の空しさ淋しさよ
車椅子押す老夫婦羨まし

柏市 永峰 宣子

東京都 長谷川 康子

爺婆をリアルに描く孫の筆
無事着いた電話でやっと眉開く
経験が眉唾物を感じする
未婚の娘頭痛の種になっている
障害が孫の代まで枯葉剤

柏市 河野 桃葉

加齢かな歩幅が狭くなっている
せせらぎが心を癒す回復期
胃の壁を結び直した内視鏡
病院の窓変哲もなく眺め
古い殻割るとワイドになる視界

東京都 清原 悦子

ストレスを軽くしてきた旅靴
不揃いの野菜に母の愛がある
いい事が続いて不安ふと覚え
励ましの言葉栄養剤となる
描ききれぬ景色下絵のまま帰る

東京都 小川 賀世子

ああ加齢出来ない事が増えている
赤い服その内出番ありそうで
酒癖を除けば好きなお人です
飲んで飲んで軽い男になってはる
母の味マンネリだからいいのです

めつきりと夕餉の匂い減った路地
郵便のたまに切手がノーチエック
静けさが戻る工事の盆休み
好きなものの好きだけ食べて夏を越す
のんびりの嫁のおかげで惚けられず

国分寺市 野崎 勝

喧嘩したその日の日記字が乱れ
喜びも不安が混じる退院日
不器用に急いで逝った父想う
徳利を傾け今日の無事祝う
従順な妻ならきつと味気ない

武蔵野市 亀井 円女

次生まれたらハーレーに乗り独り旅
アドリブはプロ並み亡母の子守唄
旅立つ日には笑っておくれ賑やかに
亡夫想う夜の深さよ静けさよ
ここだけの話する人大きらい

横浜市 小野 句多留

嫁さんの里から届く秋の味
冷酒からヌル爛になる衣替え
適当という安易さに流される
変ったかなみんな優しくしてくれる
人招く男料理は大雑把

横浜市 菊地政勝

満面の笑顔が集う芋煮会
評判を追って自分を見失なう
惜しめない自己啓発へ時間割く
医者よりも頼りにされる正露丸
年齢を教えてくれたお節介

富山市 島 ひかる

コスモスは何も知らない振りをして
葬ったヒヨコへ小さい手を合わせ
マンガから学ぶ歴史も算数も
見送りへ両手ちぎれるほどの孫
巨大鮎すこし無気味で食べられぬ

可児市 鶴留百合

見られても良いことだけは書く手帳
この足で富士の山頂しかと立ち
台風は日本が好きとまたも寄り
転職の理由はパソコン目の疲れ
定年になるまで待つて空の旅

可児市 板山 まみ子

恋文を書いた机も粗大ゴミ
思春期の机の中の宝物
猛暑にも元気はつらつ道の草
脚鍛え三途の川は飛び越える
被災地へせめて送ろう義援金

静岡県 蘭田 獭 杵

バスツアー元気な女性溢れてる
着流しの浴衣の男粹に見え
福祉にはケチな男の祭寄附
縁台で星のロマンを子に聞かせ
よく似てるテレビドラマと俺の過去

犬山市 吉田 幸子

星空を恨みに思う熱帯夜
愛嬌のいい子やと孫撫でられる
初なりで見映えせぬ梨超旨い
一人居の手抜きを叱る冷蔵庫
もう帰るか母の口癖背に受ける

犬山市 関本 かつ子

虫の音で眠りうるさいもずで起き
増税の土足で上がる息づかい
それなりに見える犯罪者の写真
勧誘へ自分で買えと切る電話
犯人と刑事どちらも恐い顔

犬山市 金子 美千代

武器にするつもりはないが出る涙
マンネリを時々ゆすり夫婦の茶
思い出がやさしくなってきた月日
冷房の部屋で案じる温暖化
知らぬ間に人傷つけた軽い口

尾張旭市 三浦 きぬ

京都市 西村 益子

代議士はやっぱり並みの顔がいい

長すぎる余生の長さもて余す

大洋に散骨したというお人

絵手紙を毎月くれる教え子よ

嘘とほんと適度に使い分けて住み

京都市 高島 啓子

右向け右などにんげんを試す

ころがしてみるにんげんの多面体

規則規範少しくずしてよいおとな

野晒しや雨ざらしにも遇うおとな

君が代の歌詞は忘れないで歌う

京都市 三宅 満子

良い妻を演じておこう電話口

来年も咲いてねそつと包む種

看板はあるがシャッター閉めたまま

指切りをせんでも信じついて行く

ふところが温いと笑みがこぼれ出る

京都市 榑本 宏子

夢いっぱいケチを楽しむ若夫婦

的を射る言葉ほしくて長電話

これからはおんなひとりの花火上げ

万華鏡に遊ばれているのは私

雨風の傘になりたい老婆心

素麺を食べ切り秋を待つ残暑

クーラーの風にも飽きて秋を待つ

ナスキューリ札を言いつつ引っこ抜く

ぶつかられても先に謝る御人好し

適量を過ぎたビールがまた旨い

亀岡市 井上 森生

蟬が鳴き叫ぶは耳が遠いから

酷暑こそ熱い長篇小説が暑氣払い

もう一人の自分が誘う粋な声

次に逢う何年先かで盛り上がる（高校同期会）

背負うべき何か私に出来ること

長岡京市 山田 葉子

補欠のまま出番待ってた甲子園

スタンバイずつとしていたスベアキー

一献を傾け波長合うてくる

アビールを退けられて奮い立つ

明るくていい子演じていたのかも

大阪市 野田 栄呼

腰痛で万歩に替る知恵探る

高級ないただき物が舌を噛む

失って初めて気づく若さの美

若づくりしても鏡は許さない

豊作に暑さとし込むコンバイン

大阪市 升 成 好

体調と天気でかわる歩行距離
パチンコに勝つジंकスは教えない
電話口移されそうな咳を聞く
ここだけの話を捨てる場所がない
考えるチャンスを雨の日に貰う

大阪市 中 村 叡 子

期限切れ自分の舌に試させる
食欲がないと言うから作らない
車椅子買うか借りよか思案する
あの人は若しや鬱ではないやろか
阿久悠はアナログのまま亡くなられ

大阪市 井 丸 昌 紀

とりあえず担がれておく友の嘘
深い訳ないけど今日は花を買ひ
免許証犯罪人の顔になる
佗び寂は半畳にある四畳半
憧れの女はサンダル履きで来た

大阪市 福 岡 末 吉

厳しき世おもんばかりは子等の未来
挿まれた写真に馳せる在りし日々
獲れたての知識を翳し見栄をはる
浅葱腕漆に秘める京雅
職を辞しゆつたり流る刻に酔う

大阪市 池 上 清 治

見もしないチラシどっさりみんなゴミ
放課後にお金を出して塾通い
特待生なしで優勝ちゃんとき
清潔でおいしいそば屋知っている
細巻きの鮭ファイナルはトロ鉄火

大阪市 奥 村 五 月

鯛になる夢追いかける雑魚の群れ
達筆で起こさないでと青テント
顔ださぬ友が気になる縄のれん
サービスの食前酒も飲めぬ下戸
隣から一足早い旬の物

大阪市 渡 部 さと美

せいっぱい今日も動こう高い空
天空の神が導びく渡り鳥
お月さまわたくしばかり歳をとり
年寄りの機敏すぎるも落ち着かず
エレベーター在り所足弱知りつくし

大阪市 近 藤 正

火に油そそいで辞めた安倍総理
引き揚げる方がイラクのためになる
原発が震えあがった地震の巣
見ず知らず甘いメールが誘ひ出す
兎小屋よりも悲しいネットカフェ

大阪市 岩崎公誠

大阪市 岡本久峰

天女にもモヒカン刈りがいて目立ち
人の顔忘れることがハイペース
借りた金なんのかんのと返さない
生き方は間違いないと語尾上げる
青信号待つて渡つてはねられた

大阪市 大川桃花

快音がミットに響くストライク
ふわふわの赤絨緞にけつまずく
待ち侘びた芽を確かめる虫眼鏡
ほろほろと愚痴聞かされるお茶を注ぐ
自信ない記憶に増えるメモの数

大阪市 中村れんげ

知る事を栄養とする辞書を読む
アレソレで話通じる老夫婦
美のセンス合わぬ孫娘と同居する
永田町バトンタッチの早いこと
戸惑いに助けをくれた友の勘

大阪市 小泉ひさ乃

主婦の顔女に戻す夕化粧
筋トレに励み余力を溜めておく
生かされて診察券が増えていく
飛ばされてあつけらかんと地に馴染み
可愛い言葉にてれるおばあさん

おいはれの昼寝起さぬ乙な奴
信用の外に取り柄の無いのれん
平成の世にうろうろと殺人鬼
お飾りの大臣に国ゆるぎ出す
秋風に夏のしこりをほぐされる

大阪市 川原章久

夫婦仲悪けりや味噌にかびが生え
十円で神は不足をおつしやらす
大らかに笑え青空秋の色
休耕田コスモス匂う風を吸う
一日を観光バスに縛られる

大阪市 岩崎玲子

凜とした母の姿をお手本に
日課です手押し車でスーパーへ
刺がとれ丸く小さくなつてゆく
戦争と戦後を生きた皺の数
卒寿です拍手をうけてまた進む

大阪市 前 たもつ

一病が猛暑に耐えてはめてやる
塔眺めなぜか落ち着く新事務所
週刊誌の目次読んでる雑学者
相槌のかわりに笑顔見せておく
笑点は台本見ずに笑わせる

大阪市 鶴田遠野

一言をいっばい溜める喉仏

命日のちちを肴に名残り酒

空想で楽しみました妻の留守

夏バテに追い討ちかけている残暑

心の痒み一気飲みして追っ払う

大阪市 川端 一歩

エンピツを持って自分の顔になる

秋が好き亡母の名前はキクと言う

鶴彬記録映画になる話

名も消えて石も朽ちてる兵の墓

だれ総理なろうが僕は改憲ノー

大阪市 小谷 集 一

生きているだけで人生丸儲け

距離感がびったり合って共白髪

親切な言葉の裏にある打算

胸襟を開くカラオケない店で

無駄な見栄捨てると楽に生きられる

大阪市 西川 更紗

ホスピスに委ねる友の決意知る

うっかりと妥協してからうつになる

出来ちゃった婚拒まない親が増え

猛暑にも食欲だけは衰えず

はよ呆けんよう脳みそを鍛えてる

大阪市 榎本舞夢

自己流で楽しく生きる老後です

くどいほど迫られ妻になりました

恋人がいること知って楽になり

いい夫婦空気がみたいに年重ね

待合わせ冷房さいた場所えらぶ

大阪市 榎本 日の出

核よりも恐い地球の温暖化

メールより声聞きたいと電話くる

もう愚痴は止そうよ誰も聞いてない

極楽をこの世でみつけたのしもう

まだ若く思いたいから鏡見ず

大阪市 熊代 菜月

暑さなど吹きとべギャルの夏祭り

不死鳥が今日もテレビで生きかえり

まだ昼寝している脳よさあ起きろ

手のひらで転がし合いの嫁姑

外来魚味方に付けて町おこし

大阪市 星野 きらり

聞き役に回れば少し見えてくる

行先は風に聞いてよひとり旅

一ぺんは踏み外したい好奇心

花粉症だけはご免と戸を閉ざす

参詣道お地藏さまと対話する

大阪市 松尾 柳右子

大阪市 板東 倫子

炎天をしばし歩いて姉見舞う

青年も今年の暑さのびている

赤ちゃんの握るこぶしに夢詰まる

交通量激しく落書も激し

日程の変更続く医者通い

大阪市 津守 なぎさ

ベッドからキャンセルをした南紀の湯

旅友に内緒只今入院中

師のハガキ今日もベッドで読み返す

点滴の部屋で夜明けを待つのち

退院の目安を神に問いかける

大阪市 神夏磯 典子

責任はみんな総理のせいにする

脳みそが乾かないよう喋ってる

先生と肩を並べた日の写真

ブランドも要らぬ走れる足が欲し

残り火に興味めらめらと燃えている

大阪市 小糸 昭子

吹いてよし吹かんでもよし夏の風

墓参り早くお出でよ不孝者

右往左往汚くなった諭吉さん

日の丸のマークが一番美しい

古い二人家と病院一人ずつ

阪神よがばいファンがついてるよ

食文化秋刀魚秋鯖白い米

よそゆきの顔で傍観してやろう

ギャル御輿大阪力の見せどころ

四面楚歌自分で自分褒めて寝る

大阪市 川久保 睦子

大根の花に気のある蝶二匹

ゴキゲンはいかがですかと哺乳瓶

すぐそばにある幸せに気がつかぬ

いい笑顔思うこちらもいい笑顔

点ほどの記憶になった初恋よ

大阪市 森田 明子

絵の中で確かに風の音がする

十六夜のすすき奏でるファンタジア

ダイエット目当て掃除に精が出る

愛犬が私の歳を抜いてゆく

決めたなら母は反対などしない

大阪市 古今堂 蕉子

絵日記のために真夏のUSJ

繁昌亭生きた落語に会いに行く

耳よりな話反応する眉毛

我家には座敷わらしも住みつかず

下腹の脂肪許可なくついてはる

大阪市 谷口 義

手遅れにならないように遊んどく

冗談のように時間が過ぎていく

大人の時間お色違いもごいます

大人ですきつちり話付けてくる

おばあさんという肩書きがついている

大阪市 津村 志華子

のど飴もうつもカリカリ嚙んでいる

人の裏知って空しい風に逢う

気楽さがくすり暮しは貧でよし

母さんの一寸可愛い下手な嘘

知らん振り見ぬ振りもして和を保つ

池田市 栗田 久子

猛暑日が幻だったような朝

がんばれと言わぬが背中押してやる

食べ過ぎへ警鐘カロリーチェックする

ちよっと愚痴まぶしい若さへの嫉妬

焼き芋の匂いに負けてのぞく店

和泉市 西岡 洛 醉

隠し事歩幅落して嘘ひとつ

虫の声秋はもう其処拍手する

階段の途中で老骨鞭を打ち

一日が無音に過ぎた無精ひげ

原爆のあの日の夏も暑かった

和泉市 横山 捷也

イヤリング六十路の耳にゆれている

良い知らせばかり聞きたい僕の耳

初掘りの不揃いの芋十五夜に

また一つ指切りをして後悔し

凡フライばかりの過去を振り返る

泉佐野市 山本 蛙城

こだわりは捨てなさいよと千の風

歩のままに真つ直ぐ生きてきた誇り

日々感謝小さい夢の実るたび

野仏の擬態で今日をやりすこす

ここだけの話飛び出すワイドショー

茨木市 藤井 正雄

傘がいる予定変更して午睡

初恋の遠い記憶へ波の音

末の子が忍者を真似て向こう傷

タクシーで帰ると違う街に見え

孫の守りお役御免の風邪をひく

大阪狭山市 矢野 梓

太閤の眠りを覚ます薪能

古里の道は昔に戻る道

心配をかけまいとする空元氣

遠出する今しかない決めて立ち

口下手が褒める本当かと思ふ

交野市 山川 日出子

思案せず早く直そう古い橋

夕焼けよいろんなゆめをアリガトウ

ホームラン王子は佐賀の副島君(高校野球)

4Bを田辺聖子はちびるまで

農水相反省内閣また反省

あつと言いきやつと言うからまだ若い

惑わずに惚れたといえ上機嫌

ジョッキ手に時事放談の秘密基地

狙われてまた霊園のご案内

閻魔とは裸の勝負するつもり

交野市 森 本 弘 風

蝉の声か細くなって秋を呼ぶ

駅前の案内芋掘り栗拾い

若い娘のヘソ出しルック減って秋

秋空を切り裂く白い飛行雲

真青な空に音だけ飛んで秋

交野市 田 岡 九 好

謹んでお受けしたのがあの始末

冷や奴国産大豆という奢り

高そうだなプキン折って立てである

見馴れない顔もまじってクラス会

宿題をどっさり持つて孫が来る

河内長野市 坂 上 淳 司

安住の森奪われた象の乱

森枯れて白骨化する珊瑚礁

娘の出したほろから妻は外出着

愛着があり捨て切れぬほろと居る

パッチワーク檻襖控え目に自己主張

河内長野市 村 上 直 樹

あつと言いきやつと言うからまだ若い

惑わずに惚れたといえ上機嫌

ジョッキ手に時事放談の秘密基地

狙われてまた霊園のご案内

閻魔とは裸の勝負するつもり

河内長野市 井 上 喜 醉

ストレスをためて辞職をした総理

思い出の中で燃えてる遠い過去

木魚にも鐘にも負けぬ寺の虫

林道も秋真つ盛りすすき揺れ

逆転で奇跡の扉あける虎

河内長野市 水 谷 正 子

対岸のテロ飛火などせぬように

美しい瑞穂の国はテロ知らず

少しでも申し訳なく嘘交ぜる

口笛を吹いてピンチを切り抜ける

モノクロの映画の中にわが青春

河内長野市 植 村 喜 代

夏風邪か暑さかひと月も寝込み

熱があつても起きて先ず食べる捲え

目覚まし時計ならず今朝の雷

すぐ枯れるねと言いつつも娘が墓参り

堤防の夕日に走る幼い日(夏の思い出)

岸和田市 井 伊 東 吉

岸和田市 堤 植 代

坊ちゃんのわがまま飛びだす辞任劇
メイドインチャイナに不信抱く世界
協会と親方の責問わぬまま

見直したよくぞ頑張るタイガース
予測以上高いクーラー電気代

岸和田市 森 元 ふみよ

知人逝き疎遠の友と語る通夜

なにげない挨拶して爽やかに

真夏日の新聞に載る冬ファッション

なつかしい味を見つけて若くなり

好きな事好きな時間に出来る幸

岸和田市 岩 佐 ダン吉

どん尻でゴールの汗がいとしいね

ありがとう両手で水を受けている

薬漬け豊かな国にある老後

道ふたつ汗を選べと母の声

怨みごとと言わず残留孤児が泣く

岸和田市 小 島 笑 司

岸和田でダンジリのない新開地

ダンジリを地車と読んでるのは老母

ゆつくりとダンジリの後バスが行く

エイヤコリヤ寝言いう子に母の笑み

親戚が絆を結ぶ秋祭

天国と地獄のような内と外
うらめしく天をみつめて雨を待つ

時ばかり余っています新老人

無茶苦茶につかった膝にツケが来た

簡単にオベといいはるお医者さん

岸和田市 土 橋 房 枝

六十路まだチャレンジ精神持っている

人生は挑むことだと師の教え

自己流で育てた子供自慢の子

寂しいと思えば寂し秋の風

リストラで家族の愛が重くなり

岸和田市 雪 本 珠 子

今恋に脳も心も酔っている

ライバルと競い合ってる恋舞台

何気なくこぼした愚痴が火の種に

沈黙を破って貝が口開く

ポリシーで家族持たない猫のボス

岸和田市 原 さよ子

今飲んだ水が吹き出るこの暑さ

背の曲り老勲章と医師褒める

ひる寝する邪魔せぬようにする昼寝

即席にひと手間かけた母の味

頑固でもよし健康な夫がいる

堺市奥 時雄

老社長新人秘書とかみあわす

足長の秘書を従え老社長

老社長茶飲み友達手放さず

若社長あいさつまわり飽きてくる

左遷地で期待されない椅子が待つ

堺市和田 つづや

余裕ないベルトが語るリバウンド

この醤油玉子かけ飯御用達

食材の旬をなくするのも文化

赤とんぼ郷愁のつぼ押ししてくる

真夏日も終りでしようとな法師蟬

堺市石堂 潤子

二人居の否応無し of 厨事

十一階でんとう虫が来てくれた

ブランコに乗る子が見えぬ散歩道

寝た切りにならぬようにと万歩計

秋風にひらひら蝶と目が合うた

堺市矢倉 五月

どさくさに紛れ憂いも片がつき

建売のひとつ残った車道側

甘い点つけられたなと気が滅入る

五分ほどぐつと寝たので出た元氣

許すより許された事数知れず

堺市西村 りつえ

堅い話アバウトに聞く炎天下

楽しげに手話がリズムに乗っている

やさしくてどの王子にも秘めた自負

欲しいのはずけずけ言える肝つ玉

挨拶もマニユアル情も薄くなり

堺市宮本 かりん

朝の夢母の余韻がいとおいしい

童謡で二人の空気がなごみだし

息止めて次の言葉を待っている

噛みしめた喜びじわり全身に

茜雲今日を明るくしめくくる

堺市加島 由一

お隣は松茸うちは茄子を焼く

神様も匙を投げてゐる酒の癖

先に来てわつと騒いでいなくなり

日曜の散歩秘密の立ち飲み屋

心まで見合い写真は写せない

堺市源田 八千代

観衆も選手も灼熱の地獄

張り合いが脱けるライバルの引越

カルチャーがユーストレスとして根付き

遺産分けの積り敷金出してやり

名月に乾杯古希の誕生日

堺市 齋藤 さくら

吹田市 木下 敏子

国民のための政治が頼らない

居眠りをしながら愚痴を聞いてくれ

缶ビール一本だけでよく眠れ

あとひとり足らない時に声掛かり

肉よりも秋刀魚うまいと酒を飲み

堺市 山本 半銭

遠花火氷金時食べながら

送り火の燃えて御霊も帰り行く

母似だと知ってる人はもう居ない

ええとこはみんな私に似てる孫

怠けてる異常気象の所為にして

四條畷市 吉岡 修

うかうかと手綱ゆるめた下り坂

今までもこれから夢横におく

進むにも退くにも一度踏んばろう

命までよこせ言うてるような税

こんな時ギャグを言うから責められる

吹田市 早川 清生

雨月更け切ってもうない胃が痛む

話し下手手術の痕を見せている

薬依存症とは医師の方だった

妻にいう重要事項便のこと

ニュースシヨウ国中凶の日だ今日は

予想して大根の種蒔いている

待っている雨は降らない畠の土

鈍感になってにこにこ笑つとく

カラオケのマイク握つて若返る

お好み焼き食べて仲良く年をとり

吹田市 瀬戸 まさよ

孤独にも耐える気力の有無を問う

白桃をつるつと剥けば亡母の顔

頑張った店も時代の波に消え

あきらめています日本は地震国

甘くない西瓜も飾りバイキング

吹田市 須磨 活恵

九十七歳眠るがごとく母は逝く

いずこから螢一匹母の通夜

数珠くれど悟りに遠く仏の灯

プライドをまだ捨て切れぬ肩パッド

秋空のロマン広げるいわし雲

吹田市 大谷 篤子

ポケットの底に洗濯されたメモ

地球儀の水が溶けて飢えが来る

氷みず胸の疼きに滴らす

身に合った風を泳いでいまの場所

道端の石は生い立ち話さない

吹田市 野下之男

突いては宝の山を見付けてる
庫出して米画スターを懐かしむ
父さんは口先だけのクッキング
妻からの剛速球を受けられず
一豊の妻に成れとはよう言わん

高槻市 井上照子

卯の花の主幸へ作家慕い寄る(瀧本きよし様を悼む)
目の手術気になる兄が落ちつかぬ
いくつまで生きても恋の夢を抱く
医者通いまた服を買うまだ女
文句言う男よ自分がやれるのか

高槻市 生田義一

衰える老いを励ますカラ元気
その話何回するのと孫あきれ
妻入院何も出来ない不甲斐なさ
やっとこさ立った途端に電話切れ
マスコミは朝青龍で大もうけ

高槻市 指宿千枝子

平和はけしそうだと猿沢の亀
二人きり星の話で間をつなぎ
移り行く四季に遅れてついて行く
りんどうの清しさ愛でる九月なり
空の青比べるものは何も無し

高槻市 杉本義昭

温暖化秋の出番を惑わせる
かすんでる恋の惑いのおぼろ月
泣きに來た海が涙を吹きとばす
無職だが妻の過密なスケジュール
美しい国もろくも先へ延ばされる

高槻市 佐甲昭二

これ以上褒めると人を傷つける
二度とないチャンスだ思い切り粘る
ふところの深さに鬼も棲まわせる
自分史に罪の臭いがするページ
成功の秘密を聞かれ運という

高槻市 峯村勲弘

自分史を化粧しました少しだけ
腹式呼吸ついでにつまむ二段腹
下駄の音カラコロと鳴る明日は晴れ
正倉院古代の技に出合う午後
あこがれた彼女白髪僕は禿

高槻市 左右田泰雄

部屋中を造花でかざる共稼ぎ
不景気は波打際で押し返す
混ぜこはん炒めるパパのフライパン
自己中の公私混同すぎまじい
ラスト見るまでは帰らぬ火花客

高槻市 執行 稲子

重たげな素振りは凶の印かも
屋根裏で春だ恋だと姦ましい
ドクターのさっぱり解けぬ頭文字
山芋の痒さは忘れ美味に酔う
好まない下戸で送迎任される

高槻市 富田 美義

深酒をさせる相手も重い荷を
この胸に迷彩色が紛れ込む
半径を伸ばして幸とすれ違う
炎天下に罪な巨体のハイヒール
贅沢が居候する太鼓腹

高槻市 乙倉 武史

瓢箪から駒待望の永田町
冷や飯におさらば民主点火する
柔道も相撲も本家形なしに
七転びして人生の機微学ぶ
秋茄子の匂へ仲よく嫁姑

高槻市 西谷 治三郎

どの局も食事宴会よく食べる
若作りごまかし効かぬ咽喉の皺
パンの耳年寄り好きで孫食べず
改革は増税のこととは知らなんだ
物不足清貧のころ事件無く

豊中市 安藤 寿美子

ふり返る私の道はミスだらけ
道草をくった時間もあつてよし
この辺に月出てるはず雲にらむ
もう一寸待てと地獄の鬼が言う
ボロボロと負ける阪神テレビ消す

豊中市 岸田 知香子

刀折れ矢つき八十路期限切れ
老人の日まで続くか熱帯夜
二十年まだ持ちますと医者の方
夏の宵オペラに酔った野外堂
白髪に妖怪重ね泣きじゃくる

豊中市 坂上 高栄

東京裁判六十年の走馬灯
敗戦の痛み逆なでする裁き
敗戦の慰霊に唄おう海行かば
特攻の年齢を数える親も老い
マウンドを飛び魚の如ハイキャッチ

豊中市 江見 見清

夏帽子目深で美人だと思う
お宝と決めて鑑定には出さぬ
帽子には電話と名前書いておく
無料だという勧誘が長すぎる
家事をする夫が猫に蹴躓く

豊中市 水野 黒 兎

他人には散歩にみえるジョギング

そら豆の青を肴に夏を飲む

頂上へあと一息の岩清水

雑踏のひとりひとりに目的地

花に水のどにビールの暑い夏

豊中市 山 門 タ ミ

あの世への片道切符持ってます

落ちこんだ私に気力くれる孫

話したい友は遠耳娘がかわる

絵手紙の短い文に友の顔

いただいたオジャコで御飯至福です

富田林市 大 橋 鐘 造

湖を盃洗にして舟遊び

見つめれば咲くかも知れぬ恋の花

果てしない欲望抱いて病む人科

賞味期限過ぎて男に味がでる

笑顔さえ有れば越せない坂はない

富田林市 池 森 子

深追いをすれば溺れる自尊心

句読点打って秋彩にも染まる

御仕着せの愛少年の破裂音

無欲にはなるまい秋がまた巡る

少し狂って愛の深さを推し量る

富田林市 片 岡 智恵子

お人好しのカメラは他人ばかり撮り

向い風さけて二番手走ります

いる褪せた花は何にも喋らない

おいと言う名前の妻が元気でず

落し穴掘って忘れていた不覚

富田林市 中 井 ア キ

世話好きで梓をはみ出す老母である

力水つけてくれたは好敵手

ワンチャンス逃してからの下り坂

振り向けば影がニツコリしてくれる

携帯と地図を味方にひとり旅

寝屋川市 平 松 かすみ

じいちゃんが走る雷恐いから

スーパ―の梯子で出来た夕御飯

若いのに勿体なくもホームレス

真冬には皮ジャン着てるホームレス

やさしいなゴロゴロ水をお土産に(吉野)

寝屋川市 森 茜

円空仏ふつつふつと慕わしい

田毎の月浮かべ安らぐ千枚田

忘れよと言う神さまに慈悲がある

Gパンがおなかあたりでそっぽ向く

満腹のからすが隙を見せている

寝屋川市 籠 島 恵 子

羽曳野市 安芸田 泰 子

噂はうわさ私が変わることはない
生き下手と言うが自分を持つてはる
記入例書いて私を指図する
目につかぬ所はいつもイイカゲン
どこへ行ってもおんなじ物がある日本

寝屋川市 太 田 とし子

神様に任せた命気を遣い
新聞を替えても政治変らない
世は不信自分のからださえ不信
今日一ト日蟻を百匹ほど殺し
親と子に元気があった口喧嘩

寝屋川市 富 山 ルイ子

この世のこと全てこの世でけりつける
子供らが親を成長させてくれ
ありのままのわたくしを見て下さい
娘夫婦フランス旅行から戻り
海外は何処も知らずに逝くだろう

寝屋川市 江 口 度

民営化またも儲ける会社出来
都会の情報知らせてくれる友が居る
神様が言おうと煙草止められぬ
夜中に目覚めて冷房切り忘れ
久し振りの友から電話すぐ切れず

招かない人にも開く自動ドア
夫婦とも家居を好む軒しのぶ
冷房のデパート巡る空財布
帰省子は日がな一日寝て昏れる
年金の暮しへ欲はほどほどに

羽曳野市 徳 山 みつこ

美しく安らかミアと名付けられ(次男一家訪ねて)
タクト振るこの小さき者重きもの
断崖の視野いっぱいミシガン湖
靴に砂太古のかげら持ち帰る
来年へ笑顔を残すエアポート

羽曳野市 吉 川 寿 美

罪一つ許してらしさと戻す
福祉切り捨て老後のプラン瘦せてゆく
蛇口から漏れているのは妻の愚痴
平成の彦左を期待舛添さん
夏が逝く方程式の解けぬまま

羽曳野市 酒 井 一 壺

人間の群ほど怖いものはない
無信心罰の当たらぬのも不思議
無の心これほど強いものはない
正論を生き甲斐にして縁の下
いい夫婦決定権は妻が持ち

東大阪市 安永春

意地悪なひとほど優しさを求め
満月を友と観てるかメールする
オホホホと笑うて過ぐす山の神
エッセイを書き上げ肩の荷をおろす
一途な友と終り良ければすべてよし

東大阪市 笠井欣子

辛辣なジョーク投げ合う友であり
寡婦となりつば広帽子似合う友
さわやかに車椅子から会釈され
百薬の長もこの頃控え気味
よく喋り一人で笑うセールスマン

東大阪市 北村賢子

国民の金を奪って悪びれず
大黒柱なのに居場所の無い親父
神仏に縋ることのみ増える古い
熱帯夜生きていることを確かめる
たそがれて好きと言われて面映ゆい

東大阪市 中岡 妙

遠雷に天然シャワー期待する
医者からの三下り半を待つてます
錠剤の間仕切り増やす薬箱
朝風呂で今日の暑さに立ち向かう
目覚ましのように止めれぬ蟬しぐれ

東大阪市 米田水昇

鳥ないて目覚める朝のありがたさ
絵の具とく画面に花をあふれさせ
読み書きは忘れて辞書と仲良しに
内助の功で輝いたはる旦那さま
美酒に酔う寡婦のきままな旅の宿

枚方市 海老池 洋

御立ち台胸張る人と照れる人
自家菜園フリーに曲がる茄子胡瓜
親孝行した気にさせる墓参り
冷房の温度で妻とよく揉める
夕立が止んだと弾む法師蟬

枚方市 丹後屋 肇

撒水の車道に止まる揚羽蝶
逃げ水にチンチン電車溶けてゆく
噴水のガラスが白くなる反射
ギャラリイが息詰めて見るオングリーン
敵陣の野次にウインクして見せる

枚方市 二宮山久

孫を追うカメラはじける運動会
空の春秋は足音たててほら
今日もまた元気のもとのカンビール
再職へ朝のラッシュ時身がまえる
夏バテも無しで乗りきるコップ酒

枚方市 寺川 弘一

八月は傲慢になる積乱雲

脳細胞と疑問符が減り老化する

健康な人死んで骸骨シンメトリー

風見鶏千の風には振り向かぬ

地球に未練死んで化石になるつもり

枚方市 伊達 郁夫

ニンゲンの天敵それはヒト科です

超高層ねぎも三つ葉も雲に乗る

音消したテレビの前でみかん剥く

孫からの絵文字の謎を解いている

くちづけをするかも知れぬ歯を磨く

枚方市 安達 忠央

孫三つばーばの愚痴を聞かされる

有頂天いい忠告も無駄になり

リッチにも素寒貧にもくじ無情

方言をすんなり出せる友と酒

頑固だがやっぱり頼り甲斐がある

藤井寺市 若松 雅枝

夏休み家系図出して話し合う

正道を逸れたら出口見付からぬ

一人生き難問奇問にぶち当たる

宅急便蓋取る時のおたのしみ

売出し日一番欲しい物が無い

藤井寺市 高田 美代子

誕生日歳は忘れたことにする

ふたありの前に沈んで行く夕陽

秋になったら私放浪者になろう

花束を贈るつまらない役割り

野良猫に餌をあたえる人がいて

藤井寺市 鈴木 いさお

今年から老人会のニューフェイス

世間へはおしどり夫婦演じてる

反対の手を高々と挙げる意地

近所へは娘の離婚言うてない

甲子園一人ひとりが皆主役

藤井寺市 中島 志洋

年の功忘れ上手が板につき

若作りちよつと照れてる首の皺

仲直りの酒でまたもや口喧嘩

言いすぎた後でお世辞を付け加え

嘘でよい甘い言葉の欲しい夜

藤井寺市 太田 扶美代

挑むのは今だと影がそそのかす

ある日フト自分の歳に蹴躓く

残暑厳しくわたしのミスを責めている

一日を素顔のままの花仕事

もう秋の段取りがある母の胸

箕面市 広島 巴子

行きは晴れ帰りは雨の里帰り

無意識に亡父とおしゃべり墓掃除

おはようと眠気覚しに声を出す

夏痩せもせずに味覚の秋迎え

ビールからお酒に変わる鰯雲

守口市 井上 桂作

カーニバル祭りの好きな浅草ッ子

川柳の寺で名高い龍王寺

街角に新しく建った川柳碑

自信ある男の白紙委任状

アルバムは過去より未来道しるべ

八尾市 宮崎 シマ子

素うどんを長続きする友と食べ

見つめてもちつとも落ちて来ぬリング

掃除夫も兼ねて駅長だけの駅

泡となりしあの一コマは幻か

秋桜静かにわたる千の風

八尾市 吉村 一風

ありがとう言えて嫁にも見直され

雑草の小さい花と話す

夏痩せをしないビールがうまいから

薄味に慣れて人間丸うなり

充電をし過ぎて体おもとなり

八尾市 生嶋 ますみ

悲しみが続いて心まで乾く

日光浴させた座布団人を恋う

秋の気配おこのみやきが近くなる

ただ今を待つてゐる人は遺影だけ

余生まだすこしやる気を溜めている

八尾市 村上 ミツ子

地元での世陸意外に熱くなる

もう誰も笑ってくれぬ転んでも

失敗談他人の役に立てている

三界に家無くつても気にしない

安心の明日へ続く遍路道

大阪府 澤田 和重

日本の四季順番を間違えず

家族みな脱がせ洗濯機が踊る

二次会を抜けて一息つくロビー

年金のはいる日孫がまちかねる

交番の裏で空巢に狙われる

大阪府 米澤 俣子

そのうちに何と都合の良いことは

若い若いと笛を吹かれてまだ踊る

まだ女うなじの陽焼け許せない

能書きはほんとか速効の薬

完璧で隙のないのを嫌がられ

大阪府 初山 隆盛

秋夜長ほとけに聴かすセレナーデ

世渡りの下手な仏に従いてゆく

人の世や運否天賦の風の中

新鮮なサラダ山ほど愛を盛る

水掛け不動酒池肉林を見てござる

大阪府 桑田 ゆきの

私だけピント外れで撮られてる

芋の葉に一つところがす露の玉

自己流の手話で足ってる要介護

便利さのネットが怖い裏の顔

携帯もパソコンもなく平和です

神戸市 田中 章子

たまになら棚ぼたの夢許されよ

幸せと思つた途端すきま風

甘言にひたつていたいバラ百本

天の川ミルキーウェイだとわかる

核家族近くの他人優し過ぎ

神戸市 山田 婦美子

青春の時を持ちよる同級会

手を繋ぐ同級生という安堵

初恋の人の白髪は似合わない

孫自慢で盛り上っている酒の席

装えど写真は真実隠せない

神戸市 山口 光久

わたくしの鮮度を保つ唐辛子

皺かくすためのコストが高くつく

ふところに札束あつて頭が高い

大海へメダカの夢は無量大

七人の敵を恐れず泳ぐ雑魚

神戸市 山口 美穂

夏バテと言いつつ三度ちゃんと食べ

睡魔には勝てずに明日へ積み残す

明朝の目覚めを信じ床に入る

ひとり言ちらりと犬が目をあける

ナイター中継テレビの前の評論家

神戸市 伊勢田 毅

古希過ぎて試行錯誤のクラブ振る

墓地投資リフォーム保険昼電話

悩みなどない顔をしてクラス会

個人情報全部握って飲み仲間

トンネルでピーポーの音に身構える

相生市 中塚 礎石

靴下を脱いだ女の夏の海

稼いでも高が知れてる缶集め

除草機が納屋で寝ている田草取り

年金が減れば減ったで生きている

この人と信じた握手力入れ

芦屋市 黒田 能子

内視鏡見たくないもの見つけ出す
三叉路の風が迷いをつれてくる
エアコンに慣れ自然の風がなま温い
走り出したら止まらない好奇心
他人から見ればなあんだという宝

尼崎市 春城 年代

締め切りが近付くときは作家並み
髪の毛の茫と立つのを実感す
終の住家の敬老会に夫婦出る
軽口も少し頭の回転に
ひんやりと秋の気配よ裏切るな

尼崎市 春城 武庫坊

八月の空に漂う友がいる
夕立が小さい秋を連れて来た
公園をうろつき季節の詩を拾う
漢字使うかカナを使うか老い悩む
何もかも未完のままで今八十路

尼崎市 長浜 美籠

プランターにもそれらしい茄子トマト
いい事は無いが案ずる事もない
やっぱり我が家ホッと息継ぐ梅茶漬
同席をして傍杖に合う不覚
生きている内が華かも泪雨

尼崎市 軸丸 勝巳

傘寿すぎちよつとリツチに誕生日
時どきは言葉が詰まる錆びた脳
エコー検査画面は僕も腹黒い
長生きをして年金のモトをとる
大合併思い出の名が地図にない

伊丹市 山崎 君子

晋ちゃん饅頭一つ消えます里みやげ
美しい国バトンタッチは誰でしょう
午後の陽に耐えてひまわり待っている
午後三時わたしもひとりケーキ皿
ヘチマ ニンニク友の情は海越えて

川西市 西内 朋月

挨拶のメモを無くした披露宴
似ていると言われ鏡と睨めっこ
勉強の嫌いなところが似てる孫
鉛筆を削ると過去の匂いする
胃袋がないのに腹が空いてくる

川西市 米原 雪子

初曾孫敬老の日に初対面
朝夕に秋を運んで来る微風
気が付けば中中年になる息子
無料には無料のわけがきつとある
国中を唾然とさせた安倍総理

三田市 久保田 千代

西宮市 菊池 トミエ

京なまり暑中見舞に涼とどく
低気圧過ぎ行く時をじっと待つ
遣伝子の律儀生まれた低い鼻
思いつき朝一番の深呼吸
平凡に育ててくれた父母の愛

三田市 北野 哲男

ガラクタのようで時どき放光す
年金の割りに大きいゴミ袋
お金より心と言って募金来る
物忘れひどいと笑っている達者
大ぜいの先祖へごはん一つあげ

三田市 石原 歳子

間に合って一息いれるバスの中
御守りを拝み息子に渡してる
菜を刻む音も軽やか子の帰省
色いろな事があつたが落ち着いた
地下鉄に乗って漫才想い出し

三田市 堀 正和

無農薬器量好しから差し上げる
リストラで後継ぎ出来た小商い
苦勞人らしい愚痴まで聞いてくれ
談合の匂いが残るのし袋
せめてもと時々作る恋の詩

インテリの顔で読んでるマンガ本
楽しさは年まどわせる夏帽子
ワntenボ遅れて今日も生きている
凜として咲くサギ草に立ち止まる
背けずに枯れたふりして時かせぐ

西宮市 片山 忠

嫉妬する男をあやすでかい胸
エゴだけとはことん通す世帯主
見透かしたように小銭でケリつける
苦しんで下さい過去の仕放題
向き合っていれば誤解も解けてくる

西宮市 西口 いわゑ

忘れ得ぬ恋が未だに胸に住む
やんちゃだった息子やさしくしてくれる
心底を隠すが如きサングラス
一合の酒で平均とっている
慌てればストッキングがなおからむ

西宮市 牧 潤 富喜子

お隣の苦瓜こちらでぶら下がる
要領の悪さ代々搖ぎなし
戦争は益になる事何もなし
合理化にこぼれた人が病んでいる
モンゴルはバブル唯中 大相撲

西宮市 亀岡哲子

雷が連れて来たのか法師蟬
百咲いて百の夢散るさるすべり
京生れ浜っ子育ち亡母いとし
飾り団扇風鈴はずしちよつと秋
美しい日本を追うた蜃気楼

西宮市 井上松煙

年の割元気なだけで感謝せな
無駄口をたたく仲間がいてくれる
窓ガラス拭いて陋屋リフレッシユ
無駄話ふつと気が付く処世術
自らに納得をして見比べず

西宮市 山本義子

これだけは心がけてる紅ひとつ
早すぎる世間の話題カタカナ語
お砂糖の適量守る身を守る
辛口の忠告聞くが不実行
十一桁騒いだわりに使わない

西宮市 坪井孝一

みどり色希望という字よく嵌まる
年数へ懸命に生考える
スロライフ乗り過ぎたボク喝入れる
小さな嘘笑われている青い空
初恋の色はピンクの外にない

西宮市 緒方美津子

バーゲンに夫待たせて無駄を買い
あのお人帯立ててもまたきはる
祖母と母偲んで作る盆だんご
ハイヒール歩く歩道で休みはる
ダイエツト急ぎなさいとウインドー

西宮市 秋元てる

若いねに悪い気がせぬから困る
幸せだったアルバムとまた話してる
無駄話延々薬より効いた
亡き友の娘等もよく似たしゃべり方
供花だけは身の程知らず許されよ

姫路市 古川奮水

熱くなり蟬も暫く昼寝する
志摩の旅記念に真珠指輪買う
古新聞祖父が括ると緩まない
保育園通い聞えぬ子守唄
柿ぶどうメタボに辛い食の秋

奈良市 天正千梢

時という宝をしかと大切に
遺憾に思う襖すんだと茶を濁し
旅三日せわしく動いている諭吉
二日酔い鏡が答出してくれ
人間国宝と言われている孤独

奈良市 米田恭昌

四度目の過ち仏惑わせる

覚えてたて早々メールでくる無心

ステージ衣装映えてはあちゃん歌手気取り

新社長早々謝罪のリハーサル

社保庁の断罪舛添に任す

生駒市 飛永ふりこ

好きだからボーカルフエイス押し通す

全体を視野に入れないおせっかい

しんどさをふっとおろせる屋台の灯

言い足りぬ位で丁度輪がぶれず

すすきの穂肌の荒みを撫でられる

橿原市 安土理恵

ねじ花のねじれ拍手をしたくなる

あとはただ祈ることしかない命

火遊びをしました線香花火です

いい顔で笑う他人の中だから

秘すれば花一つ二つはある内緒

香芝市 大内朝子

蘇り闇夜を抜けた青い天

ときめきが一人笑いをするウフフ

一病の機嫌予定を狂わせる

車間距離置く友情の長続き

棲みついた守宮に名前つけてやる

大和郡山市 坊農柳弘

コスモスの幻想晩秋を掬う

戦後史の記憶を手繰る麦の飯

季の巡る早さにもみじ馴染めて

まぼろしを一つ削って月に酔う

温暖化秋を忘れた女郎花

奈良県 渡辺富子

ケータイオフ風に任せるひとり旅

鈍行のリズムで銀河へ行くつもり

ボクの野心虹の橋からこぼれ落ち

再起するヒントをくれた茜雲

アイドルの人気を煽るスキャンダル

和歌山市 福本英子

従っていても子らには煙がられ

この夏は負け組に入りそのまんま

鰯雲に早くなりたい入道雲

予報士まで憎い猛暑へまだ残暑

パンの耳生さるフレンチトーストで

和歌山市 古久保和子

萩の花零し石段登りきる

妹は妹のまま歳をとる

人參が選り分けられたカレー皿

おかたは妻の使った電話代

自転車も油切れして秋深し

和歌山市 喜田 准一

立ち止まる事は許さぬ群れに居り
凜として見せる甘えが愛おしい

だんじりが出ると頑固に輪を掛ける
逃げ道と愚痴いう場所は開けてやる
ケータイが繋がらないと落ち着かぬ

和歌山市 楠見 章子

コンパクトにここに顔のリハ―サル
ケータイを持つと勇気が出るらしい
図書館の隅で眠たくなってくる

ガラスケースの中でケーキが吠えている
シヨッピングのときめき夫に解るまい

和歌山市 田中 みね

わたしの前でアンチ巨人と言わないで
我武者羅に走り続けて来た荒野

十人十色濃い性格もいて仲間
どの名前で呼んでもタマは振り返る
先走り物言う口が疎ましい

和歌山市 武本 碧

トンネルの長さ試練の道だろう
運命に育てられたか力瘤

許されぬ愛へたつぷり解熱剤
手応えがあつて全身耳になる

明日は明日今日でなければ画けない絵

和歌山市 松原 寿子

噛みしめる母との絆思い出よ

おさまらぬ波紋のなかにある試練
ワンシートずつ記念切手にはまり込む
岬がくれの宿がふたりに丁度よい
猫いつびき乗せ助手席にある平和

和歌山市 細川 稚代

再会の約束がある岬の灯

シルバ―シートゆづってくれた涼しい目
次々に限界が来る古い家

末席でするとい意見言う人だ
ふんざりがつきかねているデイケア―

和歌山市 堀畑 靖子

温度差を埋める言葉を模索中
楚々とした人を探しているそんな

ティータイム心ほぐれる人という
即答をさける気まづくなりそうで
進化した人にケモノが増えている

和歌山市 玉置 当代

セピア色の父母の写真を手離せず
其処彼処地球が歪む温暖化

癒やし系と言われ良いやら悪いやら
心技体バランスとれず泣く土俵

虫の音に夏の終わりの遠花火

和歌山市 松尾和香

虫の音に癒やされ歩く熊野路
煩惱を断つて人生癒やされる
信じ合うボケとツツコミ夫婦道
運動会見る楽しみに並ぶ祖母
途中下車岬の夕陽見るひとり

和歌山市 宮本三喜夫

自覚なき横綱ボロを曝け出し
酒気帯びで競技停止の処分受け
期待と信頼を裏切るな頑張りな
関空も二十四時間空港完成す
暑さです緊急事態うるたえる

和歌山市 福井桂香

ことさらに暑い六十二年目の蟬しぐれ
猛暑日にヌーッと首出す百日紅
暑いのに大きな顔でひまわりは大嫌い
九百ヘクトパスカル日本列島水びたし
食卓に秋の味覚がわいわいと

海南市 堂上泰女

病院を出てデパートに招かれる
傘をさす二人の仲は晴れマーク
新作の服に溺れてまだ女
生き急ぐツクツクボウシ寂しいな
真心で尽くしてくれたナース達

鳥取市 録沢風花

残暑なお体内時計狂わせる
熱中症何とか無事に越えて秋
一歩ずつ掴まりながら下りる古い
草引いた庭を眺めてティータイム
スビードがだんだん早くなる暦

鳥取市 有沢せつ子

若い日に流行った歌は忘れない
突然の呼名とつさに声が出ぬ
朝の雨運動会のある花火
雨雲が徐徐にめくられて青い空
ビリの子に声援多い父兄席

鳥取市 武田帆雀

ノムさんのほやき絵になる記事になる
先生と言われて菊に弟子が付く
菊手入れ失敗作も数のうち
せせらぎを背中に聞いて菜を間引く
虫食いのつつかい棒で頼りない

鳥取市 永原昌鼓

付き添いのベッド大の字にはなれず
今日もまた固いベッドで朝を待つ
聴診器夫と一緒に深呼吸
リハビリはナースの声に励まされ
売店の味に馴染んだ長病

鳥取市 夏目 一 粋

ユニークな人だ仲良くしたくなる
いい人と思っているが蚊は殺す
貧乏の方が子どもは元気だね
リリーフのいない身内の侘しさよ
お帰りと聞こえたような千の風

鳥取市 太田 幸枝

汗かかぬ金水泡と消えてゆく
貧乏で燃えた昔がなつかしい
小柄でも子供五人の母となる
かすがいのはずの子供が仇となる
投げかえす言葉も出ない認知症

鳥取市 奥谷 彩子

定退の錨降ろして阿吽の二人
鈍行で乗りつきながら行く余生
子が巣立ちこぶし開いて無をさとする
命の火もやす仏の手を借りて
炎の芽内に溜めてるプチトマト

鳥取市 植田 一 京

遠い日に帰る気のある紙風船
メロドラマ欠伸しつつも見てしま
お喋べりにブレーキ効かぬ同窓会
元気出すためにしてます若づくり
テンポ遅い私を待たぬ歳月よ

鳥取市 岩崎 みさ江

介護する月日いただく慈悲もある
酒が好き宴が好きなの通夜
哀しみを溜める器が小さ過ぎ
天国で乾杯彼のことだから
夢追ったドンキホーテに悔いはない

鳥取市 中村 金祥

社保庁がそもそも論で明け暮れる
定退へまだ坂道を登ってる
初恋はトマトかじった時のこと
草原の空へ横綱伸びている
肩の凝り消えて青空美しい

鳥取市 埴 寛子

温暖化地球もうんざりしています
つづく台風や々と秋風つれて来た
挽き肉の肉じゃがウチは大家族
おいくつと聞かれる度の罪悪感
美しい国この世で見せてほしいもの

鳥取市 福島 庸二

生き方を変えストレスと縁を切る
胃カメラの苦痛吹き飛ぶ異常なし
無垢な目に洗浄される我が心
謝りのことは一つで輪が和む
言わなくも目は口ほどに訴える

鳥取市 田村邦昭

ひんやりとした心には人は来ぬ
五十年やつと二人のリボンです
流れ星少しとまつて聞いてくれ
マネキンと勝負するの顔に聞く
泣くよりも笑うがいい楽天家

鳥取市 山本益子

ゆつくりと終着駅へ着く修行
雲に架け橋恋の想いは高望み
双子ちゃん可愛い呼ぶと同時に泣く
空寝して人の悪口盗み聞き
いわし雲大漁誘う予感する

鳥取市 土橋はるお

防災訓練過ぎると恐怖症になる
連れ連れて協議はナイターに
ナイターの混浴露天風呂にゆく
腹立ててタマゴを投げて何になる
別嬪の横に予約の席取れず

鳥取市 土橋睦子

コンビニで男同士の照れ笑い
ひび割れた鈴になつても母は振り
薬より姑に相槌打っている
美しい一会の旅に出逢う町
土砂降りが二人の愛を滾らせる

鳥取市 加藤茶人

アルツカナ認知か老いかよく忘れ
赤とんぼ母の化身か肩を舞う
ひと回り大きくさせたのは挫折
八月はヒロシマという後遺症
恋というフェロモン少し派手を着る

鳥取市 春木圭一郎

いいところあるなら悪いところもある
前向きに楽しむ気持ち笑い呼ぶ
生き方のヒントあげたりもらったり
ユーモアが生きる弾みについてくる
好きになる努力へ仕事天職に

鳥取市 吉田弘子

五ヶ国語ほど聞き分けるポチを飼う
忘れたい過去が時時顔を出す
一過性火傷だったね恋終る
不眠症虫の音色に癒されて
コンベアに乗って出てくる同じ顔

鳥取市 倉益一瑤

負け戦噛んだ奥歯が欠けていた
それからのハテナハテナが面白い
カルメンのバラには毒があるらしい
引力に素直リングも贅肉も
出鱈目な人がお金をよく稼ぐ

鳥取市 福田登美

メダル万歳女子マラソンに感無量

秋風に朝顔やつと持ち直す

刈り終えた田圃に孤独鷺一羽

知恩院へ参詣心おだやかに

学生の孫と一緒にぶらり旅

鳥取市 岸本孝子

男の夢女が紡ぎ丸く住む

五体満足美人でなくていいのです

秋風に肌の手入れをせかされる

裏表ない顔だから友が寄る

遊ぶ金欲しくて仕事苦にならず

鳥取市 岸本宏章

老人にとってもやさしい弱冷車

穏やかにおだやかにでは明日がない

予報士も美人でないと勤まらぬ

外人にモッタイナイを教えられ

いつの世もどじなもぐらが叩かれる

鳥取市 中宇地秀四

刺のある真つ赤な花が気にかかる

嬉しいが困った顔をして見せる

有識者屁理屈つけて飯の種

夕焼けに鴉も居なくなつた過疎

名言か公約守る馬鹿はない

鳥取市 宮脇道子

数々の薬に頼り老い豊か

日々迫る老いの津波がどんぶりこ

この顔で十代もあり恋もした

海ゆかば忘れたいけどなつかしい

夢だけは楽しい夢を見たいもの

鳥取市 福西茶子

末っ子に生まれ兄妹送るはめ

完璧でないがそれぞれも巣立ち

ふたりして水と空気のように生き

いつまでも母は元氣と子の誤算

カッカした昔のわたし消えている

鳥取市 西川和子

逞ましい汗の匂いのする現場

投げキッスもうばあちゃんに届かない

朦朧としてもゴールは見逃さぬ

珈琲に癒されている旅疲れ

持ち寄って近所弾んでいる夕べ

鳥取市 池原天馬

過疎の村曾孫できても現役だ

ど素人の肥料さくのは草だけで

温暖化雑草だけがぬくぬくと

野菜果物外国産はさけて買う

雑草がつくりものよりよく育ち

鳥取市 杉本孝男

老いの園孫というテロ幅きかす
本心を語るに酒がまだ足りぬ
うっかりと素顔見られた鬼あざみ
十五回ドローの球児日本一
ばろかすに叱る親父の眼に涙

鳥取市 山宮愛恵

思いやり楚々とメールでやってくる
医者さまへ払うお金は先にとる
かあさんの浴衣姿に艶をみる
湯上りの裸王子がつかまらぬ
腕時計動かないのに桐の箱

鳥取市 平尾菜美

猛暑でも腐らぬ汗に甲脱ぐ
おいそれと逝けぬこの世に借りがある
あいまいな自信餅つく羽目になる
品格と向き合う風が静かです
こっそりと守り届かぬ守備範囲

倉吉市 山中康子

八つ当たりされても病夫をほっとけぬ
介護するうちが花だと他人事
道づれの酸素は病夫のたからもの
癒されてほっと窓辺のさるすべり
身の負担嫁の支えがあればこそ

倉吉市 山本玲子

青虫は野菜畠で蝶になる
茄子胡瓜年中旬の顔でいる
曼珠沙華目立ちたがりや白一本
サングラス視線が見えぬから怖い
上を見て暮らせばすぐにずっこける

倉吉市 猪川由美子

掛け違えたボタン修復困難だ
真実と信じさせちゃうメディア力
てにをはでいつも頭が一杯だ
パフォーマンズ派手にやり過ぎ女史コケる
イモづる式の悪事にトップ形無しだ

倉吉市 牧野芳光

散る時は花の心になって散る
奥歯抜けそれから長い冬になる
俺オレと言うから相槌をうった
鉛筆を削り過ぎないようにする
玄関の灯がついている低気圧

倉吉市 松本よしえ

見比べて目玉の光る鯛買う
おじぎ草ちょつと触って見たくなる
あの高い所の鐘が盗まれた
半鐘をサイレンに変え村守る
河原風呂かじか蛙の声に逢う

倉吉市 最上和枝

コーヒ―はストツプ先ずは缶ビール

洗濯機汗の匂いを食べつくす

仏壇へきょうの難問投げかける

石投げて波紋の行方見定める

鐘つくと仏がそつと顔を出す

倉吉市 野口節子

鏡三つ鳴らせ娘は出たまんま

コーヒ―で胃袋洗う日に五回

自惚れの花が竝んだコンテスト

正論を握りつぶした多数決

甲乙は有るが手塩にかけてある

米子市 澤田千春

青空へわがもの顔のさるすべり

なやみカット笑つてくらそ明日もまた

気がつけばつまずいたのは同じ石

軸は読めぬが父の形見で捨てられぬ

この休みがまん袋の修理する

米子市 野坂なみ

石になつても恐竜たちは語りだす

草を刈る草も負けじと種とばす

三十七キロ肥る薬をさがしている

懸命に生きて私の遊び下手

その日まで自分を洗い続けよう

米子市 門脇晶子

老いてより耳学問に専念す

雑木林に活性剤がおいてある

無花果が割れて話はずみ出す

秋つげる野にとまつてる赤とんぼ

何もしないでいいよ母さん生きていて

米子市 光井玲子

老いたなあ脳のバランス崩れだす

こころの広い友になんでも打ち明ける

今もなお亡母の教えが物を言う

雨あがりの石のひかりが大好きだ

うろ覚え記憶の底をかきまわす

米子市 中井ゆき

この頃は影もやさしく付いて来る

チチ口鳴く土蔵の陰に秋が来た

灯り消し目をとじ今日の句読点

うっかりと昨日と今日をまちがえた

いつの日も慈悲のお顔の地藏様

米子市 白根ふみ

無人駅秋が静かに降りてゆく

ひとり居り他人の心配ばかりする

どんぐりを支えあつてる喜寿傘寿

ひこばえをばつさり剪つて済まなくて

初生りに小おどりをして仏壇へ

米子市 青戸田鶴

一せいに綿毛がとんだ見事だな
中流がなくなる国が美しいとは
坂下るころばぬように踏みしめる
昼の月うっかり通り過ぎていた
頑張る事もうやめようと決めている

鳥取県 佐伯やえ

美しく生きるはずみに花がある
百歳のみことな言葉胸におく
太陽と握手たのしや野良帽子
たしかなものが見えて明日を子に譲る
生きているよろこび明日の米をとぐ

鳥取県 石谷美恵子

掴み取り欲の手と手が絡み合い
お役所の邪魔くさそうな手の動き
哀しみを山分けできるひとという
心なく投げた言葉へ眠られぬ
親と子のモラル介護で返す恩

鳥取県 山下節子

母さんの敬語波乱の前ぶれだ
鏡からエールを受けておしゃれする
いじめ虐待少年の記事うんざりだ
真つすぐに歩み造反などしない
ライバルといつもドローで仲が良い

鳥取県 竹信照彦

耕運機欲しいが畑狭すぎる
秋蒔きの野菜が畑打てという
畝で打つ畑に僕の汗をやる
種蒔けば雨が欲しいという勝手
煩惱の種も育てている畑

鳥取県 下田茂登子

雑草の強さ憎んで筆り取る
俎の鯉になるしか道がない
薬漬け最後は呆けがやって来た
押しの利くおとこに惚れた鳩ボツボ
寄つてたかつて病人にするファンたち

鳥取県 盛田夢路

大通り避けてゆつくり古希の坂
何事も起らないようバトロール
秋風に洗濯物がよくはしゃぐ
落日に今日が畳める缶ビール
残暑日のわたし干物になりそうだ

鳥取県 谷口次男

比べると丸い性格父の方
サヨナラの向こう側にも虹の空
秘めた味小さい旅に教えられ
あの人がいつの間にやら好々爺
そういえば糸瓜そっくり子規の顔

第103回 大阪川柳の会

日時 12月3日(月) 17時開場・18時締切
会場 北区梅田駅前第2ビル5階・第1研修室
宿題 △思う・平山繁夫△くちびる・森中恵美子
会費 △拍手・河内天笑△ロス・磯野いさむ 各題2句
千円 欠席投句 11月30日まで(会員ののみ)
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706
本田智彦宛

長電話雷の音キャッチする
百日紅女は長生きするつもり
雨上がるちよつと素直になった草
散歩道靴がおしやべりしたくなり
矢印に素直な人はついていく
愛嬌と度胸男女の位置を替え
七十年前平気でやれたバック転
悪政の見本ここには貧富の差
お隣の貧乏神と画す一線
心経を唱え凡夫の席に座す
村の子も今じゃ合併町の子だ
誘惑は人でなかったさつま芋
鈴虫が鳴いて瞑想酒を置く
耐えました やつぱり妻の重石効く
呆け封じ世話役多く医者いらす

鳥取県 松川行男

鳥取県 深田俱久

鳥取県 細田裕花

第24回 井笠川柳会誌上大会 薬

課題 「未練」

塩見 草映(愛媛県) } 共選
てじま 晩秋(埼玉県)
恩塚 治子(兵庫県)
「風 邪」
蛸原 正弘(兵庫県) } 共選
岩本 笑子(広島県)
三宅能婦子(岡山県)

応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句
(計4句)を列記し、郵便番号・住所・
氏名・柳名・電話番号・所属柳社名を明
記し応募料と共に送付下さい。

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
締め切り 12月20日(木)

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会 TEL・FAX 0865-62-6200

呈賞 各題共、天位の中から総合成績に
より句碑贈呈。その他三才入選句に賞呈。
年間賞対象

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

第27回 川柳塔鹿野みか月川柳大会ご案内

日時 11月25日(日) 午前9時開場
場所 国民宿舎「山紫苑」2F大広間
おはなし 番傘川柳本社 森中恵美子氏
課題と選者 出句締切11時半 各題2句

「快 い」 河内 天笑 選(堺市)
「てのひら」 森中恵美子 選(摂津市)
「響 く」 河原 千壽 選(岡山県)
「誰 」 西出 楓楽 選(大阪市)
「舵 」 佐々木 裕 選(浜田市)
「赤 」 政岡日枝子 選(米子市)
「馴 れる」 小林由多香 選(鳥取市)

*席題なし

会費 二千元(昼食・発表誌・記念品呈)
呈賞 優秀賞杯(副賞付)他 出席者優先
欠席投句 千円(発表誌呈) 締切 11月10日

*応募先 〒689-0405

鳥取市鹿野町鹿野1279 中原 諷人
TEL 0857-84-2100

前夜祭 11月24日(土) 18時半「山紫苑」
主催 川柳塔鹿野みか月
後援 鳥取市・鳥取県川柳作家協会他

川柳塔の

川柳讃歌

(35)

木津川 計

インテリが三段腹で様はない

小島 笑 司

解せぬことがあるもので、国語辞典のすべ
てが「趣味人」を収めていないのです。困っ
た揚げ句、次の資質を持った人と僕は定義い
たしました。①風雅を愛する人、②清貧を好
む人、③悠揚迫らざる人、④人生を楽しみな
がら生きている人。こういう人物はざるそば
を好みます。一品料理で飲み、お茶漬を専ら
としますから栄養が足りません。ですから
「趣味人」は瘦せていなければなりません。
笑司さんに納得します。インテリの体型もソ
クラテスのようでなければ胡散臭いですね。

万障繰り合わせとは「無体な

三宅 保 州

「諸事ご多端の折まことに恐縮ながらご出
席賜わらば望外の喜びでございます」との依
頼状なら保州さんも、おおそうか、よしよし、
となられましようが、頼んでおきながら「万

障繰り合わせとは「無礼千万、「ご無体」ど
ころか「無体」なのです。かつて「国民精神
総動員」なる無体極まる総動員令を容認する
新聞に永井荷風は反発、「断腸亭日乗」に
「時局迎合の記事論説読むに堪えず」と。

コマーシャル嘘でなかったのは値段

平田 実 男

芥川龍之介は「二人を欺かぬ聖賢はあつて
も、天下を欺かぬ聖賢はない」(『侏儒の言葉』)
と喝破しました。聖賢にして天下を欺くので
す。去る日、政権党の要人が「一年で五千万
件の年金を『再調査する』とは言ったが『再
調査できる』とは言っていない」と弄した詭
弁に僕は啞然としたのです。かかる世の中な
ればこそ実男さん、凡百のコマーシャルにお
いてをや、であります。

看板の地味さに惹かれ客となる

森田 明 子

太陽光線の明るさを求めた西欧と反対に、
日本人は暗がりの中に美を求めました。洋紙
はあくまでも白く、和紙は暗がり色の白さと
言う外はありません。平安朝の「もののあわ
れ」ももし火のほのかさの中に生まれるあ
やかな美であった筈です。けばけばしさに何
の趣がありましよう。

明子さんは純日本人です。ド派手の大阪に

耐えながら生きていると地味な看板に惹かれ
ます。賛成賛成、大賛成です。

土砂降りの中歩いてる下見役

岩 切 康 子

陰の人がいます。唯の陰と陰の参謀に見る
天と地の開きですが、裏の人もそうです。生
涯日陰に泣いて消えていった女性もおれば、
黒幕で暗躍する裏の人物もいるのです。

修学旅行の下見役、その旅に出る先生数人
は役得だそうです。行く先々の宿舎が下にも
置かぬもてなしです。が、探訪会の下見はほ
つたらかします。歩いているとまんの悪いこ
とに土砂降りになり……。気の毒に、世の中は
割の合わない下見役が表舞台を支えています。

満点でないから友が寄ってくる

古久保 和 子

非の打ち所のない一〇〇点満点という人物
は尊敬されても敬遠、即ち、敬して遠去けら
れます。若い頃、僕が敬愛して教えを乞うた
方は服装に無頓着でした。帰宅すると、オー
バーと背広とワイシャツを一緒に脱ぎ、翌朝
は三点同時に腕を通す芸当ぶりでした。

人間、どこか可笑しみがあ、多少は間拔
けがいいのです。失礼ながら和子さんもそん
なひとで八〇点ほどの出来、僕は五九点です。

(「上五五五」誌代表)

自選集

木村 あきら

小林 由多香

迷子札要りそう卒寿ゆく翁
じつとして居れぬ地球は回つて
夕茜ねぐらへ急ぐ小鳥たち
ふる里は優しい風が吹いている
罪ひとつ許して欲しい空の碧

小島 蘭幸

斉藤 嘉

お宮参りの空よ飛翔の産衣着て
長女もう母の貫禄だけはある
孫が去んでしまった秋になっていた
孫連れてお昼ごはんを食べに来た
お留守番孫は眠ってばかりいる

小西 雄々

塩満 敏

切り札はむやみに見せぬ男眉
譲歩する時機を覚えていた大器
未来にも釈迦は正座で説くだろう
トラ勝って六甲おろし風に乗る
とりあえずビール情けはこぼされぬ

デパートで汗が引くまで見て回る
焼酎もビールも酒もみんな好き
うなぎ焼く匂いわが家の膳にない
空缶がからから風と遊んでる
まんまるい月へ心もまるくなり
満たされて満ちてりんごは熟れてゆく
今ノーと言わねば小舟出てしまう
黙々とただ黙々とボランティア
雑草もわたしも同じ水を吸う
戦後処理まだまだ続く花鋏
夏が去り食欲わいてきましたよ
老人をいじめる政府は要りません
新しい日本はきつと出来そうです
一票をもらいもう稼ぐ総選挙
九条と鶴彬を忘れないように

新家完司

新しいノートで秋を出迎える
 そよ風に包まれている好きな人
 ちっぽけな寺には小さい鐘がある
 もう一度こどもに戻りたくはない
 灯火を高く掲げて友を待つ

玉置重人

ひたすらな鈍感力は侮れぬ
 年金に思惑がある政治劇
 朝露の花の笑顔に貰う凜
 十指みな動いて何を望むらん
 善後策まるく治めたししおとし

恒松町紅

新しいものに目がゆくまだ若い
 手料理をつまみ実のある話聞く
 我流だが意気込みだけは負けてない
 新鮮な話題を探す缶ビール
 忘れようと無理しなくても時は経つ

津守柳伸

賞罰ナシ必死で生きたエピソード
 虫の声そろそろ化粧しませんか
 敬老証自筆卒寿の大仕事
 エレベーター探して誘う喜寿の旅
 半額でまだ売れ残る中国産

遠山可住

日の丸が一番似合う秋の空
 味まつりおいでおいでと秋の空
 まだまだの余生お地藏さんと生き
 棚経の和尚今年も独身で
 一人前昼寝も出来て米作り

都倉求芽

本心が一番あとの生返事
 短い秋が仏壇の花に来る
 曖昧な色で被災地暮れてゆく
 自分にもしかと約束させる鍵
 不器用な子ばかり増やす塾文化

土橋螢

読みにくい片仮名で書く日本語
 菊の花より美しい女に会う
 約束を忘れていない小望月
 子ども等に悪い遊びを習わせる
 燈籠の火を消し夏を終らせる

西出楓楽

暑がりて寒がり何と生き下手ぞ
 失恋の傷を舐めると甘辛い
 老婆心まんざら捨てたものじゃない
 甘辛が好きではなしのわかる人
 ときどきは繻いてみる古い辞書

仁 部 四 郎

森 下 愛 論

戦車ではないからがまんダンブカー

タクシ―の値上げ内閣試される

軽トラで野菜先祖の御縁です

発電所次の予算で消防車

スーパーヘゴミ捨てに來たベンツです

波多野 五楽庵

十円でポロンと切れた赤電話

歳月や昔むかしの恋敵

八起き目も人の形で立ち直る

恵まれた星に生まれて孤独なり

石である事を忘れた石だった

林 瑞 枝

此処は極楽蜻蛉のむれる野に佇てば

熟年の色かも柿の彩を着る

遠い夏ははが夜露に梅を干す

睡蓮のひらく美人の指の先

青春のきれいな恋が絵のなかに

宮 西 弥 生

炎天の汗一日の宝もの

好きという一こと響く秋の天

月光にいのちを洗う墓洗う

いい夢に脆く近道ばかりする

シュレッダーに消える桃色のしずく

八十田 洞 庵

傷口の深さにめげず火の匂い

わびとさびもとめ二人で古寺巡る

ひたむきに生きる姿をカルテ知る

しあわせを守る母さん小さい嘘

日めくりもやせて怖い冬が来る

両 川 洋 々

テロで死ぬ戦争映画ではないぞ

ハイポーズこれが遺影となるのかも

じれったい政治だ一揆おこそうか

談合の誘いその手に乗るもんか

ああ離農土に告げ口などするな

阿 萬 萬 的

街に住みとかく妥協の癖がつき

逆風にファイトもやした雑魚の意地

あやふやな自信それでも手をあげる

不器用な男で嘘がすぐばれる

年金でまあまあ暮しむき

板尾岳人

引き返す心晴天槍・穂高(明神池)
槍・穂高無理をするなど梓川(梓川)

よう来たと握手求める河童橋(上高地)

白樺も大正池も美しく(上高地)

登る欲困ったものだ捨て切れぬ(上高地)

奥田みつ子

思いやりの風を待つてる風鈴と

子を癒やし老母も癒やすか子守歌

思い出の手帖の表紙濃むらさき

やさしさの奥の強さがよく光る

ときめいて何を待つのか秋の天

河井庸佑

生半可な知識が傷を深くする

句読点打って次の手模索する

ハードルは下げて無理せぬ老いの道

最後には笑う確信持つ余裕

耳学問思わぬピンチ切り抜ける

川上大輪

通帳にお伽噺をためておく

喋りたいことがいっぱいある眉毛

亀走るそっちは山の方ですよ

ケイタイを持って井戸から出た蛙

ふる里の岬は父の匂いする

温故知新

直原七面山

ぶんなぐる愛情なんてありますの
未亡人心の扉半は開け

螢火のように冷たき女なり

須崎 豆秋

阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ
児が追えば鳩は歩いて逃げるなり
速よいかな消えてしまふと火事見舞

田垣 方大

叱られぬ方へ子供は泣いてゆき
ローカル線牛のお産の話なり
引退をして応接間かびくさし

武部 香林

ペンと煙草とペンと煙草の忙しさ
そそり立つ山の如くに父黙す
知らぬには非ず内助へ頼かぶり

— 合同全集「私達」 —
昭和三年発行 選者麻生路郎

水煙抄

西出楓楽選

羽曳野市 森 下一 知

成り行きに言わずもがなを口走る

樂しみを先に残した荒削り

遠回り陰を拾うて医者通い

路地裏の勝手知ったる千鳥足

里の荷に母の達者が転げ出る

掠り傷数多を刻む独り立ち

大阪市 伏見 雅明

古ぼけた手帳秘密の匂いする

花火消え一瞬間が深くなる

原発を活断層は区別せず

罪深い匂い残して美女降る

古時計遅れたままの時刻む

子のために一肌脱いで邪魔にされ

尼崎市 藤岡 りこ

ふる里は今浦島の気持する

虫たちと家庭菜園共有し

飲み過ぎて胃薬飲んで飲みなおし

ホームラン悲喜こもごもの声を吞む

情熱は選挙で既に使い切り

心のねじゆるみ身体のねじゆるむ

ボケたふり聞こえないふり使い分け
高槻市 片山 かずお

キレイだと誉めてセクハラだと言われ

物くれる人とはずっとお付き合ひ

兄弟で傘寿米寿の揃い踏み

派手な靴浪速女に違いない

妻の言うあなたのためには妻のため

松江市 山根 邦代

ふるさととは心をはかるくする空気

自然には心をほぐす葉あり

座ったら届く範囲の城が出来

感動で女子マラソンに正座する

汗の量お茶の量へり虫の声

誌友の名みつけ負けん気湧いてくる

堺市 羽田野 洋介

敗色濃い時こそ腕の見せ所

親の背を見て育った子まだ独り

俄雨タイムをかける長電話

どうせまたはずれるくじを懲りもせず

時々は叩くリズムを変えてみる

肩の荷を下ろしたあとの拍子抜け

河内長野市 針生 和代

鈍行に乗って初秋に逢いにゆく

涼風にひと息ほっとお茶いれる

人類へ自然から来た重いつけ

まだ若い暗示をかけて家事をする

夕焼けに背を押される万歩計

浅漬けに茶粥今年の夏レシビ

和歌山市 田中 すす

追い詰めて追い詰められて薄く勇氣

曖昧な記憶の中の他人事

受身という気楽さと侘しさと

すっぴんの私に戻りゆく余生

非を詫びて私の今日が黄昏れる

人より倍努力を積んで出す答

香南市 近森 功

歳だから無理はするなと見舞客

過ぎた事言うまい月に笑われる

盃が秋だと酒を恋しがり

ハイハイハイ返事の割に重い尻
美人薄命知っているのか美顔術
七転び八起きは孫の手にすがり

雲南市 武島 ちよえ

八十路坂強気の風に背を押され

岐路に立ち亡夫の指示が欲しい今

スーパ一の籠にひとりの夢を買う

菌に衣を着せられませぬ菌科の椅子

よろよろと迷い出た蚊は打てもせず

焼芋の声見逃せぬ秋の天

神戸市 木村 忠義

食欲を梅酒に頼るこの猛暑

打ち水のお札にと鳴く法師蟬

ビールの味が微妙に違う缶と瓶

缶ビールの価値を高める汗をかく

診察券はイエローカードに見え

他人事より我が事に目を向ける

箕面市 寺井 柳童

あちこちで駄々っ児に会うトイザラス

人間を愛せないのにベツト飼う

他人の目につくとこばかり花を植え

打上花火ただで楽しむナイトショー

吊橋へ最初の一步踏み出せず

招待席周囲に気兼ねして座る

英会話孫に試され生返事

取手市 葛西 清

空財布開けねばならぬ崖つぶち
泣き所知りつくしてゐるから仲間
小遣いが減つて増えてゐる家事雑事
物怖じをしないタイプで損ばかり

日立市 加藤 権 悟

五十鈴川神と対話をして帰る
聞き流すことも覚えた天の邪鬼
凱旋の球児にマーチ心地よい
父の打つ太鼓まつりの輪がふくれ
どこまでも二百十日の青い天

草加市 飯土井 健 夫

靈魂が守つてくれている余生
束ね髪三人の子を育て上げ
闘志なら誰にも負けぬのが明治
東北の漬物茶漬けだけで足り
子等と旅これが最後と行く明治

東京都 井上 つよし

四面楚歌の中で他人という味方
猛暑続き天気マークの刺々し
都市砂漠仕事の鬼の住むところ
夕立に声を限りに蟬が鳴く
肩叩き振り向いたのは知らぬ顔

横浜市 巖田 かず枝

新記録出して負けならしようがない
カーテンになったゴーヤを天ぶらに
抱きぐせのついた王子の太い足
赤ん坊の視線の先はいつもママ
禁煙の殺し文句を探してる

横浜市 金森 徳三

健診を終えて晩酌はずみつく
健診は異常無いけど痛む腰
猛暑日に元気をもらう甲子園
禁煙中するめにこんぶアメしゃぶり
素面では昨夜の飲み屋見つからぬ

横浜市 川島 良子

動けてる今が青春だとおもう
体重はそのまま体型が変わる
国産の表示偽りないです
折り込みのチラシで鶴を折っている
十年後見据え計画練り直す

横浜市 中尾 哲代

おいそれと売れない土地の贈与税
催促に気をつかわせる端た金
朝日が教える雨戸の閉め忘れ
コンビニのおでんが旨い独り者
ボンチーが眠った脳を目ざめさせ

横浜市 長 島 亜希子

世界遺産になると行きたくなってくる

答弁のようにかみあわない会話

要するに議員ほとんど金まみれ

猛暑日の上の呼び名を準備する

解けないと聞くとやる気が出るパズル

佐渡市 高 野 不二

台風は結局日本目ざしてる

かかりつけの医者の前では空元気

三年日記去年と同じ事してた

ドラマ派が延長戦にケチつける

冷房もいいがうちの風もいい

岐阜市 平 野 あずま

公立の進学校へ優勝旗

夕張のメロンと勇氣頌ち合う

墓碑洗う僕より若い父母の歳

積ん読の眠り覚ました秋ともし

地球人の視線集めた赤い月

京都市 清 水 英 旺

秋立って庭芳しの夜來香

希望という逃げ水を追うもどかしさ

猛暑日に負けちゃおれんとストレッツチ

青春の蹉跎突然よみがえる

甲子園の純真無垢を疑わず

大阪市 江島谷 勝 弘

タイガースやつぱりファンをやめられず

四万十の満天の星掴めそう

飲めるだけあとはすべて苦手です

悪口も生きているから言われます

九条を捨てれば戦やって来る

大阪市 坂 裕 之

まだやれるでも譲ろうか今のうち

手紙書くだけで机の整理から

イチローがプロ根性を日米に

この味で行列できるヤラセかな

品の無い大食い嫌でテレビ消す

大阪市 澤 田 定 子

水のある景色を見ると気がなごむ

世界遺産の驚くニュース疎開の地

金屏風似合う二人のエピソード

喜びを噛んでみせてる金メダル

今置いた場所を忘れてウロウロす

大阪市 田 浦 實

かんかん照り汗が足から上がりだす

源内が今も生きてるうなぎの日

好きな本読み終えビール飲む至福

見えねども風鈴鳴らす涼の使者

メールよりソフトな声に足動く

大阪市 寺井 弘子

街路樹が色づき食欲わいてくる

新製品出る気配して買い控え

地獄耳内緒話に尾鰭つけ

深酒にうっかり本音吐いている

エゴとエゴぶつけぶつかり離婚劇

大阪市 原田 すみ子

ゼロ歳の笑みに家中丸くなり

無垢な目に恥じぬ生き方出来てるか

夕焼けがきれいだ明日を信じよう

妻や母脱いだわたしの背に翼

猛暑日はお疲れさまとまずビール

大阪市 平井 露芳

テレビにも格差薄いのと厚いのと

譲られて気付く私は銀年齢

土下座してまでも議員になりたいか

マツチ箱以来の検便異状なし

側溝がアプアプ豪雨に溺れとり

大阪市 平嶋 美智子

コシヒカリ作れど夢の持てぬ里

五十年捨てた故郷に想い馳せ

あの人に心で唾をつけておく

君と僕目と目が合って今がある

窓開けて心地よい風迎え入れ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

千の風どうあろうとも墓参り

お日様と約束破り狂い咲く

子の役目まだ果たせぬと友は古い

老々介護友の苦勞を思いやる

せめてもの嫁孝行とポックリ死

大阪市 吉川 弘泰

笑い声窓の光が誘い出し

座らされ皆んな一緒に叱られて

丸い豆コトコト煮られ妥協ぐせ

ゆとりある時間で出かけ油断する

肩たたき入れ歯で話す同窓会

大阪市 吉田 富美

風が織る天使の衣秋ざくら

ときめきの言葉さがしに行く花野

ちやつぽんと水面に月光跳ねる音

星とんで一つの願い届きそう

晩学の望み捨てずに生きて行く

池田市 上嶋 幸雀

夏ばてへリベンジしたい秋来たる

ベアシューズちよつと元氣が出る初秋

忘れずにいよう額の玉の汗

先頭に立ったら風除けにされた

ときめきが欲しくてアルバムを開く

泉大津市 助川和美

還暦に老ける暇ない好奇心
温暖化深夜営業見直せば
天王山いくつあるのかタイガース
オレ流を捨てぬ亭主でひとりぼち
味噌汁は姑流にして平和

泉佐野市 稲葉洋

いやが上郷愁募る赤とんぼ
靡いても節度忘れぬ秋桜
遊休田こも平成合併市
変えられぬ過去ゆえ飾り色もつけ
うすれゆく故に思い出なのだろう

茨木市 島田誠一

重すぎる期待が若芽摘む世陸
祝うほど老いがめでたい訳がない
呑んべえのだしになつて祝う会
祝電の読みあげ順で社を測り
祝宴の盃に本音がこぼれ出す

門真市 矢阪英雄

曲がり角トンボに出会い夏送る
物買わず迷いすぎでは愚痴残す
さわやかに水底ゆらく水中花
氷水喉元那智の滝になる
かくしてもかくし切れずに涙汗

河内長野市 木太久正一

金木犀今年も元氣香りくる
寅さんにあこがれ孫と柴又に
高齢化団地苦心の盆踊り
数あるが気に入る靴は一つだけ
ごみを出す大臣映すテレビの目

河内長野市 黒岩靖博

晩婚で見事射とめた赤いバラ
被災地で心痛めるボランティア
おじゃまむし仲裁せずに火に油
マネージャー紅一点の潤滑油
同窓会一人二人と減るばかり

岸和田市 中岡香代

うようよと都心から出る連休日
政治家が蟻をふみつけ知らん顔
努力せずお金儲かること折り
水飲んで肥える体質うらめしい
キャブテンが補欠だがみな良くまとめ

岸和田市 米富淳風

親だから蟻の這い出る隙つくり
嬉しさが身体の動き軽くする
再会に秘めたる思い揺らぎ出す
恋したり老いてみたり五七五
肥ゆる秋睨みをきかすひと目盛

堺市 大久保 伸子

ストレスを笑いころげて追い払う

ウォーキング心洗える湖がある

一言の棘に心を殺される

九条の揺れが気になる戦中派

こころ一番女の方がたくましい

堺市 萩野 像山

夫婦にもちよつとスリルが欲しいもの

衣食住足りて礼節なくす国

ささやかな良心胸に赤い羽根

間がぬけた音がとどろく遠花火

下戸だから食べたなら注いで回るのみ

吹田市 藏田 光子

コーラスの和声がひびく夏木立

束縛に時をやりくり五風十雨

道のりは遠く急がず一歩二歩

無意識に暦ひもとく迷い道

道草をしながら見てるいわし雲

吹田市 二宮 栄子

児等が来て製氷皿が忙しい

あんたお願いまだまだ私呼ばないで

ぜいたくは言うまい娘等がそばに居て

アンテナは子に向けたままひとり住む

子の手前まあるい母で押し通す

吹田市 早泉 早人

少しだけストレス求め競い合う

脳トレに検定試験受けてみる

迷惑は掛けないように跳んでいる

何となく力が入る齒科の椅子

火をつけた自慢話が止まらない

高槻市 笠原 乃りこ

朝顔を絞って染めた初恋よ

この喜び尻尾振れたら倍になる

言葉の森にトリユフを探す川柳子

百日紅天と握手をしに伸びる

夕べに萎む約束神とした木槿

高槻市 安田 忠子

話下手いつの間にやら三枚目

原爆忌ようやく真夏らしくなる

アツイ夏マラソン止めたアフリカ勢

露天風呂雨降り止まず傘さして

蚊の方が一枚上手刺され損

豊中市 荒巻 夢

空蟬が檜の葉先で揺れている

路地裏を日傘くるくる通り抜け

高い高い太郎の笑顔空の中

この嫁と同居は無理と知った盃

からだごと斜にかまえて一句詠む

豊中市 源田 啓生

辛抱と粗食で生きて来た長寿

一心に願えば瞳澄んで来る

変化球待てばズバリと来る直球

若者の支えあつての日本丸

ピンチにもひいふうみいと深呼吸

豊中市 神野 宇乃子

涼風にダウン寸前救われる

耳の蟬秋が来たのに鳴き止まず

ストレスを消化するほど丈夫な胃

血の巡り渋滞している物忘れ

2リットル水を飲み汗3リットル

豊中市 谷川 勇治

兄が来る焼酎二本用意する

あとすこし浮きつ沈みつ流れます

無事定年平泳ぎして三十年

文化の日古本五冊買いました

千歳飴神さん好きになった孫

豊中市 松尾 美智代

猛暑日は孫と遊んでやり過ぐす

田舎家で過ぐす私の夏休み

田舎家は暑さを救う風がある

昼下り私を癒すミントティー

涼しさが欲しくて庭に水を打つ

富田林市 古田 千華

グランドゼロ魂いづこ秋時雨

美しく挨拶できる娘を嫁に

小うるさい口につけたい万歩計

愚痴るのが趣味だと思いがまんする

メガネの度きつく疑い深くなり

寝屋川市 岡本 勲

朝起きて手帳に今日の予定聞く

皮肉にも世話したやつ泥かぶる

人に世話かけずにそつと逝くつもり

夢追つて老いを寄せつけないくらし

惚けぬよう毎日捻子を巻いてます

寝屋川市 北田 ただよし

蛇足を嫌い端正に生きる蛇(蛇 5句)

耳の代わりに暗視装置をもつた蛇

攻撃の構えはひとつ鎌の首

呑み込みの速さに賭ける蛇の顎

色素晒すと神の使いと畏れられ

寝屋川市 小嶋 みさと

一周忌心の傷も未だ癒えず

遠来の人と語りて偲び合う

不用意な言葉心を凍らせる

歳月は経てど心が空しい日

温暖化ここまで被害及んでる

寝屋川市 森田 麗

枚方市 坂本 ミヨノ

がばいばあちゃん語れば母も負けません

看護師が先に謝り二度注射

長い夏ハイビスカスの子沢山

病室に闇から抜けた笑顔あり

ジャスミン茶失恋話聞かされる

羽曳野市 永田 章司

期待とは裏腹にある不安感

祝い酒ほろ苦く飲む人もいる

長い物巻かれて過す古希の知恵

流行語判らぬ相手間がずれる

むず痒い女房が変に優しい日

羽曳野市 松本 静子

猛暑にてサンゴも白化してしまふ

国民が安心出来る国にして

原発の事故などおきてはしくない

火の用心かまどに書いてありました

布袋葵咲いてた池は今は消え

枚方市 小林 わこ

根無し草にもお天道さまは味方です

不器用な絵手紙の魚味がある

新茶が届く友は元氣という合図

追伸に軽く本音を遊ばせる

食べるのはちょっと待てまで京料理

五〇〇円昼食ランチコーヒ付き

公民館昔の男女ダンスして

キラキラ恋猫の目はかがやいて

化粧自慢美人に見えるテクニク

カルテ見て病名知って騒がしい

枚方市 二宮 紫鳳

心地良い目覚めをなでる秋の風

孫台風去って我が家も秋になる

孫パワーもらって今年もバテ知らず

母偲ぶ白い桔梗に吾木香

敬老を祝う幸せ母元氣

藤井寺市 伊藤 アヤ子

虫の声電車の音が消してゆく

夏ばてを癒してくれる虫の声

ふるさとを棄てた男の縄のれん

野にすすき里では楽し芋煮会

ありがとうあなたの笑顔宝物

藤井寺市 津田 シルク

野良仕事お握り頬張る至福どき

退院を畑の草も伸びて待ち

秋めいて行き交う人に笑みもどり

酷暑耐えぬいた老犬撫でてやり

彼岸来て何んだったのかあの酷暑

爺と婆孫を挟んで歩く幸

藤井寺市 俣野 登志子

くいしん坊孫は何方に似たのやら

孫帰る寂しさよりも疲れ果て

ジョギング中妻の小言に逃げられず

家事が山積夏ばての後遺症

藤井寺市 吉田 喜代子

猛暑にも汗が引いてく株下落

長い夏終って見れば夏肥り

飼い犬に服を着せてる三十度

だんじりに男捨て身の血がたぎる

姉妹みな葉嫌いは亡父ゆずり

八尾市 赤木 妙子

手料理は美味しい訳よ愛だもの

膝の丸さがいいのかネコが独り占め

ハエを打つ一茶の気持わかるけど

落語寄席で笑い袋を膨らます

年ごとに足が段差に拒まれる

八尾市 笹倉 ひろし

清らかなはずの為政者国汚す

活断層わが家の下は避けてくれ

推敲も息をも止める酷暑かな

イメージとかけ離れてる試着室

祝盃を受け天空で散った兄

八尾市 田中 トシエ

口けんか今日も平和な夫婦旅

言い訳になりそうな真実言いそびれ

聴く耳が四角い顔を丸くする

兎にも亀にもなれずついて行く

鉛筆をけずり続けて無為無策

八尾市 田邊 浩三

老いの趣味絵具より先べレー買う

ケイタイで召集かける盆踊り

メタボリのモデルになれる太鼓腹

言い訳は絶対聞かぬ亡父だった

ニユールック確かめてみる水溜り

八尾市 寺川 はじむ

にこにここと切手が笑って来る便り

打ち上げて果てる花火の潔さ

お見事と褒めて悔しく手を叩く

もったいないモデルハウスが壊される

期待した雨はすげなく通り過ぎ

八尾市 中島 春江

生薑引く香りの中につつまれて

若やげる敬老の日の姉妹

生ビールのむ顔疲れ忘れてる

猫ひる寝二百十日も平穩に

名を呼べば耳だけ動く昼寝犬

八尾市 西川 義明

正道な歩みへ父の足の跡

生きた術人様の知恵借りながら

困ったら鼻先撫でる癖が出る

昭和史を開けば核の深い傷

食卓にモデルチェンジの嫁の味

八尾市 松葉 君江

喜怒哀楽家族束ねる母の海

言い訳はよそうモラルが問われてる

逆風の中で本心見えてくる

足腰を鍛え子供への荷にならぬ

人生の出合いふれ合い教科書に

大阪府 神野 千恵子

同じこと書いてるメモが二つ三つ

病院の待合室でも粹な人

くすだまが割れて血税霧散する

かち割りが一番似合う甲子園

秋刀魚焼くまだまだ平和だと思ふ

大阪府 高木 道子

足早に回る季節の花暦

過疎の庭さるすべり咲く撓むほど

糸とんぼ頭上をぶいと直角に

泥つきは人も野菜も健やかで

心身の安心戴く医者通い

大阪府 西川 冷子

早ばやと刈られた畦に彼岸花

みかんの木揚羽育てた夏最中

稲刈りを一人で済ますコンバイン

成長す西瓜十キロエコ育ち

磯焼きの匂い尻目にダイエツト

大阪府 畑中 節子

豊作の稲ゆっくりと頭垂れ

脳のメモすぐ消え去って大あわて

秋入日八頭身の長い影

刈り草を座布団にして喋り会

粒選りが寄って平和がつかめない

尼崎市 加川 靖鬼

蜘蛛の糸風の通りへ網を張る

法螺貝の底に潮騒残ってる

だんご虫子供の生きた入門書

蛙合戦集団見合いしてるらし

チビちゃん診察券が身分証

尼崎市 河津 正治

しがらみを断つ結願の遍路笠

葛藤の過去を断ち切るシュレツダー

先輩のくれたヒントに気付かない

説法にヒントを掴む般若湯

感情の起伏に老いの眼がうるみ

尼崎市 桑原東園

原爆忌九条守れと鶴を折る
かくれんぼ途中で鬼はくも隠れ
控えめな顔で器用に風をよむ
ベテランが底意地見せて粘り勝ち
片棒を担げばあらが目に余る

尼崎市 小池幸子

無駄食いにテレビとはいえ嫌悪感
世の進化ついていけない空虚感
未来図をしつかり胸に長寿国
ライバルも理解しあつて無二の友
田の稲は酷暑豊作穂を下げる

加東市 安達厚

年金と保険に護られ八十路ゆく
嘘ほんと混せて親しい友見舞う
急いでも急がなくても二十四時
もうあかん大事なことを忘れかけ
きれいな女見たいときにはコマーシャル

加東市 岩本美緒子

四組夫婦十一人の孫健気
休み明け絵筆の走り友を待つ
のんびりの遊び余生に叱る影
耳透す法蟬の声ほっとさせ
八十路坂握手を交わす敬老会

加東市 黒崎美紗子

生垣を刈って呼び込む秋の風
よい土地だ台風地震なく感謝
青空にトンボ飛び秋つれて来た
積もる話次から次と盆の客
暑い寒い生きてる証拠有難い

篠山市 谷田多美子

萩の途亡夫五度目の秋彼岸
たどり来て萩のみだれる故里の寺
まだ命惜しくて内科整形科
八十二歳誕生間近か趣味多忙
名月が城の石垣這い上る

三田市 上垣キヨミ

色っぽい話になると盛りあがる
開発に地下の先祖が起こされる
だんじりの音に急かされ紅を引く
流行が戻り悔しい捨てた服
グチ一つ聞いてもらえただけで良い

三田市 阪本藤朗

一日を巻き戻しする夜の床
鳴き終えて地上の蟬に朝の露
台風が過ぎて多忙か庭の蟻
旅行記を頼まれ土産買いそびれ
海に落ちる夕日も肴旅の宿

三田市 辻 開子

娘の愛を六十路になつて教えくれ
看護師の心技体うけありがたい
リハビリは汗の数だけ前進し
妻と娘で二人三脚夫介護

五歳児に折り紙教え教えられ

宝塚市 丸山 孔一

還暦は第二の春の代名詞

棚はたじゃ来ない平和をどう掴む

長話犬に引かれてそれじゃまた

退院日自然の風が頬撫でる

年数え十年旅券更新す

西宮市 石野 照代

エコ時代リサイクル店大はやり

ご自由にと木桶一杯白い菊

お手本にされる大人の数が減り

満月におもわず秘密をもらしそう

紅葉の見ごろ友よりメールくる

西宮市 藤本 直

旅行より小さな旅をして見たい

何回も聞いたと言わず親孝行

幸せのパズル最後が嵌らない

名も知らぬ雲悠々と天高く

ジャガイモのような人だと言われない

西脇市 七反田 順子

肩の荷は下ろしてからが凝ってくる

安い肉何処かに棘がありそうなの

万歩計リズムがあつた軽い靴

阿弥陀くじ旅の幹事を任される

似た者夫婦仲がよいやら悪いやら

三木市 広瀬 房江

フライパンの上でやかれている暑さ

三人の息子はみんな嫁のもの

オニオンの利いたカレーにはまつてる

青刈りの稲穂が哀れ減反田

何着よう急に涼しくなる時雨

奈良市 阿部 茶々

亡き父がいつものソファーにいる気配

知らぬまに私意地悪婆さんに

ドル安で日々へそくりが減っていく

鬚はやしちよいわるおやじ気取つてる

晶子の詩愛と勇氣に溢れてる

奈良市 辻内 げんえい

勝てませんメデア戦略ない候補

句作りに苦しむ姿妻笑う

奥方がやはり一番怖い人

今の世に親父ちつとも怖くない

嫁がせた娘の里帰り待つ盛夏

奈良市 矢野良一

路地裏の暮らしが匂う風が好き
議員にならなきや良かつたさくらパ
薩摩揚げ故郷の味亡母の味
バイキング競争意識出て困る
物忘れ競いあつてゐる老い二人

生駒市 小西稔

七五三成長祝う宮参り

秋まつり祝う太鼓の音たのし
昔から祝うことには餅と酒
国民の期待裏切る永田町
伊勢詣で古代イメージよみがえる

和歌山市 柏原夕胡

さよならは言わずにおこうそれじゃまた
煩惱もよしとする人間だもの
君のまわりを漂う空気になりたい
咲き切つて翔んだ道です悔いはない
ふわふわと迷うところの置き所

和歌山市 坂部かずみ

落ちつかぬナイフフォークの銀の味
検診の一年保証できません
幸不幸小さな鱗をつけたまま
ギフト券服を諦め味噌醤油
コスモスも一休みする雨を待つ

和歌山市 たむら あきこ

先入観もらうはなしのそとに出る
わたくしのなかの卑怯者をつまむ
やさしさをもらうとひどくなる雪崩
洗濯機回しバランスとつてゐる
わたくしのかたちで棲んでゐるひとり

和歌山市 土屋起世子

金婚式錨を下ろす岸に着く
人生の絶頂でした写真立て
いたわりの嘘で病室あかりつく
平熱にもどり詫びたいことがある
大きめの帽子で涙の跡隠す

和歌山市 堀 富美子

ベランダへ緑が癒やす茄子トマト
リベンジが今に来るだろ人のエゴ
朝夕の水が待てない花の鉢
転ぶ度助走の風に覇氣もらう
身心のバランス今日も立て直す

和歌山市 山田侃太

わたくしのすべてを透かす月明かり
バーゲンの残りに効かぬ自制心
青空へ千の瞑想するトンボ
腕相撲息子に負けた日の愉快
コーヒーは微糖にしてる少数派

岩出市 村中悦男

嫁と妻互いにエースをゆずり合い
人生は旅折々の物語

結局は神におまかせした寿命
家事万端老いの妻には重過ぎる
定刻に目覚める老いの一徹さ

海南市 小谷小雪

おいおいと心をほぐす聞き上手
ばあちゃんも安眠させる紙おむつ
地震策非常袋を抱いて寝る
土踏まず草に触れると良い調子
虫の音のチケットレスのコンサート

紀の川市 宇野幹子

終身刑の始まりビビッと来たあの日
それが愛嫉妬の森へ迷い込む
ソーダー水嘘がプアプア浮き上がる
越えてきた紆余曲折に花が咲き
激辛のカレーで男引き締める

紀の川市 木村徑子

エンドレスの明日へ伸びる豆の蔓
ひまわりの合唱秋の風に止む
6Bを味方につけた果し状
いじわるな暑さに脳も犯される
私を狙う声なき声嫉妬

紀の川市 辻内次根

八月が遠い記憶のなかにある
冷房が過ぎて三十七度五分
新刊を開いた時の風が好き
癒される心の中に森がある
人間が決まる品格だと思ふ

田辺市 大峠可動

寒暖を時が連れ去る九月かな
五山の火鳥居をくぐる風もあり
核を持つ国から貫う肩透し
晩年は風の手を曳く吊るし柿
風渡る仏の道も神の地も

橋本市 石田隆彦

締め出され意気投合の喫煙所
感動の台詞飲み込む一人旅
災いの奥に見覚えある起因
手の内を知って夫婦の口喧嘩
銀婚の今日まで妻の尻の下

和歌山県 森下よりこ

自転車に乗って気分を変えにいく
放置され存在感の薄い茱萸
お守りのようにケータイ持っている
弟が死んでふるさと近くなる
彼岸花咲いて別れを受入れる

鳥取市 近藤 秋星

夏バテが食欲の秋待っている
長生きはしたくないのに生かされる
頑張ろう明日は死ぬかも知れぬから
向日葵が後よろしくとコスモスに
法師蟬挽歌の歌しか歌わない

鳥取市 山岡 紀子

台風は想定外の旅かばん
冷や汗をかいて流れの中にいる
さからえぬ流れの中で生きている
中流のくらし生き生きしています
お返しに困ってしまう貰いもの

鳥取市 山口 千代子

酒煙草きっぱり止めた息子褒め
拉致の子を親はひたすら待つばかり
我が子でも遠慮をしつつ物を言う
この歳でまだまだ生きる欲を持つ
寝たきりにならないように散歩する

倉吉市 酒井 芙美子

川柳の十七文字に悩む日々
音沙汰のないのが無事と祈ってる
美人の湯入ったけれど効果なし
湯気の中どの顔も皆超美人
飛び入りで十八番の唄を披露する

倉吉市 前田 喜美子

アイデアも包む風呂敷夢がある
ひと時の涼を求めて銀行へ
身内には政治家いない農を継ぐ
圧勝で騒がしくなる民主党
騒いでも隣は畑の保育園

境港市 遠藤 那珂子

小さい知恵が大きな夢をねり上げる
たのみごとうろろばかり切り出せぬ
古くても足にやさしい靴で好き
川柳で私の見る目変りだす
ほっとするぬくもりくれる家族いる

境港市 中井 虎尾

明日と言う日は読めもせず見えもせず
稲実る実らぬ人がいて困る
受け入れる心があればそれが愛
肩書きをまだ生かしてる元上司
すぐ治る薬が効いて副作用

米子市 見山 温子

涼求めデパート梯子する夏日
暑い日はまといつく猫うっとしい
うち水に右往左往する赤トンボ
五七五指折り数え昼寝する
米作り家族揃ってパンが好き

米子市 吉田陽子

鳥取県 岡本幸枝

白い歯がキラリ信じる気にさせる

守るものあつて消えない力瘤

ああでもないこうでもない引き止める

同じこと言つて暮れ行く介護の日

ワンタツチした方が買うセール品

鳥取県 飯野菖子

雑草にうんざり負けていられない

コストより育つ野菜に元氣づく

コストより市が楽しく育ててる

猪に残念無念がつくりだ

長茄子もオクラトマトもおしゃれです

鳥取県 岩崎和子

雨の音夫婦の会話とぎれがち

サンルーム洗濯物もアクビする

続く降りお陽様の顔おがみたい

雨の日はベッドにごろん本を読む

息つきをしつつ主婦業棄てられぬ

鳥取県 大塚美代子

虎の子を抱えこの世にしがみ付く

錆付いた脳に時々油さす

年毎に狂い始める腹時計

影法師今日も迷わずついて来る

雑草も踏まれて更に強くなる

ボンコツですがブレーキだけは大丈夫

秋深し人恋しくて便り書く

恋ごころおしゃれ心がまだ続く

頼もしい男になれと孫論す

真心を尽せば得もはねかえる

鳥取県 坂本智子

飛躍する町並ついでゆけぬ老い

石塔で蛙と出会ひ大笑い

公園の噴水四方に風にのり

炎天を動く体に玉の汗

神話の地漁り火の船あかあかと

鳥取県 田口清帆

もうよりもまだこの歳と自信持て

お茶漬けが一番うまい旅帰り

汗流し後に至福が待っている

今日もまた夏バテだしに生ビール

バーゲンのときだけ妻は格闘家

鳥取県 橋谷静江

墓参り亡母と語ろう水入らず

まだ今日も亡母のおにぎり味覚え

里帰り母の得意のチラシ寿司

有り余る元氣を見せる中学生

家系にはなかったカラー孫にみる

雲南市 菅田 かつ子

万札の側で小銭のすまし顔
放浪の旅に出てゆく白い雲
電話ベル只今昼寝しています
ライバルも同じ何かを探してる
おしっこへ蟻一匹を慌てさせ

安来市 原 煩悩児

原爆の記憶悲しや夾竹桃
振り回す孫に従う盆二日
故郷で母と語ろう昔話
学ぶことだんだん孫にふえて来た
待望の雨涼しくて朝寝する

府中市 岩 本 雅 代

喜寿祝金一封に胸熱い
秋の風待つて居たよと虫の声
盆踊り鮎の塩焼き食べながら
若い衆の口説上手に吸い込まれ
国政は揺れても稲穂重く垂れ

宇部市 高山 清 子

弁解が過ぎて本音がついもある
かしこまり以下同文の列に居る
お節介過ぎて逆さに論される
雑魚の目の動きに椅子がゆさぶられ
言い訳をした後味の悪い夜

東かがわ市 赤澤 貞 月

極楽は胸三寸と言ひ聞かず
冷や奴するりと夏が通りすぎ
三十度涼しいと思う恐ろしさ
鈴虫が二人にくれた過ぎし日々
汗が吹く音聞こえそうこの猛暑

今治市 塩路 よしみ

みぞおちに誰も知らない波が立つ
空白を埋めてくれる童唄
月に酔いわたし詩人の真似をする
道草も起伏もあつた人生譜
夢があるから人間止められぬ

今治市 渡 邊 伊津志

万緑のシャワーを浴びる深呼吸
平凡な暮らしが好きな深呼吸
熟年の窓一杯の深呼吸
欠点が見える目を持つ不仕合わせ
古里は小川の水が語りかけ

高知県 い の 静 草

一言が流れ弾より深い傷
要では波長合うからまだ夫婦
ストレッチしないとこびりつく昨日
きつちりと目を見てお辞儀してくれる
古傷が謙虚な道を選ばせる

香南市 桑名 孝雄

自民党よこれで参られても困る

大風呂敷をマニフェストとも言うらしい

子はポスト親は山へと背負われて

忠と孝せめて孝でも残さねば

耳障りだらうな歌はやめにする

唐津市 岩崎 實

孫二人色紙に幸と福を書き

母と娘が時々やつてる口げんか

声聞いて安心電話ですましてる

捨てきれぬ我欲バランスくずして

行末の道順未だ定まらず

札幌市 小沢 淳

目で食べる京の料理の粋のよさ

格調の高い話だ落ちがない

目が据わる酒が人格捨てさせる

正義感加齢とともに丸くなる

鈍感と呑気で老いの二人づれ

札幌市 三浦 強 一

片方の耳反論を聞いている

ずんずんずん生命線の延びる音

人生の方程式がまだ解けず

二日酔い記憶の底にある舌禍

ハヒフへホ笑う仲間のハーマニー

栃木県 岡野 すみれ

泣きに行くところはついにお墓だけ

噂もう尾ひれをつけてふた回り

まだ命もつかと動脈瘤にきき

爪にまで芸術をうめ若さです

立川市 柏野 遊花

伸びる芽はアスファルトさえ厭わない

秋の雨近況知らせたい湿り

記憶力だれに妥協をするでなく

甘美さはあのころのままサラサーテ

藤沢市 加藤 スズコ

暑さには負けぬ八月誕生日

波に乗るはしゃぐ子達にある未来

夏休みふれあう子等に老い和む

嫁の気遣い氷枕の熱帯夜

北名古屋市 片岡 文男

酷暑日も雨読と同じ本を積む

国語力落ちて優先席読めず

ゴミ出しに老眼の要る分別化

大阪市 太田 としお

私の残日録を書き始め

マラソンについてゆきますゴールまで

汗拭う歩き遍路の二人連れ

アデランス妻が気づかず通り過ぎ

大阪市 尾崎 黄紅

ガラス玉だから磨いて磨いてる
珍しいものにわが家の手水鉢
この町に残る三代目の酒屋
手回しがあつたか多数決となり

大阪市 山本 加お里

通帳の初年金を拝んでる
有難うお辞儀する子に教えられ
名も知らぬ路地の草花よく育ち
爺ちゃんに口止めしたらすぐにばれ

大阪市 吉内 福世

うっかりとゴミにはならぬよう磨く
酸欠で山の空気をすいに行く
雨を待つ立ち木は萎れ草は伸び
趣味なかも強い絆に助けられ

池田市 多田 契子

虫達がモーツアルトになり切つて
妥協点見つけたそがれただ歩く
夕焼けに向かい団塊跳ねてます
まだ見たい夏の夜の夢海が好き

泉佐野市 備後 三代子

バスのなか嬰の笑顔になごむ客
写真家の撮った薔薇に香の余情
聞き流すことのたやすさむずかしい
覚えてる字でもペン先掠れ出す

河内長野市 内海 綾乃

バーゲンで汗だくになり物色す
年金問題何時までひびく社保庁か
まだ使えるのに廃棄してと扇風機
盆踊りウチワを持てば様になる

河内長野市 宮守 正博

初デート映画のあとを思索する
釣り上げた魚にエサをもらつてる
酒やめてタバコもやめて蔵建たず
愛よりも先だつものは金ですか

岸和田市 坂口 英雄

戦争ノーそれ言えるのもまた平和
引き返す道を知らない自爆テロ
玩具も食も安心出来ぬ中国産
盆過ぎてバイトのお化け暇になる

羽曳野市 仲谷 真一

迷走のモンゴル横綱どこへ行く
九条で平和の道を歩いたが
ブームなの食品偽装続いている
間一髪死なずに済んだ那覇空港

羽曳野市 吉村 久仁雄

過去の罪うずき続けた熱帯夜
鬱の字が書いて夢の字書き損じ
なるようになった昔を懐しむ
足して二で割っても違う子の個性

枚方市 小川良吉

大金は無いが足代たりている
来し方に縁はなかった金屏風

大悪は額が違うな保釈金

鱧ご難骨まで切られ祇園祭

八尾市 前田紀雄

大臣はチャンスに強い人が良い

決断の鈍い男の生返事

半額を狙っていたら夏終り

水茄子へ御飯がすすむ朝の膳

八尾市 脇俊子

欲が無く足踏みしてる脳の中

現実から逃避をしたいかたつむり

誤作動か思い出せない名に迷う

生かされて流れ雲にと添うて無に

大阪府 安藤成都子

千人中五百番目でまあいいわ

五百グラム減らし一キロすぐ太る

冷房のよくきく部屋で環境論

BGMセミからバトン秋の虫

大阪府 小栢こずえ

取れすぎも不作も困る野菜取る

発芽した野菜も人もうだる夏

ひとつずつ行事こなし日が暮れる

幸せがしあわせすぎて分からない

大阪府 若月祐作

川面には花火が降って夏一番
京ことばはなんなりしてて味がある

大阪弁気つぶはいいが忙がしい

煩惱をお経で清め高野山

神戸市 武田恵美子

話し方ひびきよすぎて睡魔くる

赤い車かんれき祝い青春す

つり皮であばれているが知らぬ顔

満員で長い髪の毛鼻の前

篠山市 永井かほる

秋空にあちらこちらの運動会

ポツポツと体不調の合図来る

何事もまだ日があると悪いくせ

何処でも居眠り出来て夏はいい

三田市 臼井二英

独りごとと言うた自分にハツとする

つれあいの体調不良伝播する

これ言えば決定的だと言わずおき

諺の裏もついでに考える

奈良市 乾春雄

名演技陰に黒子の玉の汗

集団下校道草したいランドセル

青い空赤い風船旅に出る

また会えば恋の虜となる予感

奈良市 尾畑 なを江

定退後こんなはずでは日々多忙

プライドをちよつと捨てたら生きやすい

イメージがまるで違った写真顔

ストレスが溜つて来たらシヨッピング

奈良市 田中 賢治

王道を教え球児に錦見せ

拉致家族平和の国で今朝も待ち

宮参り祝儀袋が鈴なりに

湯加減は風呂たく子等の腕比べ

和歌山市 根田 よしこ

読書の秋メガネかけたりはずしたり

緊張しことは忘れたプロポーズ

小さい嘘いつの間にやら大ごとに

甘辛でバランスとれるいい夫婦

鳥取市 大前 安子

続くこと信じて帰るお盆の灯

稲妻にやりきれぬ腹見すかされ

特別を体が覚えた母の味

歩く道うなずき合つて二人影

鳥取市 谷岡 清子

太陽に当て腰伸ばす一二三

暑い夏去つて一息水旨い

脳も夏ばて浮かぬ顔もて余す

古服を着てさつそうと姥桜

鳥取市 津村 律子

いばら道改革路線期待する

社保庁の笑えぬ悪事人模様

見回るたびに褒めて稲穂の実り成す

初誕生日背負つた餅を配りゆく

鳥取市 横田 春名

葛藤をなんとかなだめ詫び入れる

弁解はしないと決めて目を閉じる

うんざりとする猛暑にも蟬の声

真実が口から口へ曲り出す

倉吉市 藤井 美津恵

年重ねしわは増えてもおしゃれする

本を読むいつの間にやら睨閉じ

萩の花雨の雫でおじぎする

初心者か方向指示器出たまんま

米子市 猪森 スミエ

古傷をつついて騒ぐ好奇心

急流にもまれて角がとれました

ひんやりと風ふところに大山寺

そうめん流しひんやり竹の香を添えて

米子市 小塩 智加恵

流れ星異国の友も同じ空

輪の中に意外な意見見せる人

中国産買うと妻からお説教

お札状和紙便せんに濃い墨で

鳥取県 大田 勝 誉

浮雲になつて余生はふんわりとしあわせがもつと続けと笑い合う
高笑い幸せなんだおとなりも
私のそば大海原の夫が居る

鳥取県 岡村 孝 明

生垣の紅の若芽に活気湧く
耐えて生き定退待つて夢咲かす
老い仲間社保庁巡り賑やか
コウノトリ餌を育てる地域の和

鳥取県 北村 稔

じいさんの汗の香この田荒せない
造反で勝つ事もある世の流れ
酒タバコ不思議に値上げすぐなれる
修身がなくなつてから世がみだれ

鳥取県 斉尾 くにこ

足早に今年がさつさ逃げてゆく
自分への投資元金消えてゆき
恩返しなどは忘れて鶴は飛ぶ
呑みこんだ言葉なんどもじたばたす

鳥取県 松岡 照 美

親冥利満面の笑み抱いている
岐路毎に逞しくなる底力
絵日記から入道雲が姿消す
夕立ちがどんとどんとと土叩く

松江市 相見 柳 歩

タイムカプセル時の彼方へ行ったきり
君となら実のある話語れそう
新しい花に出逢つたカタツムリ
子の想い高嶺の花に惚れている

松江市 柏井 日出子

老老の介護ごっこでない浮世
若者の吐き出す詩よしライブ酔う
野心消し清貧の城うすあかり
金持ちに無縁一切空に生き

松江市 松浦 登志子

生き方に納得してのしまい風呂
しばらくは追いかけている赤い月
引力に逆らうようにマッサージ
透明の仮面被つて妻演じ

出雲市 荒木 英子

熱帯夜溜息ついて長い夜
年忘れカラフルな服私流
いい夢を亡母に伝えた青い空
念願の水の都へ空の旅

出雲市 川島 和歌子

年重ねバジャマの釦多すぎる
年の功さずがと思う智恵袋
鍵かけて秘密を守る子供部屋
わがままを通したあとで悔い残す

雲南市 福岡 博利

孫たちの笑顔カレーが待っている
幸せと言うほかはない飯を炊く
夫婦茶碗よくぞこまでもちました
夢をみる私まだまだ逝きません

尾道市 木曾 一徳

間引きして檜の山の昼の月
炎昼のエンジン韻く里の山
消し炭もまた活かし切るバーベキュー
みのり田の横手の草の伸び盛り

府中市 藤岡 ヒデコ

間違いのもとは金金金にある
警戒は見知らぬ人もCMも
暑かった夏をねぎらう虫の声
八月の暑さと組んだねばり腰

大洲市 花岡 順子

追憶の中に豊かな村がある
約束は雨の日だった待ちぼうけ
焦点を絞れば見えてきた星座
ホッチキスで止めた運命だつてある

雲南市 渡部 好栄

無人駅今日もやさしい風に逢い
生きてゆくただそれだけの物語
迷う日は誰かに電話かけてみる
山びこは嘘はつかない日本晴れ

唐津市 北村 松風

屑じゃない妻と見抜いた俺の勘
貧乏は二度せぬ誓い今がある
巢立ちにも羽搏く力格差あり
年金がわが救命の浮袋

山鹿市 阿部 ミツ子

夏の日暑いあついがご挨拶
小屋の蜂殺すも哀れじつと見る
千の風星空見上げ手を振りて
人の波山鹿灯籠ゆらゆらと

シドニー 三谷 たん吉

辞任とは意外残念何ものなし
品格をまるで感じぬ全議員
我が家系大臣なしでひと安心
モンゴルに群なすハイエナ日本蠅

シドニー 森本クックバラ

給油代誰がいったい持つてるの
黒々と白髪染めるもマナーらし
ヘアダイじや顔の年輪隠せない
毛は痩せる地肌は光るなお染める

予 告

第14回川柳塔まつり

日時 平成20年10月5日(日)

会場 ホテルアウィーナ 生駒・金剛の間

御参加を心よりお待ちしております。

愛染帖

新家 完司 選

全身がちりめん皺になつてゆく
香芝市 大内 朝子

(評) 顔や首筋だけではない。腕、足、腹など等、全身の皮膚が「ちりめん皺」になつてゆくというのである。ちよつとコワイ。

八王子市 播本 充子
式服を脱いで秋刀魚の焼きざまし

(評) たとえそれが秋刀魚の焼きざましであつたとしても、窮屈な食事よりくつろいだ普段着で食べるのがいちばんである。

唐津市 坂本 蜂明
悔いはいないだらう血だらけ蚊のむくろ

(評) たつぷり血を吸つた後なら極楽往生。一瞬の死に苦しみはなく、理想的な死にかた、というのは殺した側の勝手な理屈。

鳥取県 細田 裕花
宝石と爆弾を抱く多感な子

(評) 爆弾を破裂させることなく宝石を磨き上げることができるのか。親も教師も地域社会もかわりを嫌うが、逃げてはいけない。

大坂市 板東 倫子
炎天下やつてられないポランテア

(評) 見ず知らずの他人の世話を、何の見返りも求めず無償で行うポランテア。伊達や酔狂で何日も出来るものではない。

東大坂市 北村 賢子
ピーポーも呼べずひとりで逝つた友

(評) 人それぞれの生き方があり、それぞれの死に方がある。誰にも看取られずに旅立つのもまた運命。同情などしては故人に失礼。

堺市 奥 時雄
喧騒のさなか祝詞の番がくる

(評) 練習までしてきたお祝いの言葉。ようやく順番がきたのは乾杯の後のザワザワの最中。気楽ではあるが、ちよつと拍子抜け。

紀の川市 木村 徑子
余生だと思つていない蝶が舞う

(評) やれ、老後だ余生だ、ポツクリ死だとうろたえているのはにんげんだけ。蟬も蝶々もトンボも、今を精一杯生きている。

大坂市 小谷 集一
日向ぼこ昔白馬の騎士でした

(評) ほんやりしている姿を見れば、ボケているのかと誤解を受けそうであるが、これも昔は淑女たちの憧れの的であつたのだ。

紀の川市 辻内 次根
方哉の句集開いている初秋

図書館で何にもしない良い時間

三田市 堀 正和
まず妻へもつたいないを教えねば
逆さまの切手の意味を考へる

河内長野市 針生 和代
苦い記憶昭和忘れていいです
か 蛇蛙蜻蛉でさえも居なくなり

枚方市 伊達 郁夫
介護する順番決めるあみだくじ
定年日残尿感を置いてくる

東がわ市 川崎ひかり
財産は壊すに金の要る古家
ありがたい非常袋を入れ替へる

鳥取市 夏目 一粋
オーイ酒言つてみたいよ秋の月
呑みこんだ言葉はきつといつか出る

神戸市 田中 章子
小石だとあなどるなれ化石かも
経験で多少の嘘は見抜けます

岸和田市 井伊 東吉
若者の夢だんじりの大工方
だんじりが終ると街はゴミの山

藤井寺市 太田扶美代
美容院一つニュースを持つて行く
いい事がありそう食パンキツネ色

大和郡山市 坊農 柳弘
書き留めるほどのものなし秋夜長
鳥取市 山下 節子

キッチンへ一礼をして今日終る

和歌山市 たむらあきこ
固有名詞にはたましいが棲んでいる

島取市 徳田ひろこ
よく荒れる海が私を老いさせぬ

和歌山市 木本 朱夏
癒し系の亀を一匹ふところに

今治市 塩路よしみ
時は流れいくさを知らぬ赤とんぼ

西宮市 片山 忠
辞めてからだんだん腹の立つ会社

堺市 志田 千代
カンニンなカンニンやでと摘果する

百円で買ったサンマを食べ散らす
弘前市 高瀬 霜石

ペン胼胝ができて飯は食えません
手は四本あるが不器用 妻とボク
京都市 高島 啓子

まっすぐな壁に積もってゆくほこり
リフォームをする新築の横の家
札幌市 三浦 強一

ひと呼吸おいて反論組み立てる
同じと何度も読んでいる眠気
交野市 山川日出子

初恋の彼の引力六十年
草原で笑顔がいつかい寝顔
茨木市 藤井 正雄

同窓会時効の恋が会釈する
会社での切れ者家で寝てばかり

芦屋市 黒田 能子
元気だと言ったとたん風邪を引く

八尾市 吉村 一風
迷惑をかけぬ程度でいい寿命

リストラを拾う神あり海なし
要点は終りにちよつと長電話
島取市 永原 昌鼓

相続税つくほど譲る物はない
身内にも貯金通帳見せてない
島取市 永原 昌鼓

赤ん坊の波長に合わず笑い顔
妻だからよまい言など聞いてやる
寝屋川市 籠島 恵子

わくわくががっかりになる袋綴じ
お誘いのメールを待つて日が暮れる
池田市 上嶋 幸雀

招待がないと行けない披露宴
健康な人もいつかはグッドバイ
堺市 山本 半銭

ケータイは持たされてるが馴染めない
ひとり見る月の光は蒼い色
堺市 山本 半銭

少しでも土地があるから過疎に住む
鶴亀の嫁入り下駄が捨てられず
島取市 土橋 睦子

寝る前はいい事ばかり考へる
新涼や人間ドック異常なし
西宮市 緒方美津子

和歌山市 楠見 章子
大方は身に覚えあり惚けチエツク

羽曳野市 酒井 一壺
法律を知らずに生きて恙なし

友だちが改札口に立っている
大坂市 谷口 義

テポドンの精度が悪いから怖い
記念樹を植えたいほどの恋でした
和歌山市 柏原 夕胡

過疎ですが都会に負けぬゴミの山
家族葬の話がはずむ墓まいり
美作市 小林 妻子

メーデーに怒りを捨てた旗の波
うろろとメガネを探すのが日課
大坂市 伏見 雅明

疵がつくまでは大事にする車
満月が空気も丸くしてくれる
島取市 岸本 孝子

ご虫屑のチームのせいで浮かぬ顔
すぐ虫を鳴かせて新酒酌み交す
弘前市 福士 慕情

おとなしく飲んでボクの平和な日
若松 雅枝

吉岡 修

渡辺 富子

岩崎 公誠

公誠

公誠

西宮市 牧瀨富喜子
首相辞意坊やよい子だんねんしな

大阪府 太田としお
冗談にしてはいけない第九条

橿原市 居谷真理子
戦争があとつけてくる二拍子で

鳥取市 倉益 一瑠
自分さえ我慢をすれば晴れになる

倉吉市 野口 節子
人間に生まれて汗をかいている

八尾市 田邊 浩三
異議言わぬ人を集めた委員会

羽曳野市 徳山みつこ
開発へ野原の秘密基地消える

和歌山市 喜田 准一
笑つてゐるうちに時間が経つて行く

富田林市 片岡智恵子
きつかけは茶を誘われて五十年

倉吉市 山中 康子
大正の壁がだんだんもろくなる

堺市 村上 玄也
腹割って話してしまふのが裏目

大阪府 小栢こずえ
手づくりの仏花供えて耳澄ます

唐津市 井上 勝規
古い二人相談をして遺書を書く

和歌山市 根田よしこ
見合した日が記念日の夫婦です

豊中市 水野 黒兔
どつしりと大黒柱煤まみれ

松江市 松浦登志子
ムカデよりあなたが噛んだ傷痛む

枚方市 丹後屋 肇
救急車遠ざかりゆく蟬時雨

和歌山市 古久保和子
戒名で母の名前を呼ばないで

三田市 北野 哲男
定年後読むはずだった蔵書印

藤井寺市 鴨谷瑠美子
買い替えたがねも同じ物が見え

尼崎市 春城武庫坊
昔話すればまわりの人離れ

岸和田市 雪本 珠子
今恋に心占領されている

大洲市 中居 善信
説教が長いうどんが伸びている

尼崎市 春城 年代
ちらかっている中から搜したす妙味

吹田市 穴吹 尚士
師を囲みみなあの頃の顔になる

米子市 中井 ゆき
うっかりと言えない愚痴を犬に吐く

姫路市 古川 奮水
水茄子をかじり平和な朝にする

篠山市 円増 純子
貰い手のない苦瓜を持て余す

尼崎市 山田 耕治
急いだ朝仏の前を素通りし

藤井寺市 高田美代子
忘れたい事がたくさん有りすぎる

和歌山市 田中 すず
ピンチヒッターという誇らしい役が来る

堺市 加島 由一
故郷の海を見てよとプロポーズ

鳥取市 福西 茶子
寝る遊ばずふわたしの二十四時

大阪市 坂 裕之
癌を取りちよつと止まって人らしく

八尾市 田中トシエ
体力の限界を知る立ち話

大阪市 井丸 昌紀
似顔絵は心持ちだけ美男美女

米子市 青戸 田鶴
遠来の友と別れの手を握る

高槻市 乙倉 武史
水溜り飛ぶ気も失せて老い進む

寝屋川市 太田とし子
種を蒔く私だけの秋日和

松江市 三島 淞丘
良いところだけはさすがに俺の子だ

堺市 矢倉 五月
マイカーが無かった功德強い足

鳥取市 中宇地秀四
休肝日に友が一本提げて来る

吹田市 大谷 篤子
咳すると隣の人が座をすらす

松江市 安食 友子
年齢を申し上げるも疎ましい

泉佐野市 稲葉 洋
鳩居堂前も故郷も土は土

大阪市 岩崎 玲子
今月も私引っぱるカレンダー

河内長野市 村上 直樹
少子化へ歌い継ごうよ七つの子

大阪市 柴本ばつは
貧しさ故いつも急いでいた夫婦

和泉市 横山 捷也
ソプラノだ妻はいらいらしているな

米子市 澤田 千春
星空はとても豪華なシャンデリア

東かがわ市 木村あきら
エンジン快調ハードル少し高くする

八尾市 生嶋ますみ
努力した汗はヒト科のいい匂い

倉吉市 桃谷 和郎
飛んだって着地は妻の手の平に

シドニー 坂上のり子
辞世の句未だと梯子を降りて来る

弘前市 高橋 岳水
描き直すたびに自画像しよほくれる

大阪市 西川 冷子
ピリ辛と羊羹もある旅かばん

大阪市 大川 桃花
護つてる盲導犬はもの静か

弘前市 櫻庭 順風
だんだんと道路の傾斜知る歳に

樺原市 安土 理恵
歳ごとにスローなブギが合ってくる

鳥取県 竹信 昭彦
畔草を何度も刈った田に稲穂

八王子市 川名 洋子
風穴をあけて乗り切る倦怠期

池田市 栗田 久子
孤立せぬように騒ぎの輪に入る

海都市 堂上 泰女
夏休み孫と作った蟬の墓

鳥取市 近藤 佳子
伸びきった輪ゴムのような暑い夏

三田市 上垣キヨミ
暑さなど何のこれしき趣味の会

安来市 原 煩悩児
酷暑背に孫子のためと畑打つ

八尾市 中島 春江
敬老日いつもの顔が一つ消え

海都市 小谷 小雪
天窓に家のごちゃごちゃ解き放つ

大阪府 初山 隆盛
セテンバーソング山から下りてくる

鳥取市 有沢せつ子
銀行で書いた雅号へ聞かれ

堺市 西村りつえ
腹立ちはガムに絡ませ捨てました

神戸市 山田婦美子
エステする時間などなく日が暮れる

松原市 玉置 重人
ゆつくりと雲が流れるケセラセラ

箕面市 広島 巴子
村興し案山子ビエロにトラパーユ

富田林市 大橋 鐘造
新しい家風に変える嫁がくる

鳥取市 西川 和子
洗濯機泥の匂いも汗の香も

大阪市 津村志華子
脅かせながら儲ける癌保険

豊中市 吉田あずき
善人がいなくてほっとする集い

三田市 阪本 藤朗
スーパで優等生のさんま買う

羽曳野市 吉川 寿美
熟年と言われ背筋をピンと張る

大阪市 川原 章久
青信号も一度左右見て渡る

鳥取県 佐伯 やえ
天気さえよければ足が畑へ向く

西宮市 藤本 直
寂しさを隠して男老いてゆく

豊中市 松尾美智代
一匹の蚊に狙われて不眠症

第13回 川柳塔まつり

同人総会

平成19(07)年第42期川柳塔社同人総会は、10月8日午前10時からホテルアウイナ大坂で開催された。村上玄也常任理事の司会で開会し、河内天笑主幹があいさつ、同氏を議長に選任して議案審議に入った。

一号議案の事業活動は井伊東吉常任理事から、次のように報告した。

川柳塔社初の選挙による主幹・理事長の誕生と共に、常任理事による各部役員の異動を行い、新しい体制でスタートを切った。

更に、永年に亘り使用した本社事務所が手狭で活動に支障を来たとしていたことから、大坂・四天王寺に事務所を移転し、活動の一層の活性化を期している。

また、誌友拡大は、各地同人のご協力を得て、着々と成果を上げつつあると述べ、詳細は別項の順で説明した。

鶴田遠野常任理事が前年度の会計決算報告を行い、西村哲夫会計監査が監査承認の旨を報告した。

二号議案の本年度の事業計画は、井伊東吉

常任理事が、新事務所を活用し

・各地川柳会との交流の基点としたい

・本社各部門間の打ち合わせに利用し、横の連携を緊密にした

・事務局の人員・設備の充実を図りたい

と述べ、更に、各部からの前年実績を基盤にした事業拡充計画を、具体的に提案した。

07年度会計予算案は、龍島恵子常任理事が提案を行なった。本年の予算案には常任理事会の経費も含まれているが、本件に関わる村上直樹氏の質問に詳しく説明し、承認された。

その他、全議案への質疑応答は一括して行なわれた。

まず太田昭氏から提案があった。

新事務所を活用して部長会を行い、連携強化と責任明確化を図ることは喜ばしいが、その取り決め事項を常任理事以外にも可能な限り連絡して、全会員に一体感を持たせて欲しい。

岩佐ダン吉氏からは次の提案があった。

理事以上の役員が大勢おられるが、個々の役員にどういう仕事を貰うのか委嘱状を用意し、お願いする分野を明確にしてはどうか。また、路郎師の川柳とは何かを勉強する機会も作って欲しい。

森本弘風氏は

役員の定年75歳の見直しをしてはどうか、また川柳塔誌の活字を大きくして欲しいと要望。

何れの提案についても、真摯に検討する旨、河内天笑主幹が回答した。

新人事業は、西出楓幸理事長から別項の通り提案され、いずれも承認された。

これにて全議案を承認し議長を解任。全役員を代表して小島蘭幸新副主幹が「川柳塔社のために、どのように役立てるのか、常に念頭に置いて頑張ってください」と挨拶した。

閉会の言葉で奥田みつ子新相談役は、「誰もが川柳塔を大切に思っている。今後も積極的なご協力を期待する。」と述べた。(尚士記)

■事業活動報告

「事業」

2006(平成18)年

8月27日 竹原川柳会創立50周年記念川柳大会(たけはら美術館文化劇場ホール・278名参加)

9月10日 あかつき川柳会5周年記念川柳大会(国労大坂会館・304名参加)

10月8日 第12回川柳塔まつり(ホテル・アウイナ大坂・243名参加)

11月12日 川柳塔碑合祀法要(高野山大霊園・20名参加)

2007(平成19)年

2月17日 川柳塔社各地川柳会代表者会議



同人総会会場風景

(ホテル・アウイナ大阪・32名参加)
京都塔の会35周年記念大会(ハートピア京都・73名参加)

5月28日

6月3日

6月21日

7月7日

7月7日

川柳塔みちのく20周年記念大会
(弘前プリンスホテル・70名参加)
川柳塔本社事務所移転

7月7日 路郎忌本

社句会(ホテル・ア

ウイナ大阪・119名

参加)

『主な受賞・表彰』

谷口 義 本社句

会月間賞杯永久保持

者

北野 哲男 NHK

文部科学大臣奨励賞

受賞

川柳藤井寺 藤井寺

市文化活動功労賞受

賞

『出版・句集の刊行』

NALC天の川『天

の川2』(前たもつ)

宮本三喜夫 『私の

川柳』

奥田みつ子 『ピン

チにはうつむかない

で空を見る』

木村 初子

西出 楓楽

波多野五楽庵

米澤 俊子

志田 千代

そうりゅう会

『物故者』(9名)

黒川 紫香

沢 裕子

安本 晃授

沖浜 正宏

乾 喜与志

門谷たず子

宮川 珠笑

石川侃流洞

田中 正坊

■新任役員(留任は含まず)

相談役 奥田みつ子・前 たもつ

副主幹 小島 蘭幸

副理事長 村上 玄也

常任理事 黒田 能子

会計監査 川上 大輪

参与 石森 利昭

理事 井丸 昌紀・久保田千代・小谷集一

■新同人(18名)

佐藤古拙(黒石市)

榎本宏子(京都市)

峯村勲弘(高槻市)

岡川無限(神戸市)

『残照』

『天秤座』

『われも旅ゆく一人なり』

『花の下』

『私の百句』

『そうりゅう会』

『その四』

平成18年9月23日没

10月8日没

11月6日没

12月16日没

平成19年2月5日没

3月28日没

3月30日没

4月13日没

5月8日没

86歳

100歳

69歳

94歳

80歳

102歳

85歳

72歳

91歳

鶴留百合(可児市)

坂上のり子(シドニー)

三宅満子(京都市)

長井善純(大阪市)

池原天馬(鳥取市)

西村益子(京都市)

岩崎玲子(大阪市)

松川行男(鳥取県)

森田明子(大阪市)

仁部四郎 穴吹尚士

前たもつ 福士慕情

村上玄也 伊達郁夫

米田恭昌 川端一歩

坊農柳弘 大内朝子

北野哲男 岩切康子

河井庸佑 山口光久

西村哲夫 西出楓楽

早川遼行 河内天笑

三宅保州 米澤俊子

黒田能子 鶴田遠野

安土理恵 山村一風

板尾岳人 山田葉子

森本弘風 籠島恵子

柿花和夫 川上大輪

大谷篤子 長浜美龍

田村邦昭 岸本孝子

江見見清 亀岡哲子

鈴木公弘 岸本宏章

榎本舞夢 河内月子

渡辺富子 藤井正雄

吉岡 修 池 森子

近藤 正 塩満 敏

中宇地秀四(鳥取市)

三浦さぬ(尾張旭市)

広島巴子(箕面市)

川名洋子(八王子市)

中井朋(大阪市)

西内朋月 岩佐ダン吉

櫻庭順風 奥田みつ子

水野黒兎 川久保睦子

板東倫子 鴨谷瑠美子

井伊東吉 宮本三喜夫

新家完司 山岡富美子

村上直樹 久保田千代

岩崎公誠 佐々木満作

木本朱夏 川崎ひかり

小島笑司 小島希久子

小島蘭幸 古今堂蕉子

大橋鐘造 宮崎シマ子

榎本宏子 緒方美津子

小谷集一 飛木ふりこ

大川桃花 太田扶美代

津守柳伸 榎本日の出

富山ルイ子 居合真理子

矢倉五月 吉川寿美

寺川弘一 森下愛論

都倉求芽 加島由一

太田 昭

土橋 螢

谷口 義

■おはなし(要旨)

お笑い「趣味才々」

小島 笑司

一、笑いの効用

最近「笑い」が身体に大変良いと言われており、「笑い」は人間関係の潤滑油でありクッション材だと思っています。

笑いは「アイウエオ」に始まって「ハヒフヘホ」と続きます。

大笑いすると、呼吸数が増えて横隔膜の良いい運動になり、呼吸器系、循環器系などの内臓の働きが高くなり、新陳代謝を活発にする効果があると言われていますし、精神面でも「笑い」は「不安」「恐れ」「悲しみ」から一時的に解放してくれるそうですし、神様も「人間がこの世で苦しむことがあるので、そのために、笑いを代償として与えてやろう」とされたそうです。

二、団塊の世代の趣味

07年問題の一つに団塊の世代の人々の定年がありますが、定年後のライフワークとしてどんな趣味を生きたいとするか、大いに興味のある所です。

そこで長屋の連中をモデルとした趣味の



お話に聴き入る

数々を落語化して、披露することになりました。

三、自作自演の落語 「長屋の趣味」

だんだん高齢化してきた長屋の連中を集めて大家さんが、これからの生きがいとしてどんな趣味を持っているのかを聞いていく。

①熊さん「わてお茶と川柳やってま」

(実は「かわやなぎ」と言うお茶を飲んで
いるだけ)

②正吉とん「うちは俳句だす」

(ハイクと言ってもヒッチハイクのこと)

③三ちゃん「わたしハイクキング好きです」

(ハイクキングではなくバイクキングの間
違い)

④四っさん「はい、僕の趣味はカラオケです」
(風呂屋で空の桶を浮き替わりに抱いて泳ぐカラオケ遊び)

⑤吾平さん「カラオケは私大好きですが」
(但し、歌える歌は三つだけでコーヒート
ココアと紅茶と言うが、実は替え歌)

⑥六さん「絵一ツ」
(絵を描くと言っても夜中にお布団の上に
寝ている間に書いているもの)

⑦七兵衛さん「わしは碁をやっとりますでな」
(碁は碁でも五目並べのこと)

⑧八っあん「わちきは将棋です」
(本将棋と言っても床几の上で本を読む)

⑨久太郎さん「僕は釣りが楽しみですでな」
(コンビニなどで買い物をした時、釣り銭
を間違つて余分にくれるのを楽しみにし
てる)

⑩十兵衛とん「人間の研究、運命の研究つま
り、その中でも姓名判断をやっております」

(実際街で姓名判断をやっていると変な名
前のお客ばかり。極めつけは「寿限無、
寿限無・・・バイボバイボ・・・さん」
が来てお手上げとなる)
御退屈様でした。

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から、

原田すみ子・柏原夕胡・天笑主幹・穴吹尚士
徳山みつこ・太田扶美代、後列右から、木本
朱夏・宇野幹子・牧渕富喜子・福士慕情



晴れの受賞者

10月8日はあいにくの雨となった。その雨
をものともせず遠くは佐賀、青森、島根、島

取、香川、岐阜から同人・誌友、川柳愛好者
を迎えて第13回川柳塔まつりが開催された。

定刻一時、参加者244名の熱気で盛り上がる。

司会は大田昭・木本朱夏。開会の辞は西出楓
楽理事長。河内天笑主幹の挨拶、祝電披露に
続き六賞の表彰式が行われた。例年通り主幹
から賞状と楯が授与され、所属吟社から花束
が贈られた。なお樺模賞の高瀬霜石さん（弘
前市）は都合により欠席された。

次いで西内朋月同人誌友部長から、本年度
の新人18名のうち、出席された10名の紹介
があり記念品が手渡された。お話は日本笑い
学会会員で岸和田市の同人・小島笑司氏。
（前頁参照）山本希久子新副理事長の閉会の
辞で、記念大会を終了した。（朱夏記）

月間賞は河内長野市の山岡富美子さん。

脇取り（月子・扶美代・蕉子・千代）

清記（直樹・富美子）・撮影（公誠）

兼題「ハンドル」

籠島 恵子選

秋色捜しハンドル軽くなる
水門のハンドル油されている

（七）順子

ハンドルの延長線にいるあなた

啓子

バックするハンドル若さためらわず

典子

リストラのハンドル欠伸ばばかりする

美代子

ハンドルはいつでも笑い顔へ向く

哲男

ハンドルを切るとよろける夫という

見清

ハンドルがはらはら孫の乗り始め

清治

ハンドルを持つと外車を抜きたがる
ハンドルを母の目線で持ち替える

兄ちゃんがハンドル握る二人乗り

ハンドルを握れば言葉あらくなる

無違反は腕より運と知っている

フル回転嫁のハンドル耕運機

僕のハンドル妥協の方へ向きたがる

ハンドルを握り少年風になる

ハンドルが僕の仮面を知りつくす

ハンドルは持つと安い酒がいう

ハンドルの賞味期限を書き替える

ハンドルを切り損なった前総理

我が人生右に左に妻が切る

ハンドルを二人で持てばややこしい

ハンドルの切り過ぎでした離婚です

神様にも少しハンドル任せます

ハンドルに積乱雲が絡みつく

ハンドルを持つ夫には逆らわず

ぐらついたハンドル妻にとやされる

子が巣立ち夫婦ハンドル風まかせ

ハンドルの真ん中にあるクラクション

ハンドルをどう切ったのか生きている

居酒屋の酔いにハンドルおいてくる

ハンドルがいうこと利かぬ更年期

国政のハンドル金にまみれてる

渋滞のハンドル奥歯噛んでいる

山坂を越したハンドル揺るがない

迷ったらハンドル右へ右へ切る

時雄

富喜子

みち子

忠子

百合

ばつは

咲二

無限

（沢）和子

公弘

せつ子

寿美

珠生

アヤ子

美花

わこ

義

すみ子

朋月

巴子

螢

いわゑ

弥生

求芽

賢子

幹子

登美代
いさお

ハンドルを宇宙へきつてゐる独り
 ハンドルの横で居眠りなどしない
 酒やめてハンドルさばき下手になる
 ハンドルを度胸で切っているらしい
 アメリカの持つハンドルに血の匂い
 ハンドルに言いたい事がたんとある
 戦後史を生きたハンドル軋みだす
 ハンドルがはらはらして車間距離
 タクシーで帰ると決めて旨い酒
 ハンドルを切るのは妻で義理を欠き
 それぞれのハンドルを切る嫁姑
 ハンドルのあそびは広く取っておく
 ハンドルは男 女は道しるべ
 輝きのハンドル父のライセンス
 ハンドルの代行集う北新地
 佳
 ハンドルをスローライフへ切り替える
 ハンドルをゆつくりと切る赤とんぼ
 ハンドルの先に子がいる妻がいる
 ハンドルの遊びに鬼を休ませる
 ハンドルの視野に入ってきた介護
 人
 ハンドルはうちの車と呼びに任せとく
 地
 終章へハンドル丸く切っている
 天
 ハンドルのかたちをとお茶が出る
 軸
 ハンドルへただ祈るだけ祈るだけ
 蘭 幸

兼題「炎」
 池 森子選
 ゴミになる句箋炎になる句箋
 美ら島の炎歴史を曲げさせぬ
 炎天の蛾に戦士の自負がある
 炎天に誰を思ふか影法師
 百歳の父から今日も得る炎
 恋しくて優しく抱いている炎
 古日記炎の大きかった跡
 封筒の中にひそんでいた炎
 振り向けば炎は風になっていた
 デスマスクの父よ炎をものとせず
 六十五妻の我慢が炎上す
 情念の炎は白い霧になる
 終章へ未だ書き足りぬ炎抱く
 あらん限り炎えて真つ赤な灰になる
 日和見の炎は自然鎮火する
 若き日の真つ赤な炎ラップする
 リベンジの炎はどなたにも見せぬ
 身丈越す炎の河も渡らんか
 温もりも破壊も抱いている炎
 日に三度炎を食べている女
 真人間炎を抱いているのだが
 炎えている夕日わたしのふところに
 対岸の炎綺麗な風見鶏
 僕の吐く炎は愛を弾ませる
 ストロウの先でくだいてゆく炎
 ろうそくの炎愛憎から解脱
 紅をひく炎の色を混ぜながら
 完 司
 みつこ
 富美子
 れんげ
 黒 兎
 わ こ
 哲 男
 昭 二
 義
 ばつは
 すみ子
 集 一
 半 銭
 登美代
 公 誠
 昭
 宏 章
 ア キ
 健 吾
 大 輪
 恵美子
 いわゑ
 愛 論
 修
 篤 子
 ふりこ
 みち子

正座する青い炎に変わるまで
 深奥の炎は白く白くなる
 炎と燃えた過去をバタリと裏返す
 炎にはなれずマグマのまま冷える
 聖母マリアだからだから白いほむら
 ローソクの炎仏の声だろう
 一本の炎を上げてゐる落花
 僕に炎を蘇らせたほほえみよ
 燃え尽きた炎へ響きだす挽歌
 能面の裏を返せばいちめん火
 情熱を炎の先で遊ばせる
 いざとなれば炎も素手で掴みとる
 喝采の裏で上がっている火の粉
 炎を食べる女豹を飼っている左脳
 うすむらさきの炎危険なおいする
 炎には出来ぬ火種を守り抜く
 もう炎卒業あとは水になる
 言つてはならぬ消してはならぬ炎抱く
 火だるまになつても筋は押し通す
 秘められてワインレッドとなる炎
 まだ炎抱く私も活火山
 こめかみの窪みに溜めている炎
 真心の炎は赤と限らない
 てのひらに炎を生んだ痕がある
 佳
 火遊びに素敵な炎みてしまふ
 燃えつきる前の炎が美しい
 わたしが燃えている群青の炎
 絶叫の炎どこまで床を這う
 葉 子
 明 子
 ひかり
 和 夫
 美代子
 一 甲
 咲 天
 天 笑
 柳 伸
 喜八郎
 碧
 たもつ
 扶美代
 睦 子
 楓 楽
 (矢)五
 月 子
 恵 子
 尚 士
 久 子
 洋
 啓 子
 萬 的
 朱 夏
 冬 虹
 好
 一 筒
 紀 乃

ジエラシーは氷の炎身を責める

人

みつ子

鈍感な炎になって耳飾り

地

岳人

バラ園の先に炎の海がある

天

柳右子

炎だんだん小さく約束は時効

軸

希久子

濡れた日もあった炎の懺悔録

兼題「あまい」

早川

遊行選

認知症の母にはあまい父である

孫と猫だけにはあまい妻の声

シマ子

泣き落としなどに動じぬ父の山

えこひいきわたしは神になれません

黒兎

しる粉屋で空気を読んでいる男

ハーマニカ夫が甘い曲を吹く

惠美子

致死量の甘さでさやかれた言葉

古稀過ぎてやつと分かった甘い酒

真理子

よく使いこなしてチャックあまくなり

多少のことは甘くておく定年後

洋介

あまい葡萄酒に種がみなぜだろ

鮎と鞭母の躰は生きている

芳男

ぬけぬけとぬれ手で甘い汁を吸う

ウエストのゴムが私をあまやかす

久峰

お帰りのあまいトーンに身構える

子の罠に知らんぷりしてまた掛かる

満子

少しずつ甘さを足して歳をとる

有頂天甘い撒き餌に気付かない

孝子

この先も自分にあまい僕でしよう
但し書き読まずにサインした不覚
追い風に乘って世間をあまく見る
驕慢がのぞく議員のあまい脇

天笑
富美子
安泰子
四郎

無為徒食嫌天下に甘んじる
あまい物食べさせ保険掛けてます
甘い蜜舐めたからには吐くくる
六法の死角で甘い汁を吸う

尚士
月雄
時雄
楓楽

鼻濁音で父の弱点衝いてくる
飯の世のあまさ辛さを泳ぎ切る
甘いもの止めて歩いて五キロ減る
あまく香り人寄せつけぬ崖の百合

福世
勝弘
美智代
萬的

あまく見た街に疲れていたニート
勲章の知らせにあまくなる背骨
甘い土舐めて豊作疑わず
財政のあまい蛇口を締め直す

啓子
志代
小雪花

じわじわと二人の縋りがあまくなる
詰めあまい攻撃に足拘われる
哲子も思想もないが甘党だ
家計簿へ財布の紐は甘すぎた

桃花
希久子
世津

甘く見た雑魚の小骨が喉を刺す
ばあちゃんに頼んでみるうけしける
金木犀地球の戦まだ続く
あまいな微笑モナリザから貰う

美智子
ダン吉
郁夫

お酒なら甘い辛いは問いません
あの声は孫と信じて振りこんだ
ご自分に甘いお人だ勘えている
脇役が甘い主役の捻子をまく

直樹
修樹
燈子

脇役が甘い主役の捻子をまく
甘口のカレーが好きで子煩悩

燈子

甘党を無理に誘って三次会
ぜんざいの店が結んだ新婚さん
梅干の種さえあまい絶好調
年金が入ると妻も甘くなる

佳

律子
日出子
朱夏
正和

嫁さんにあまい息子が情けない
出て行けと言えず息子の飯を炊き
あまいもの食べて女はよく笑う
コスモスの風とひととき甘くなる

倫子
じゅんこ
はつ恵
紀乃

空港にゆるんだネジが落ちている
のりしろの甘さにわたくしが洩れる

恵子

あまい汁吸うと後ろへ手が回る

集一

年下の夫で好きにさせてます

栄子

アホらして見ちゃおれない新所帯

軸

栄子

兼題「鳥」

川崎

ひかり選

焼鳥で充電してるお父さん

家計簿の隅に飼つてる青いヒナ

今日も鳥あしたも鳥ですつと鳥

翔びたいが翔べぬ私も鶏も

国境で迷子になった白い鳩

カラスにもさつと悩みはあるだろう

生ゴミの日をカラスから教えられ

鳥のように風のようにもなりたい日

集まれば自慢話になるカラス

欣子
玲子
義洋
哲子
明子
由一
いわゑ
大輪

第13回 川柳塔まつり



主幹挨拶

温暖化帰る国ない渡り鳥
白鳥もあひるもいるが仲がいい
風を読みアルプス越える渡り鳥
ゴミの日をカラスの声に教えられ
生ごみへカラスの舌も肥えてきた
飛ばす気で折るホスピスの千羽鶴
飛行機に乗りたくないと思う鳥
山のカラスよ独居老人居ませんか
母の涙を知っているのは渡り鳥
出稼ぎのカラスに帰る山が無い
シマツツ九官鳥がきいていた
お土産がないからキタへ行かぬ鳥
鳥の声やつと庭にも秋が来た
胸底に火の鳥を飼ひ独り行く
鳥だつて暗くなつたら巢に帰る
九官鳥夫婦の秘密囁り出す

倫子 希久子 正 萌 洋介 幹子 保州 文子 惠美子 柳昌 とし子 栄子 月子 みつ子 見清 正春

恋をしてまた鳥になる蝶になる
父母のこと心配せずに飛べよ鳥
野鳥観る会の打ち上げ焼鳥屋
天分をわきまえている籠の鳥
九官鳥が個人情報囁り出す
鳥籠をあけて待っている青い鳥
水鳥のはなしが落ちてくる干潟
結局は籠に戻った籠の鳥
火の鳥を死ぬまで胸に飼うつもり
私にも分相応の青い鳥
あひるの子いつか空飛ぶ夢を見る
へそくりの在りか知つた九官鳥
青春の翼が抱いている宇宙
もう止めた探し続けた青い鳥
朝帰りカラスにじつと見つめられ
金柑のあまさを鳥は忘れない
自由だと錯覚してる籠の鳥
親よりも大きな鳥が未だ飛はぬ
人間のするさ悪かき見抜く鳥
種時けは鳥が拾っていた迂闊
妻と手をつなぐと鳥になれそうだ
紅さしてきれいな鳥になれそう
鳥になる妻でときどき飛んでる
笛吹けばすぐ踊りだす鳥という
鳥は良い何時でも青い空飛べる
大空の鳥を見上げる車椅子

住

白鳥に憧れているあひるの子
飛ぶ鳥よ私は何に見えますか

准一 公弘 勲弘 碧 昭和子 昭二 咲二 灯子 楓楽 尚士 昭 玄也 富美子 孝一 宏子 ルイ子 美智代 美義 正明 像山 蘭幸 喜八郎 惠子 登美代 妙 日の出 俣子 はつ恵

鶴千羽折つても消えぬ銃の音
浜千鳥母の行方を追うでない
鳥になつて銀河の君に逢いにゆく
人 もし鳥になれたら北へ逢いに行く
地 大空が好きで少年鳥になる
天 窓が開く疑心暗鬼の籠の鳥
軸 殺割つたビナの未来は無限大
兼題 「のびる」 岸本 宏章選
杉の子が天までのびるまで生きる
地震国それでも伸びるノッポビル
伸びる芽を摘んで悔やんでいる過保護
いつか天へ届くと信じている双葉
無言劇始めて妻は爪伸ばす
ハイウエー伸びて古里近くなり
親より子より孫へと背がのびる
鬼の居ぬ時だけのびる羽根がある
ためらつて一語がどうしてものびる
のびる子の母は笑顔のほめ上手
延びた寿命ノホホシとして楽しまん
お料理は出来そうもない長い爪
のびる子と信じて振った愛の鞭
のびのびと暮した付けが皮下脂肪
間延びた話纏ってくる眠気
ファッションが無精髭だかわからない

好 森子 夕胡 いさお 無限 幸雀 郁夫 洋子 真理子 隆彦 シルク 哲子 扶美代 わこ 幸子 みつ子 千代 鐘造 宏一 玄也 まみ子

三猿になつてのばしていく命
管理職のびたうどんを食べている
まのびする話へお腹空いてきた
足下が見えず天狗の鼻のびる
待ちぼうけの首を見ている花時計
ご意見はともかく蕎麦がのびてます
カニ鍋に無言の箸がのびてくる
背を伸ばせと今でも母に叱られる
伸びざかり青いリンゴはよく転ぶ
背をしゃんと伸ばして老いを追い払う
脳の皺のびて可愛い二度童子
憂国の志士がのびてる終電車
嘘つけばつくほど舌が伸びてくる
忘れもの捜す時間がのびてきた
日がたてばたつて程返事しにくなり
遠足の列のびたまま帰り着く
ご挨拶一言だけが延々と
正直な身体だ夏の疲れかな
ちよつと手をのばすと本もお茶もある
十指みな伸ばして昼の大アクビ
聞き上手忘れ上手で生きのびる
棒グラフ伸びて荷物を残す
引きのばす返事の中にある未練
親よりも伸びて巣立たぬ子の多し
のびる芽へコーチ厳しい目が光る
盗み酒バレー退院またのびる
爪のばす女心をたかぶらせ
大笑いして命をのばす策を練る
振り向くとライバルの影のびてくる

茂雄 芳男 月子 碧 美代子 柳弘 保輪 大輪 尚士 欣子 富子 楓楽 宏子 俣子 せつ子 洋介 蕉子 瑠美子 睦子 准一 富美子 (安) 泰子 すみ子 庸佑 一步 恵子 美花 昭

父の丈越えたころから子の無口
廃校を知らずに記念樹よくのびる
感情線ばかりが伸びる手のひらだ
髭伸ばす息子に少し他人めく
のびた爪切る子にとなたさんと母
やわらかなころ伸びたり縮んだり
佳
時という大事なものを引きのばす
笑いじわ伸ばして今日を締めくくる
相続がもめて雑草のびるまま
長寿国ベトナムも寿命のびている
核シェルターで一週間は生きのびる
人
人柄を買われてのびる小商い
地
余命一年あから季節ふたまわり
天
戦友に悪いわると生きのびる
軸
背のびした影を他人が踏みに来る
兼題「空 氣」 河内 天笑選

房枝 たもつ 咲二 正美 セツ子 完司 公誠 無限 由紀子 珠子 ダン吉 久峰 ひかり 富喜子 天笑選

変りない朝の空気がありがたい
八方美人周りの空気弄ぶ
君の声真空バックしています
木の精が漂うような山の朝
子は宝空気になって包みたい
同じ空気が繋がっているわたしたち
澄みきった夜空私も宇宙人
いつまでもあると思っている空気
境内を祭り太鼓が震わせる
空気にはなれぬ夫婦の茶番劇
名物はないが空気だけは旨い
白けなかった空気へほんと抜くビール
あつさりと空気が動く多数決
露地裏の空気が好きな地藏尊
コオロギが鳴いて空気が入れ替わる
木を植えてうまい空気を作りたい
空気買うそんな日が来ませんように
スムーズに空気を吸える有難さ
しよもないジョーク空気を薄くする
恋人が来ると空気が甘くなる
新しい空気を提げて赴任する
あら居たの居なけりや困る人なのに
空気への感謝すつかり忘れてた
喘息に濃い目の空気欲しくなり
紅一点ふわりと空気裏返す
本音と本音向き合い空気透き通る
こつそりと空気抜く場所もつてます
初出席ぬくい空気に包まれる
張り詰めた空気の中で大あくび

さくら 柳弘 小雪 比ろ志 巴子 あきこ まさよ 公弘 尚士 (古) 和子 迦行 いわゑ 富喜子 千里 みつこ 美津子 恵子 久峰 楓楽 典子 灯子 百合 千枝子 篤子 無限 希久子 (矢) 五月 ルイ子 昌紀

夏バテを知らない鶴橋の空気が
ねえあなただけの空気がどんな色

退院し空気の甘さを知るわが家
苦勞性空気がすっかり読んでいる
少しだけ言葉ひかえて良い空気が
お互いにいこじ空気が動かない
頂上で薄い空気を吸わされる
和やかな空気が百歳越えた通夜
山の空気がきつとむらさき色ですね
好きな人と同じ空気を吸うている
生臭い空気が漂う袖の下
輪の中の空気が読めず浮いている
あの人が座り空気が流れ出す
あの人のそばは空気がフローラル
なじめない空気がセレブがいてはる
佳

エレベーターが開くたびはとすると空気が
ワンマンにならないための空気が穴
おと呼ぶハイと空気が応えてる
夫婦仲空気のようでおとぼけで
温暖化ほとんど不味くなる空気が
人

つくづくと空気になれぬ人だった
地
一輪が開く大気をふるわせて
天
思いつき空気を吸った呱呱の声 山岡
軸 富美子

真空の月を探りにかくや姫

俣子

章子

榮呼

忠恵

啓子

孝子

健吾

義子

茂美

英子

珠子

明子

修子

蘭幸

ますみ

茂雄

房枝

和代

懇親宴

懇親宴は定刻より少し早く午後四時四十五分、葛城の間で一一〇名の参加を得て賑やかに開催された。全員に配られた豆絞りの手拭いは鶴田遠野氏の寄贈による。

司会進行は、大内朝子、坊農柳弘が担当。開宴の挨拶はユーモアを交えて坊農柳弘常任理事。乾杯の音頭は、唐津の仁部四郎氏。一同力強く唱和して乾杯。

アトラクションのトップは丹後屋肇氏の詩吟「合戦川中島」、透き通るような声に一同聞き惚れる。一番手は山口光久氏の「南京玉すだれ」、懇親宴では初めての出し物で一同の目が集中。手拍子も加わり盛り上がる。

続いて片山修一氏（東吉氏友人）のアカーデオン演奏に天笑主幹ほか多数の方が歌の飛び入りをして賑やかに。恒例のフラダンスは米澤淑子さん、北村賢子さん、河内月子さんが花を添える。

新家元司氏のリードで「貝殻節」の大合唱。「河内音頭」は大内朝子さんを先頭に全員の踊りで最高潮に達する。

閉会の挨拶は日川協事務局長の本田智彦氏。最後は「星影のワルツ」を全員で合唱。来年の再会を約し宴に幕を下ろした。

吉本新喜劇観劇 十月九日

「まつり」の興奮覚めやらぬまま三年振りの翌日観光「ならばグラント花月」笑いの殿堂へ出掛けた。

参加者は20名。朝11時の公演に連休明けにも拘わらず、最近のお笑いブームからか、全館満員の盛況、特に小学生の団体や若い人が目立った。

出演はオール阪神巨人、月亭八方、チッチキチなどテレビで馴染みの顔ぶれに加え、新喜劇の時事ネタや、お笑い芸人によるコントなど大いに笑わせてくれた。

立ち見席までぎっしり超満員、劇場内の売店では、吉本オリジナルの土産、お笑いグッズを売り物にした商魂たくましさを見た。

幸い私たちは主幹の尽力により、舞台に近い席で観劇でき、テレビとは一味も二味も違う迫力の二時間半大いに笑った。

しかし、残念なことに主幹の体調が良くなくて参加できず、皆様によりしくとの連絡があった。

13時半、劇場をあとに、青森から来られた方を遠野氏と美籠さんが空港まで見送り、他の人は昼食に出かけた。良かったねと今見終わつたばかりの話題で持ち切りであった。

午後2時半、朝からの話題に終止符を打てないまま、また来年もこんな機会が持てるよう期待しつつの解散をした。（柳弘記）

参加者の感想（順不同）

本田智彦氏（番傘川柳本社）

第13回川柳塔まつりの御盛会おめでとうございます。毎年参加していますが、今年は特にぎやかだったように思います。女性選者の柔らかい披露も川柳塔らしい雰囲気でした。和を大切に、人間の心を詠む川柳の醍醐味を味わせていただきました。

仁部四郎氏（相談役・唐津市）

「今年はブルトレだったので」は、合理性のない理由だが「まつりに参加できてよかった」という想いが昨年より強い。

型どおりに大会をスムーズに運営する人々の御苦労があるからこそ、大きな安心を共有することができ。川柳塔はきちんと立っているという安心を確かめて唐津へ帰ることにする。

森原道夫氏（理事・堺市）

まつり全体の感想は、よくまとまっていたチームワークの良さを感じた。句会では、思い切った句、ドキッとさせる句に出会えなかったのは残念に思う。私は今『橘高薫風川柳句集』の句の初出誌は何か、どの句会で発表されたか、いつ作られた等々調査中なので、御存知のそれらの情報を知らせてほしい。

大内朝子さん（参事・香芝市）

昨年は体調を崩し、参加できませんでした

が今年は元気に出席できたことを喜んでおります。大勢のお仲間と出会い、川柳にまたやる気が芽生えました。

懇親宴の司会へ久々血が踊りました。健康に感謝しながら来年も元気で参加できればと思います。

早川遯行氏（同人・愛知県）

大山から「川柳茶はしら」の総勢7人で参加しました。今回選者を務めさせていただいたのも、私を推薦下さった東野大八、橘高薫風岡先生への恩返しと喜んでおります。



主幹を囲む新同人

今後先生に恥じぬよう勉強して、川柳塔発展のために頑張りたいと思います。

山本加お里さん（誌友・大阪市）

初めて参加させていただき、皆さんのすばらしい句に感動、パワーをもらいました。

天笑先生の教えを受け、いい仲間に出会い教室へ行くのを楽しみにしています。

今日一日、どきどきと楽しませていただきました。

長井善純氏（同人・大阪市）

川柳塔まつりは初めてです。柳歴三年、川柳の奥深さがわかり、ぐんぐんのめりこんでいくようです。川柳大好きになりました。

祝電拝受（敬称略）時の川柳社 平山繁夫

川柳塔みちのく 波多野五楽庵

御芳志御礼（敬称略・順不同）

西出楓楽 小島蘭幸 都倉求芽 鴨谷瑠美子

本田智彦 木本朱夏 籠島恵子 奥田みつ子

波多野五楽庵 前たもつ 池森子 穴吹尚士

仁部四郎 小島笑司 川端一步 川崎ひかり

中原諷人 坊農柳弘 河井庸佑 牧瀨富喜子

福士慕情 長浜美籠 鶴田遠野 西口いわゑ

鈴木公弘 山本義子 鍛原千里 園山多賀子

土橋 螢 宇野幹子 岸本宏章 瀬戸まさよ

早川遯行 寺井弘子 小糸昭子 山本希久子

鳥取らくだの会 川柳塔みちのく 堺川柳会

川柳塔鹿野みか月 京都塔の会 美研アート



西出楓楽理事長→



第13回
川柳塔まつり
四階 金剛の間



路郎賞受賞



表彰楯



貝殻節大合唱



懇親宴会司会者



懇親宴



青森県からの出席者を囲んで

川柳大会参加者

総数 259名
(順不同・敬称略)

【青森】櫻庭順風 福士慕情
【岐阜】鶴留百合 板山まみ子
【愛知】片岡文男 関本かつ子
吉田幸子 早川遡行 金子美千代
【京都】高島啓子 都倉求芽 榎本宏子
三宅満子 山田葉子
【大阪】浅野房子 穴吹尚士 赤松ますみ
阿萬萬の 井伊東吉 板尾岳人 安芸田泰子
池上清治 池 森子 井上桂作 伊藤アヤ子
石堂潤子 井丸昌紀 岩崎公誠 指宿千枝子
岩崎玲子 井上一箇 上嶋幸雀 海老池 洋
江口 度 江見見清 榎本舞夢 岩佐ダン吉
大川桃花 大堀正明 岡本久峰 大久保伸子
奥 時雄 奥村五月 太田 昭 榎本日の出
大谷篤子 大橋鐘造 荻野像山 太田扶美代
柿花和夫 笠井欣子 笠嶋惠美 江島谷勝弘
加島由一 河井庸佑 吉川寿美 太田とし子
川原章久 河内月子 河内天笑 川久保睦子
龍島恵子 川端一步 北村賢子 鴨谷瑠美子
栗田久子 桑原道夫 藏田光子 桑田ゆきの
小島笑司 楠 昭子 小谷集一 古今堂蕉子
小林わこ 近藤 正 坂上淳司 神夏磯典子
坂上高栄 佐甲昭二 佐波正春 佐々木満作
沢田和子 志田千代 鈴木栄子 小寺竜之介

杉本義昭 高杉千歩 谷口 義 柴本はつは
伊達郁夫 土橋房枝 津守柳伸 嶋澤喜八郎
鶴田遠野 寺井弘子 寺川弘一 神野宇乃子
富田美義 中井アキ 中井 萌 神野千恵子
内藤光枝 長井善純 中岡 妙 齋藤さくら
中岡香代 中野健吾 中村穀子 鈴木いとお
西川更紗 西出楓葉 野田栄呼 瀬戸まさよ
八田灯子 板東倫子 針生和代 高城じゅんこ
樋口冬虹 日野 愿 藤井正雄 高田美代子
藤井則彦 伏見雅明 本田智彦 田中由起子
前田咲二 前田紀雄 前たもつ 玉木あさ子
前原正美 丹後屋肇 升成 好 津田シルク
水野黒兎 宮西弥生 松井明江 津守なぎさ
峯村勲弘 村上玄也 村上直樹 徳山みつこ
森 茜 森田明子 森田 麗 富山ルイ子
森村美花 森下愛論 森本弘風 中村れんげ
安田忠子 矢野 梓 山崎珠生 西田美佐子
山本半銭 山本柳昌 吉内福世 長谷川呂万
矢倉五月 雪本珠子 吉岡 修 羽田野洋介
吉川弘泰 吉村雅文 吉村一風 原田すみ子
米澤敏子 米田水昇 若松雅枝 平嶋美智子
松尾美智代 松尾柳石子 宮崎シマ子
森中恵美子 山岡富美子 山川日出子
山本加お里 山本憲太郎 出口セツ子
山本希久子

【兵庫】大森一甲 石原歳子 伊勢田 毅
小川佳恵 亀岡哲子 加川靖鬼 緒方美津子
金川宣子 北野哲男 黒田能子 奥田みつ子
小山紀乃 梶元世津 田原宏一 久保田千代
遠山可住 田中章子 坪井孝一 七反田順子
長浜美籠 西内朋月 広島巴子 西口いわゑ
古川奮水 本田律子 堀 正和 松下比ろ志
森本高明 山口光久 阿川無限 前川千津子
山本芳男 山本義子 牧瀬富喜子
【奈良】安土理恵 阿部茶々 飛水ふりこ
大内朝子 河合茂雄 鍛原千里 居谷真理子
坊農柳弘 渡辺富子 吉川 卓 米田恭昌
【和歌山】石田隆彦 宇野幹子 上地登美代
木本朱夏 川上大輪 柏原夕胡 古久保和子
喜田准一 楠見章子 小谷小雪 宮本三喜夫
武本 碧 福本英子 三宅保州 松尾和香
たむらあきこ
【鳥取】岸本宏章 鈴木公弘 有沢せつ子
田村邦昭 岸本孝子 新家完司 斉尾くにこ
土橋 螢 山松みち子
【島根】相見柳歩 伊藤玲子 福岡芳枝
松本文子 森 茂美
【広島】小島蘭幸
【佐賀】仁部四郎
【熊本】岩切康子
【香川】川崎ひかり 山崎はつ恵

誹風柳多留一篇研究 27

小栗 清吾・伊吹和男
山田 昭夫・増田忠彦
山口 由昭

清 博美

180 月見前こうをまねきに息子子行

小栗 業は、①仏語。意思による身心の活動行為。②前世の善悪の行為によつて、現世においてうける応報。③特に悪業、罪業をいう「日」。

吉原句。月の紋日の前に吉原へ行く息子は、紋日の仕舞いという大きな負担を背負つてくることになるという意であろう。「業を招く」という成句は辞書にはないが、「…自然に阿鼻地獄の業を招くこと未法に於いて、多分これ有るか」（日蓮聖人御書全集十法界因果抄）という使い方から見て、悪い結果を引き起こすことを言うようである。

禿よくこうをまねいたやつをとり

明二松5

山口 賛。招くこと必定。

清 賛。これも文句取ですネ。

181 小へんにおいて女房ハ碁をしかり

小栗 一旦寝た女房が小便に起きたとき、まだ碁をやっているのを見て叱つたというのである。叱られているのは誰かということになるが、「拾遺輪講」（岩波）では「亭主と客」とされている。たしかに女房の対は亭主であり、亭主の碁の相手は客であろうが、「叱る」が落ち着かない。「叱る」の意味は「目上の者が目下の者のよくない点を見て、怒って威圧的にとがめる」（日）であるから、女房の客に対する態度とは思えない。普通の女房は、

基の客は大既にして女房寮る 傍五33
基の客の馳走に内儀先へ寐る 六一25

と、勝手に碁をやらせるのみである。ただ、余程のストーリーを作らない限り他に解しようもないので「亭主と客」に従つておくが、私には腑に落ちない句である。

伊吹 賛。言われてみれば「叱る」が落ち着きません。

山田 亭主を一すよんで叱つたのでしよう。「いいかげんにしなさいよ」などと。

増田 賛。遊びごとの徹夜を叱る女房、しごく普通だと思いますが。

山口 賛。江戸の長屋では女性上位。武家屋敷でなければ普通の家ではあり得るでしょう。長屋ならドンピシャリ。

清 賛。「叱る」は、小言をいう、文句をいう、などもう少し広く解釈していいのではないかと思つてゐる。

182 二十けんとし狂ふのか一たんな

小栗 とち狂うは、ふざけあう。男女間にいうのが通例。一旦那は、寺にとつて最も大切な旦那（江）。

浅草寺境内の二十軒茶屋の句。看板娘とふざけ合つてゐるのが、茶代を法外に奮発した

店一番の客であるという意かと思ふ。

野暮と化物とち狂う二十軒

四六二

山口 賛。今でもあります。遊び場所どころ狂うのはどこでも一旦那。

清 賛。

183 硯ぶた度く引よせるのまぬやつ

小栗 硯蓋は、祝などの席で、口取り、さかななどを盛る盆状の容器。またその口取り、さかな。口取肴は、もと、饗膳料理の最初に座つき吸物といっしょに出すかちぐり、のしあわび、こんぶの類の盛物をいい、後には、きんとん、かまぼこ、その他魚肉や鶏肉などを甘く煮て盛り合わせたものという（「日」）。

硯蓋はオードブル的なもので、和食のフルコースではあまり手を付けられないで下がってくるもの。そこで、

次の間へつくろつて出す硯ぶた

三二

硯蓋喜介「君へ仕へさせ

二二二

ということにも相成るわけだが、下戸は食い気専門であり手持ちぶさたでもあるから、硯蓋を度々手元へ引き寄せてきれいに平らげるのである。

硯ぶた下戸へわたすと建長寺

三八二

清 賛。手持ち無沙汰で、こうでもしないと

間がもてないのである。

184 もり久のかくに八いかぬ黄八丈

小栗 主馬盛久は、平家の侍。平氏が亡びた後は京都に隠れて居たが、捕らえられて鎌倉に引かれ、文治二年一月に由比ヶ浜で斬られようとしたが、刀手の刀が折れたので救されたという。謡曲に「盛久」あり、かねて清水の観音を信仰していたので、由比ヶ浜で斬られようとした時、観音の念力に依つて不思議に助命せられ、頼朝の前で舞を舞うというように作られている（「辞集」）。

格は、同じような仕方。手段（「日」）。

「黄八丈」は白子屋お熊。番頭と通じ養子毒殺を図つて獄門となつた。句意は、盛久はあわやという時に観音様の加護で助かったが、お熊の方はそうはいかなかったというまじか。

山口 賛。この句安永二年の句ですが、柳多留十一篇の出た安永五年に「恋娘昔八丈」は三月中村座で歌舞伎初演、大当たりをとっています。だから入れたのでしょうか。時事吟といえましようか。

清 賛。

185 名代の部屋へくやみが貳三人

小栗 折角登楼するのに、遊女に客がかち合つたりして、廻し部屋で名代をあてがわれる羽目になった遊客。「お気の毒に」と、部屋を覗いて慰めを言っていく人が「三人いる」という句である。その悔やみを言っていく人は誰か。遊客の仲間とも事情を知っている遊女・新造等ともとれる。決め手はないが小生の好みとしては遊女。因みに柳雨「吉原志」には「お気の毒でありんすねへ」と頭注がある。

覗ひてハ悔ミ言ツてくけちな晩 五一六
赤ひ子にくやみいわれるけちなはん

安七義三

清 賛。

186 御地頭と公事と八古事をしらぬやつ

小栗 御地頭と訴訟沙汰をするとは古事（故事）を知らない奴だ。だって、昔から「泣く子と地頭には勝てぬ」と言うではないか。「泣く子と地頭とは不レ克」（譬喩盡）。

白狐と地頭にや勝れぬと知たふり 三七二
婿曰ク泣く子と地頭はた女房

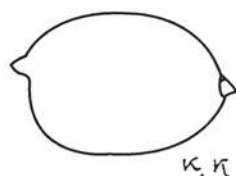
一三六

清 賛。無謀な試みである。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「飛ぶ」 鈴木公弘選

九条の話になると睡が飛び
絵日記を飛び出し跳ねた夏休み
竹トンボトンボを越えて飛んでいる
味方から堂堂野次が飛ぶ落ち目
助走路が短くなつて飛びにくい
しゃぼん玉つかの間の虹抱いて飛ぶ
飛び立った小鳥古巣に戻らない
大臣になると飛び出す金と女
蝶とんだ辺りの花が枯れている
飛んだ過去確かにあつた紙オムツ
飛び出して行く当てもない喧嘩悔い
地に足がつく程度なら飛んでいる
飛び越えた積りの縄が絡み付き
母危篤飛んで来た娘の待つ遺産
ごめんととも言わずに黄砂飛んでくる
手品師の鳩は飛ぶ夢捨ててない

愛知県	早川	遡行
大山市	金子美千代	
八王子市	川名	洋子
篠山市	遠山	可住
鳥取市	西川	和子
豊中市	江見	見清
高知市	小川	てるみ
日高市	根岸	方子
西宮市	牧瀨	富喜子
神戸市	伊勢田	毅
宇部市	高山	清子
鳥取県	西谷	悦子
堺市	荻野	像山
弘前市	櫻庭	順風
松原市	玉置	重人
鳥取市	有沢	せつ子

「飛ぶ」 西口いわゑ選

えいままよ一先ず飛んで考える
明日は飛ぶ折り鶴の空とておく
定年になった夫が飛びたがる
飛び込んでラムネのような泡を立て
ボール飛ぶそれからドラマ始まった
輪の中で反対向きに飛ぶジョーク
正論に声のつぶてが飛んで来る
あの頃は幸せだった飛んでいた
飛べなかった明治の母が背を押す
飛べる鳥飛べない鳥も居て仲間
遮断機が下りて飛べなくなった恋
飛びなさい神の叱咤が聞こえてる
飛び立てる姿勢で君の横に居る
蝶とんだ辺りの花が枯れている
よさこいの汗も飛び散る炎天下
ハネムーン月までちよつと飛んでくる

倉吉市	梶谷	和郎
三田市	久保田	千代
米子市	吉田	陽子
静岡県	蘭田	獺香
藤井寺市	若松	雅枝
京都市	都倉	求芽
和泉市	横山	捷也
西宮市	坪井	孝一
堺市	志田	千代
鳥根県	伊藤	寿美
池田市	北出	北朗
鳥取市	武田	帆
藤井寺市	太田	扶美代
西宮市	牧瀨	富喜子
高知市	小川	てるみ
砂川市	大橋	政良

飛びそこなつた昔が煩惱に変わる
 カルテから飛び立つ鶴を折り急ぐ
 上昇気流いま飛ばないと悔い残る
 弱虫が突然飛んだとべるんだ
 赤い服着た時だけは飛んできます
 飛び込んで来いの言葉にだまされて
 零戦に乗った夢からまだ醒めぬ
 欲捨てて君のふところまで飛ばう
 妻の手に結局もどるブーメラン
 雲ふわりいいなお前は風まかせ
 飛んでいゝうちは見えない影もあり
 飛ぶ力少し残して喧嘩する
 順番が飛んでそれから仲違い
 そこまでも話が飛んでいましたか
 蹴り返したはずの石ころ飛んでくる
 ライバルが居て飛んでいる傷だらけ
 土踏まずとべとべとけしかける
 昭和史の谷間を飛んだシャボン玉
 象だつて空飛ぶのぞみあるのです

秀句

軸吟

美しく飛ぶ形だけ考える

藤井寺市	太田扶美代	富田林市	中井 アキ	鳥取市	土橋 螢	高槻市	片山かずお	東大阪市	柴本ばつは	和歌山市	王置 当代	弘前市	高橋 岳水
大阪府	中岡 妙	堺市	奥 時雄	出雲市	竹泊ちかし	河内長野市	村上 直樹	西宮市	片山 忠	大阪府	福本 英子	枚方市	小林 わこ
寝屋川市	宮西 弥生	八尾市	神夏磯典子	和歌山市	福本 英子	大阪府	小川 弘子	弘前市	高瀬 霜石	山本 義子	三田市	久保田千代	米子市
大阪府	森田 明子	白根 ふみ	白根 ふみ	大阪府	森田 明子	白根 ふみ	森田 明子	白根 ふみ	森田 明子	白根 ふみ	森田 明子	白根 ふみ	森田 明子

手料理を褒めたらビール飛んできた
 飛ぶ勇氣引く勇氣なく落し蓋
 懐へ飛び込んで来い開けてある
 地平線までは飛べますこぼれ種
 飛べそうな予感大きく息を吸う
 地球丸ごと宇宙一周できないか
 二人なら飛べそうなので手をつなぐ
 飛ぶ鳥を落した頃の傷の跡
 土踏まずとべとべとけしかける
 どの辺り飛んでいくやら千の風
 蛭ひらひら哀しみ色が深くなる
 国境のない空を飛ぶ白鳥座
 影法師と一緒に飛ばされていった
 福の神飛行ルートを明かさな
 飛んだのは女男は巢にこもる
 昭和史の谷間を飛んだシャボン玉
 飛び込んだ胸のぬくみにあつた鞭
 高く飛べそう言われても蛙の子
 弱虫が突然飛んだとべるんだ

秀句

軸吟

飛んできた蝶の中に愛もある

神戸市	山口 光久	堺市	柿花 和夫	米子市	白根 ふみ	大阪府	柴本ばつは	池田市	上嶋 幸雀	和歌山市	松原 寿子	弘前市	高瀬 霜石
京都府	榎本 宏子	八尾市	高杉 千歩	和歌山市	柏原 夕胡	鳥取県	斉尾くにこ	高田美代子	播本 充子	板山まみ子	高瀬 霜石	弘前市	高瀬 霜石
四條畷市	吉岡 修	大阪府	神夏磯典子	枚方市	小林 わこ	芦屋市	黒田 能子	保州	三宅 保州	黒田 能子	保州	三宅 保州	黒田 能子
大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子	大阪府	神夏磯典子

ピント

高橋 岳水選



ピンはけの政治で格差つくばかり
 ピント決め見事に咲いた婦人像
 政治家のピンが可成りずれている
 飲み過ぎてピンが合わぬ受け答え
 定年のピンは妻に合わせとく
 ピンはけも混って古希の同期会
 ピンはけをカメラのせいにしてしま
 買収にピント合わせるまでの使者
 お見事にピント合わせた富士の山
 ピント合うハートがそばに居る安堵
 三世代ピントなど合う筈がない
 びつたりとピント合わせて網をかけ
 意図的にピンボケさせるプロの技
 よく聞けば話のピント外れてる
 食い違う会話で妻と揉めている
 子に還る母にピントを合やす日々
 無気力に過す週末ピントずれ
 連れ添ってやつとピントが合ってくる
 諺言へ妻はピントを外さない
 ピンボケでよかった皺が分らない
 やさしさが過ぎてピントがほやけ出す
 かみ合わぬ議論焦り続れたまま

強 花 一
 匠 匠 一
 一 花 一
 可 住
 蜂 朗
 雅 枝
 順 風
 准 一
 遠 野
 あ やめ
 雅 明
 東 吉
 歳 子
 照 彦
 富 子
 公 誠
 主 一
 正 和
 美 千代
 碧 夫
 輝 夫

焦点を合わせたい人脇にいる
 少しだけピンとずらすと生きやすい
 ぬるま湯のピンが違う官と民
 焦点を合わせずと歩き出す日傘
 人生のピンがずれた離婚劇
 ライバルも老いてピンがはけている
 鼻の差へ結着付けたのはピン
 雑踏の君に合わせたピント
 人の世のピンと合せに苦勞する
 質問のピンをうまくはずされる
 詰問にピント外れな返事する
 相槌は打てぬピンがずれている
 世の中が揺れてピンが定まらぬ
 這い這いの子を追うババのカメラアイ
 ひと抓みの塩でピントを合やすシエフ
 佳
 深読みをするとピンがずれてくる
 被写体がブレて遺影に使えない
 夢ばかり追ってピンが甘くなる
 焦点をぼかし延命策をとる
 焦点を絞ると見えてくる素顔
 人
 団塊にピント合わせたチラシ来る
 ケータイをみんな眺めてみな他人
 民意聞くピンと絞ったアンケート
 軸
 焦点をぼかして太る悪巧み

哲 男
 婦 美子
 勝 視
 伊 津志
 徑 子
 藤 朗
 庸 佑
 明 治
 勇 子
 千 代
 時 雄
 花 順
 秀 四
 愁 女
 柳 弘
 充 子
 慕 情
 正 雄
 隆 盛
 権 悟
 雄 々
 霜 石
 方 子

黄

石谷美恵子選



関西の色は黄色いタイガース
 危険から守る役目をする黄色
 ストップが行け行けなのか黄信号
 黄桜を注いで河童を供養する
 勇み足待ったをかける黄信号
 地下鉄を上がれば天へいちゃう黄
 くちばしが黄色と言われ修業する
 菜の花の海を二人の遍路笠
 無言劇カナリアも反抗期です
 着飾ったセレブはまるで黄金虫
 黄だ赤だ出合頭でもめている
 妻からのイエローカード貯めている
 黄金の埋蔵口マン史跡掘る
 黄信号さつちり停る路線バス
 乗り換える度に近づく黄泉の駅
 父の遺書黄色く褪せた軍事便
 韓流に熟女黄色く褪せた生き上げ
 黄信号そんな余生を生きている
 黄金波感謝で歩む万歩計
 人生の黄色に魔物住み易い
 老体の何処を押しても黄信号
 食卓に君臨してるマヨネーズ

千 代
 歳 子
 淳 司
 水 笑
 百 合
 哲 男
 圭 一郎
 強 一
 桃 葉
 倫 子
 妻 子
 弘 風
 猿 沓
 正 和
 美 義
 あすま
 一 勝
 花 匠
 奮 水
 志 華子
 霜 石

黄の衣装脱ぎ散らかしている銀杏

儲かったような気がする黄身ふたつ

信号の黄に性格見られてる

黄色い声一度も出した事がない

ひまわりを見る目は画家の貌となる

黄金の腕を神様見逃さず

畑仕事黄ばんだシャツに農の自負

黄色から赤青になる顔の色

黄信号抱いて大事に世を渡る

山は黄に赤に染まって今青春

黄色い声あげる若さが遠ざかる

郷愁をクルリと返す玉子焼き

君が代に黄色い声が入ってる

祭壇へ主役になれぬ黄の小菊

年金に黄色の付箋つけられる

佳

点滅の黄色私も揺れている

黄色い声も出す事はないだろう

黄金の波日本の秋はおいしいね

黄昏へわたしをおいて深い秋

雨風も日照りも耐えた稲穂垂れ

人

黄八丈島の風土を織り上げる

地

秋の黄よこれぞ瑞穂の国の色

天

特訓の汗に黄ばんだユニホーム

軸

黄昏の浜へ埋めてきた別れ

ミツ子 五月 行

靖鬼 碧

俶男

悦男

典子

シマ子

泰女

幹子

日の出

善信

螢

隆盛

洋

一知

不思議

亀岡 哲子選



不可思議な慈悲の光に照らされて

ご主人を亡くして元氣出る不思議

票読み通りの何故か票が出る

不思議ではないそれなりに訳がある

年金が途中で消える七不思議

大罪も保釈でけりのつく不思議

政治家の口は東へ陽を沈め

国交はないが入港する不思議

悪いことしていないのに恐妻家

きつつきに脳しんとうのない不思議

歳重ね自分が見えてくる不思議

訂正が効く政治家の領収書

害があると書いたタバコを売る不思議

飛行機が空飛び船は水に浮く

新旧の記憶装置が違う脳

どん底で不思議な神の手に出合い

生きている不思議全てに感謝する

遺伝子がチャリ顔出す子の仕草

ふわふわと雲の不思議を追っている

いないの月に兎が見えてくる

何故だろう急に優しくしてくれる

以心伝心遠い人から来るメール

螢

像山

岳水

（編）洋

週行

恭昌

四郎

高明

蜂朗

かつ子

（編）節子

みつこ

かずお

あずま

東吉

敏子

圭一郎

（川）洋子

志華子

（田）章子

茂代

一壺

発掘の遺跡千古の謎を秘め

オレオレ詐欺まだ善人が多くいて

鈴虫が毎年同じ日に生まれ

何事も見通している老母の勘

幼子と会えば不思議と笑みこぼれ

ふしぎやならちははからおこづかい

お若いと言われ不思議と若返る

大宇宙で君と暮らしている不思議

蝉しぐれ夏の終りをわきまえる

母さんに抱かれて軽くなる痛み

不思議だと気付く心が子を伸ばす

よく持ったものだと笑う金婚日

不思議なほど悲しい勘がよく当る

神風を信じた過去の不思議な日

反対が無いまま終わる会議室

佳

欲望をみんな満たしてから砂漠

マスコミの傲慢叩くものがない

うやむやにすれば不思議のまま終る

格差とや春開くもなくストもなし

腹立ちが治まる不思議般若経

人

子が泣けばすぐにおっぱい張る不思議

地

クエスチョンマークの好きな子の瞳

天

足して二で割れば不思議と丸くなる

軸

突き詰めて不思議の渦へ迷い込む

権悟

藤朗

典子

遠野

加お里

ばっは

北朗

富子

幸雀

俶子

庸佑

哲男

扶美代

ゆきの

裕之

霜石

（安）泰子

正和

シマ子

美千代

柳弘

強一

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

柳弘

初歩教室

題一 自分

三宅保州

ワンポイント・アドバイス

「自分」という題で一番多かった同想は「自分史」です。同想句が即悪いと言うことでもないですが、同想句を佳句とするには余程卓越した着想と表現等が要求されます。

原 自分史に嘘は書けない書いてない 秋 星

川柳というより標語的ですから、川柳風に。

添 自分史に嘘は書けぬと嘘を書き

原 自分史に花を咲かせる老後です ヒロ

添 自分史に花を咲かせたい老後

次の三句は誰もが思いつく発想すぎます。

自分史を書いてみようか思うまま 光 子

ミス多く書いて自分史後世へ

自分史の過去は楽しいことばかり 忠 子

次の七句は、傍線の部分に発想と表現の工夫が見られます。

自分史の穴ばこ埋めて老いて往く

自分史は日陰の部分書いてない

自分史は一行で足り以下余白

照 美

章 司

宇 乃 子

自分史を大にブツブツしゃべってる みち代

自分史は三枚だけでホツチキス 勇 治

自分史を書いて自分がよく分かり り こ

自分史を踏んばる太い足二本 道 子

自分史へお世辞も少し入れておく 房 江

○「自分」という題でのお手本としていたきたたい句を掲出します。

逆上りが自分を好きになれるまで 田代時子

時どきは自分を谷につきおとす 小西幹芹

誰よりも好きで嫌いなのが自分 奥田みつ子

自らに同情をして釣りに出た 橘高薫風

自分すら救えぬ人の立候補 麻生路郎

【添削・批評句】

原 本当は好きで嫌いなのが自分（名を秘す）

佳句ですが前掲の奥田みつ子氏の句と類似していますので残念です。

次の二句は簡単に中七に直せます。

原 この年でまだ自分が好きじゃない

添 この歳になっても好きでない自分 孝 子

原 腹が立つ自分の欠点言われると

添 腹が立つ自分の短所言われると 綾 乃

諫言、訓辞調を少し和らげてみませんか。

原 自分から進んで盡す人の為 稔

添 人のため自分を尽くす気であるが

原 自分の声聴いてうれしや孫と似る 實

嬉しいとまで詠まず余韻で分かるように。

添 自分の声テープで聴くと孫の声

原 自分には甘く他人には辛い夫 みさと

ルビは地名、人名等に限って下さい。

添 他人には辛く自分に甘くなる

原 空元氣老いの無力を置き忘れ 燭 節 子

添 他人には辛く自分に甘くなる

原 空元氣老いの無力を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 空元氣老いの自分を置き忘れ

添 空元氣老いの自分を置き忘れ

原 負け戦おのれのせいじゃ無いと言ひ

クックバラ

添 負け戦自分のせいじゃ無いと逃げ

原 坂道直ぐに転がる自分です

清

添 坂道を転がることも自分流

原 今日又勝手読みして甚に勝てず (四)賢治

添 今日もまた自分を出して甚に負ける

原 自分こそ人畜無害善い男 紀男

添 人畜無害これぞ自分のコマーシャル

原 自分中心地球は巡る陽は昇る としお

添 自分中心に回つてない地球

原 中心に自分を据える世界観 次根

添 中心に自分を据えて見誤る

原 起きて直ぐ鏡の私見て安堵 美紗子

添 起きて鏡見ると自分が居る安堵

原 散歩中自分の家と見比べて 藤 朗

添 自分の家とあれこれ比べてる散歩

【少し工夫すると佳くなる句】

原 曝け出す一句に生きている自分 幸

添 この一句に自分の思い曝け出す 徑子

原 子の反旗自分も覚えある昔

添 自分にも覚えある子の反抗期 瑛子

原 節目ごと自分のうしろに母が居た

添 自分史の節目節目に母が居る 信子

原 あなたの嘘自分の嘘で中和する

添 自分の嘘であなたの嘘を中和する

原 自分を知る難しい事だと思ふ イセ

添 自分を知ることが一番難しい

原 自分流恰好いいが得手勝手 直

添 自分流言い直したら得手勝手

原 時々は石になったりしています 玲子

添 時々石になったりする自分

原 今がチャンス自分らしさを出してみる 義章

添 チャンス到来自分らしさを出してみる

原 自分ではできないけれど子にやらせ かずお

添 自分ではできないことを子にやらせ

原 人事と云えぬ症状物忘れ (吉)節子

添 人ことと言えぬ症状物忘れ

原 自分らしく生きてどんどん差がひろく 乃りこ

添 自分らしく生きて追い越されてもよい

原 家族から自分の心見透かされ (河)洋子

添 家族には自分の心見透かされ

原 保育器でこぶし握つて自分主張 健柳

添 保育器でこぶし握つて自己主張

原 無一文残る財産自分だけ 隆彦

添 無一文だけ自分という宝

【佳句】

おしゃべりの自分も今日は出番なし 貞月

自分から買つて出た役おヨネさん キヨミ

自分とは長いつき合い死ぬるまで 周子

自分史の筆ゆつくりと握り替え 智加恵

自画像は下手な絵筆のいいなりに 麗

ライバルが自分に聞いてきた短所 柳歩

二番目の席が自分によく似合う 起世子

自己中の虫が時々騒ぎ出す 幹子

最後には自分の子だと諦める 亜希子

けつまづく度に自分がためされる 千代子

本当の自分を出せぬもどかしさ (高)洋子

どうしても自分の殻を開けられぬ 孔一

【今月の推せん句】

自分だけいい子になつて蚊帳の外 岡本 昇

生き方や人との付き合い方の難しさが「蚊

帳の外」の比喩によく表されています。

ふる里のあちらこちらにある自分 松尾美智代

実家にも山川草木にも秘密の基地にも友達

にもなつかしい自分が一杯。「あちらこち

らにある自分」が利いています。

仏壇に自分の写真置いてみる 荻野像山

この着想が秀逸だと思ひます。その自分の

写真をしつと眺められてる作者が彷彿し

て、ペーソスとアイロニーに胸打たれます。

【私の句】

何よりも始末に覚えぬのは自分

軌道から外れ自分を取り戻す

(登載されたの方は役員が添削して返送します。)

【注】来月号で「年間賞」を発表の予定です。

秀句鑑賞

同人吟 穴吹尚士

— 10月号号 —

人様の川柳を鑑賞し、秀句を選ぶという、非常におこがましい作業をすることになりました。しかし、何を基準にして人様の川柳を秀句とするか、それほどのものを持ち合わせられていません。そこで、自身が句づくりの際にいつも心している、次のような条々を思い出しながら、一七四四句を何度も読み返し読み返し致しました。

① 反骨の血を持て余す、人間の生き様の

ようなものを好んで句にしています。

② 人の世に押し流されるにんげんの弱さが身に沁みます。

③ 夫婦をはじめ、人と人とのつながりをしばしば詠んでいます。

結局、このような傾向の句を選びました。異なった作風の方には誠に申し訳ありません。

《人間の生き様》

斬られ役だけでつかい夢がある

倉益一瑤

振り出しは同時でも、昇進には差が付きます。中には口先一つで世を渡る輩も居て、真つ当に働いていても、花道どころか舞台の隅

での斬られ役ばかりという事もあります。でも秘かに夢を温めて、いつかは俺もと志を忘れていない人に声援を贈ります。

リサイクル効かぬ頑固を持て余す

古久保和子

雀百まで踊り忘れずで、生まれ付いての頑固は、老いてますます強靱になってきます。

自分でも持て余すくらいですから、周りの迷惑は計り知れません。しかし自身で承知しておられますから、まだ救いがあります。

媚売れず世間を狭く生きている

北村賢子

揉み手をして世辞たらたらで、それが人間社会での潤滑油だと勘違いしている方が居られます。誠実に働きその成果を評価されて、それで良しとしましょう。媚を売っている姿は本人には見えませんが、醜いものです。

負け組も氣勢を上げる街の隅

西岡洛酔

料亭もクラブも知らないけれど、縄のれんや屋台で、国を憂い政治を語る大勢の人がいます。たとえ負け組と呼ばれても、この人た

ちが居なくて、この日本の国が成立しますか。負け組こそこの国の縁の下の方持ちなのです。横車押しても無駄と悟らせる

喜田准一

時流に乗った人が、その權威を振りかざして、決して社会や組織全体の益にはならない無法を言います。庶民は団結して、無法は許さない、横車は許さないと声を上げましょう。もうすぐ衆院選です。

人生の裏目裏目にじっと耐え

吉村一風

自身では裏目に出たなと思っても、時間の経過と共にそれが正解だったという事がよくあります。ひと時の冷や飯を裏目と思い詰めず、じっと耐えてこそ花が咲きます。ゴールを目指して、裏目裏目に耐え抜きましょう。

《人間の弱さ》

絶頂にある屋根だから人が寄る

政岡日枝子

一年前の安倍さんは絶頂に居ました。おこぼれを求めて、周りで人が渦をまきました。そして今、潮の引くように人は去って行きました。でもその人たちは責められませんでした。夫々が生きるのに精一杯なのです。この自覚があれば足を拘われることはないでしょう。人並みという物差しがよく狂う

岸本宏章

貧しい暮らしでも、妻や子のためにせめて人並みのことはしてやりたいと、いつも心の底では思っています。でも何処までが中流か、何故人並みか、政治が変わるとすぐに怪しくなります。それでも精一杯に働いて、これで許しておくれと、心の中で詫言っています。

方言を聞いて交渉動き出す

小川 注湖

難しい商談で、交渉決裂の寸前に、先方の言葉のかすかな訛りにふと気がきました。

よく聞いてみると、同郷の後輩が苦労しています。もう一度交渉のテーブルに着くことになりました。ひよつとすれば、お役所との方言でのくだけた交渉事でしょうか。

橋められた枝の話も聞いてやる

伊藤 藤寿美

盆栽の枝は切れ針金で挽められ、人間の好みに合わせられます。組織で働く、心ならずも方針に従うことを求められ、自身の存在に疑問を抱くことが往々にしてあります。そんな夜に、一杯呑みながらその気持ちを聞いてくれる上司が居ると、ほっとします。

サイコロのどの目が出ても運の尽き

大橋 政良

もう人生を投げ出したいと思う時があります。何をしてでも挽回不能だと思えてしまします。ところがどっこい、まずあり得ないゾロ

目が出て、一発逆転が起ることもあるのです。諦めないでもう一度挑戦しましょう。

退職の日も一列に並ばされ

三宅 保州

黙々と下積み耐えて長年働いてきました。ついに退職の日を迎え、同輩と一緒に社長にご挨拶をするのですが、一列に並んで社長を待ちます。働き蟻は、最後の日も指示通り一列に並ぶことを求められます。でも懸命に働き通した矜持はひそかに抱えています。

《人とのつながり》

老妻は逆らわずでも従わず

志田 千代

言葉では逆らわずとも、表情を見ていれば全てが判ります。結局こちらが従うことになってしまいます。関白宣言はしたのですが、今になってみると、長いあいだ関白をさせて貰っていたのだと、理解しています。

厭な人わたしもきつといやな人

石堂 潤子

厭な人と思うと、相手に必ず伝わるそうです。人それぞれに欠点がありますが、それにどう目を瞑って美点を見ても、人間の品格が問われる問題です。でも、わたしもいやな人との反省があれば、必ず気持ちは通じます。

狭まって来た二人の車間距離

石原 淑子

前句と似たニュアンスでしょうか。若くて元気な頃は夫婦喧嘩が絶えず、離婚を口にすることも一再ならず。しかし老いの入り口に立つてみると、やはりこの人しか私にはいないと、お互いに思い始めてくるようです。

衰えた分だけ妻に寄りかかると

菊地 政勝

病氣をして気が弱って、さてと周りを見回すと、ずつとえらそうに言ってきた妻しか居ないことに気がきました。子供は遠くで暮しているし、二人で支え合っしかなく、そつと寄りかかると、妻も肩を寄せてきてくれました。(となれば、良いのですが……)

簡単に許すと後々にひびく

西口 いわゑ

心ではもうとつと許しているのですが、甘い顔をする癖になる。そこで難しい顔を作って、ひとくさり説教を垂れます。説教をされる方は、その辺りをすで見抜いていて、さりげなく叱られる顔を作ります。

謝って人間らしい顔になる

安藤 寿美子

仲違いは自身のせいと承知していながら、意地を張って時間はかりが過ぎていきます。思い切つて謝ると、心も顔も清々しいこと。しかしながら、テレビで見る謝罪の顔は、あれは人間らしいとは言えないと思います。

水煙抄

秀句鑑賞

10月号から

黒田能子

格差などない日盛りの冷奴

上嶋幸雀

夏の暑い盛りは、手軽で誰も好きな冷奴が、何よりのご馳走です。格差と豆腐の取り合わせが面白いです。

心には小さくていい丸い窓

藤本直

小さくてもいい、温かくて丸いこころを持つていれば、穏やかに暮せるでしょう。

人に世話かけずにそっと逝くつもり

岡本勲

誰しもそうありたいと願うところです。私もそのようにと思うのですが、医学の進歩で生かされ世話を掛けるかも分りません。

菊一輪わたしの部屋になりました

谷川勇治

殺風景な部屋に、一輪差しの菊で、ホッとする落着ける部屋になりました。

柏手が弱くて神に届かない

藤永実千代

神主のようにバンバンと気持よく打てた方が、願いがかなえられそうな気がします。私にはあまりいい音がしないのです。

氷山の一角だけに陽が当たり

中井萌

いい事も悪いことも、いっぱいあるはずなのに、いつも取り上げて話題になるのは、ほんの一部分にすぎません。

紙一枚あれば平和の鶴を折る

赤木妙子

一枚だけの紙でも、平和を祈りながら鶴を折っている。いつまでも戦争のない、平和な世であるようにとつくづく思います。

サービスのつもり冷房強すぎる

岡野すみれ

クールビズと言われていた割には、電車もデパートも冷房がききすぎて、寒いくらいです。サービスなのでしょうね。

生き甲斐を持つているから忙しい

山本加お里

やり甲斐のあることを持つて生きているって素晴らしいですね。一生懸命になりすぎ、頑張ってしまうがちです。だからとても忙しくなってくるのでしょうか。

宿題ができないままの熱帯夜

小林わこ

今年の夏の暑さは特別でした。する事を子も親も残したままで寝てしまっ。そんな夜も暑くて寝るのしいのです。

気づかないことが幸せかもしれぬ

寺井柳童

知らぬが仏ということもあります。知ったばかりにほっとけず、しんどい思いをしてしまっ。気づかない方が良かったと、つくづく思ってしまうのです。

赤ちゃんが寝ている泳ぐ形して

神野千恵子

バンザイをしたり、うつ伏せで寝たり、赤ちゃんの愛らしい姿が浮かんできます。元気にすくすく育つよう祈っています。

感動が薄れて来たら見る写真

尾畑なを江

感動したことも、日がたつと薄れてきます。でもその折に写した写真を時折出して眺めると、感動がまたよみがえってきます。

片付けたつもりが場所を変えただけ

根田よしこ

そっだそっだとい領いてしまいました。長い時間かけて、結局何も捨てずに、置き場所を変えただけでした。

■句集鑑賞

『雪ぼとけ』

今 愁女 著

波多野 五楽庵

川柳塔みちのくでは会員の百句集を出してから二十冊目になる。初心の時は初心の句を、そして情念の中で成長を続けた句はしずくとなつて美しく綾を描く。その時こそ句集を残しておくべきだ。それが会員百句集を考えた根拠であつた。二十冊目。くしくも愁女さんがそのめぐり合わせになられた当会の俊英のその繊細なる詩性を鑑賞して下さい。

人の字に生きてきました夫婦道
蠅螂がいくさの貌で枯れてゆく
洗つても乾かぬ未練抱く乳房
この指に止まつて呉れぬ反抗期
雑な事みんな忘れて花浄土

作者の愁女さんは一九九二年私のカルチャ―受講生として熱心に川柳を吸収していった。初めは戸惑う事も多かったであろう。五七五の中に自分を閉じこめる辛い作業だったに違いない。実名の生恵子さんから愁女と変えた時から愁女川柳の昇華がはじまる。

忌明けからおんなは過去を振り向かぬ
なにこともなかったような秋の月
病んでから知った空気の有難さ
古寺めぐりはなんなり京の味でしめ
女人高野寺安地蔵に吾子を見る

愁女さんは本社句会に出席し、沢山の作家と友人になられた。その交流がすべて宝になり技巧になつて行く。サラリと流れた韻律には抒情と情念の移りを感じさせるようになる。

秋の野に吾もくれない吾亦紅
醉芙蓉酔ってひとりの夜が哭く

川柳塔社各地柳壇賞の

満ち足りた生涯でした木の葉舞う

川柳塔みちのく大賞受賞作品

ひぐらしの鳴いてこの世の哀れとも

そして百句集の題名になつた

行きつくは母のかたちの雪ぼとけ

定金冬二氏は、いい句に出会つた時は「身体が熱くなるように感じるものだ」と言つたがこの感動の伝達こそ川柳の源流であろう。

長い冬に閉じ込められている人間は雪の哀しさをいやと言ふほど背負つて生きている。

渺たる地に育ち、その環境を甘受せざるを得ない北の人はその辛さを胸の奥から吐き出している。百句の中にその哀も見える。

白い魔と格闘しては北に棲む

嫁いびり雪の津軽は茫茫と

この哀しみは住むのではなく棲まされるの

である。獣のように雪に閉じ込められて耐えねばならない生活。たつた十数米歩くのにわだちの中を這いつくばつて歩かねばならない豪雪の中に棲んでいるのだ。

十七文字の中の言葉の表現は人間を獣に変化させてしまう場所。

後の句で愁女さんは嫁いびりと雪の哀しさを讀んだ。雪の持つ寂寥感とは違う言葉の効果。

詩情豊かな言葉が春の比喩だとすれば、この心を超える雪の吐息は孤独の漂白と言え。津軽半島の付け根に太宰の住んだ金木と、木造と呼ぶ部落がある。その地吹雪の茫茫たる部落に「孫三郎節」と言う嫁いびりの唄が残っている。今の時代にこの唄のような嫁いびりが残つてとは思われないが、四番の

夜草朝草欠かねども

髪サ油コも付けさへね

同じく六番の歌詞に

無理な親衆に使われ

とおの指コから（十本の指から）

血コ流す

とある。指から血がしたたる程働らかされた貧しい津軽の農村の嫁の苦労は辛酸なものだったに違いない。愁女さんはその世界を茫茫と表現した。百句の中の幾つかの悲哀。川柳だからこそ表現できたのであろう。

選おそろし

(選句にまつわる諸状況序説)

早川清生

文芸春秋に塩野七生さんの「夏の夜のおしやべり」というエッセーがあった。選は短詩型の宿命であるが、川柳人のすべてがそれに ついていろいろな思いをもっている。このエッセーはそのような思いに對し、何らかの示唆を与えようと思うので、ほんの要旨だけだが紹介させて頂きたい。

先般のカンヌ映画祭で河瀬直美監督の作品が審査員特別賞を受賞した。塩野さんは、だからあの作品はどこへ出しても評価されるかという決断でそうではなく、あれはカンヌ好みだという。ペルリンやヴェネツィアの映画祭もそれぞれに特色があり、良質の作品だからどこでも評価されるとはいえない。映画でも文学でも、作品の質とは別にどこにどう「参戦」させるかが重要な課題となる。外国で認められたいなら、その地に応じた「傾向と対策」ぐらいは練るべきだとされる。

私など今なお古風な作品至上主義に固執し、選者の權威を認める一方で、この句がわからないのは選者がおかしいのだと、ハチのムサシさながらに無謀な突撃をくり返して、いつも没句の山を築く。そんなときNHK「ルソンの壺」の放映で、「執念の経営」と題して「いいものを作っていれば売れる」というと大違い」という著名な経営者の言葉が聞こえた。時が時だけに衝撃的だった。

選ばせるということに、かくシビアなのが現実の世界なのである。川柳人が作品の提出に際してこれほどの真剣味をもつか疑問だが、両者に差異があるとすれば、その原因はまず前者が仕事の場のことであり、他方が趣味の領域であるということだろう。加えて川柳人には文芸の潔癖性に対する強い思い入れがあり「あてこみ」ということについても両者に相反する認識がある。また前者は能動的であるが、後者は受動的である。受動的という中に、私は川柳人の伝統に対する崇拜という畏怖のようなものを感じる。

はじめに選ありきで、短詩型はそれぞれ選という方式の中で発展してきた。最古の歌集とされる万葉集は、全二十巻の中で編集方針に大きな変化をみせながらも、大伴家持を編者とする説が有力である。俳句は連歌に発し

て、宗鑑の「犬筑波集」が最初の俳諧集となり、貞門派、談林派を経て、次々と現われる指導者により今日の繁栄が築かれた。わが川柳はその名称が前句付の点者であつた柄井川柳に由来し、彼の選した川柳点が原流であるなど、選とは切れないご縁をもつ。

ところがこの選というのがたいへんである。カラオケの採点器のように、作品を総合的に評価する機械があれば別だが、事実上句の価値は選者の判断に任される。たとえば朝日新聞の歌壇俳壇を見ても、ともに四人の選者による共選で、複数の選者に選ばれた作品には星印がつくが、それがまたきわめて少ないのである。ある選者が絶賛した作品が、他の選者たちからは紙上一顧も与えられない。われわれ一般作句家は、選というシステムを経なければ自分の句が認知されない。共選という救済策もあるが、選という宿命の中で失われた名句も数多いと思う。

現代は人の考え方も多岐、政治、経済、科学の進展はめまぐるしいままで、それらを洞察理解しかつ詩的センスの豊かな選者というのはきわめて貴重である。すぐれた選者こそが次の時代を受け持つ作家を見出し、川柳の発展につなげることができる。ここで紙数が尽きた。ぜひ再論の機を得させてほしい。

第26回 鳥取県没句川柳供養大会

作者の分身の没句を迷わず成仏させて
やりましょう (数珠を持参のこと)

施主挨拶 一両川洋々 祝 辞 一鈴木公弘
弔 辞 一置和紙の里川柳会
読 経 一藤木大善
焼 香 一各川柳会会長・参加者全員
と き 12月9日(日) 9時受付・開場
ところ 全労済ビル(JR鳥取駅南、徒歩1分)
(TEL 22-8234)

参加費 精進落しの宴 4,500円(昼食・懇親宴・句誌)
川柳大会のみ参加 2,500円(昼食・句誌)

兼題と選者「敗者復活吟」(この1年間の没句)

西出楓楽・「裏技」二熊陸平・「そして冬」

水永ミツコ・「自分史」吉田陽子・「命日」

横田春名・「勝ち組」棚田 大・「東(たば)」

北村 稔・「サイコロ」山松みち子

席 題 なし 各題2句 締め切り 11時

表 彰 総合10位 (出席者優先1句1点)

欠席投句 1,000円(切手可作品集呈)12月5日締切

投句先 〒680-0824 鳥取市行徳2-632

田中かをる 宛

第49回 豊中市民川柳大会

と き 平成19年11月23日(祝) 正午開場
ところ 豊中市立中央公民館 1Fホール
(阪急宝塚線曾根駅東100m)

会 費 1,500円(軽食、記念品、発表誌進呈)
挨拶 豊中川柳会 会長 石川 勝
祝 辞 豊中市立中央公民館長 石田 岩夫氏
落 語 一 席
宿 題

「夢」堺番傘川柳会 日野 愿 選

「センス」川柳瓦版の会 辻 葉 選

「気分」番傘みどり川柳会 上野多恵子 選

「いかにも」くらわんか番傘川柳会 安井 英華 選

「行方」川柳天守閣 筒井 祥文 選

「渴求」豊中川柳会 辻 翠子 選

「さざやき」川柳塔社 鶴田 遠野 選

(各題 2句) (順不同)

締切り 午後1時

豊中市長賞ほか 各題に賞進呈

主 催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館

連絡先 〒560-0015 豊中市赤坂1丁目6-9

石川 勝 電話・FAX 06(6854)1990

又は06(6303)7297 本田智彦

第17回 播磨文芸祭川柳大会

事前応募の部

応募資格 資格は問いません。重複応募不可

ジュニアの部 いじめ(岡山) 山本 美枝 選

一般の部 平 和(京都) 山田ゆみ葉 選

描 く(三木) 梶原サナエ 選

雑 草(神戸) 前川千津子 選

応募料 1,000円(定額小為替)ジュニアの部無料

応募要領 原稿用紙または便箋に各題2句。

郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記

締 切 12月10日(消印有効)

送付先 670-0021 姫路市山野井町84

姫路文学館 川柳大会事前応募係り

発表誌 川柳大会終了後に応募者全員に送付します。

賞・表彰 各題秀句(3句)の作者に楯、賞状

佳作(5句)の作者に賞品を謹呈

川柳大会 20年2月24日(日)詳細後日掲載

選 者 西出楓楽理事長 他

第19回 兵庫のまつり

ふれあいの祭典「川柳祭」開催要項

日 時 12月2日(日) 10時30分～16時30分

会 場 三田市総合文化センター (JR三田駅下車)

「郷の音ホール」TEL 079-559-8100

(三田市天神1-3-1)

内 容 アトラクション

事前投句入選発表と講評

当日投句入選発表

当日投句(各題2句 欠席投句拝辞 11時30分締切)

「ビール」 村上 氷筆 選

「化石」 堀 正和 選

「雷」 浅雛美智子 選

「雉(きじ)」 平山 繁夫 選

「里山」 赤井 花城 選

出句料 1000円

賞 文部科学大臣賞ほか多数

主 催 ふれあいの祭典実行委員会

兵庫県・兵庫県教育委員会ほか



瀧本きよしさん、さようなら

峯村 勲 弘

「お別れ」は突然やってきた。去る九月七日早朝、高槻川柳サークル「卯の花」のきよし会長が亡くなりましたとの電話を受けた。ご回復を信じて毎日病院通いをされていた奥様の胸中をお察し申し上げ、運命の過酷さを目の当たりにして、涙を禁じ得なかった。

平成十八年の六月、喉に違和感があり検査入院、喉頭癌が発見され直ちに治療を開始、経緯は良好で今年の六月の「卯の花」では選者も引き受けられた。その後声が出にくいとのことで再度入院、癌退治に専念されたが経過は思わしくなく、加えて誤嚥性肺炎のため、七月からは経管栄養に切り替えられた。

八月二十九日には手術、退院も間近と期待していたが急変により、周囲に惜しまれつつ旅立たれた。

瀧本さんのお父上は小学校の先生として豪雨による水害時にご自分の命を顧みず村人を

救い殉職されたとのこと、その父上を追い教養者として四十年を過ごし、大阪の教育界に大きな足跡を残された。「嘘をつかない」「人の悪口を言わない」を学級経営の基本とされたとのこと、現在の教育でも不足している「教養」であろう。

定年後は更なる人の輪と趣味の拡大を目指し、カラオケ文化協会や各地の川柳会に参加し活躍された。高槻ケーブルテレビでは瀧本流水の雅号で「たちちゃん」の川柳道場」を担当、川柳の普及に努められた。また「みずき」や「あやめ」など地元の公民館での川柳教室でも川柳の発展に力を注がれた。

平成十五年に「卯の花」に入会され、会計役を担当された。平成十六年には推挙されて「川柳塔」の同人となり、平成十七年一月からは本社句会にも出席されるようになった。当初は

全没がいつまで続く本社句会と嘆いておられたが、ついにその年の五月河内天笑主幹に

良心はあつても救助行かなんだ

を抜いて頂いたと大喜び、その後は順調に入選を重ね、その年のことを、「川柳を一年かけて味わった」と述懐されていた。

その後ご病気で退任された川島謙二、云児さんの後を継ぎ「卯の花」の会長に就任された。職務に対する責任感は一層強く題の設定や、選者の依頼、来客への心遣い、世話役への労いなどなど、その情熱と気配りには頭が下がった。入院中もベッドの上で句作に励まれ、各地の句会への投句を亡くなる数日前まで続けられた。

計が伝えられた九月七日の本社句会では、四句の入選を果たされ、最後まで作句への執念を持ち続けておられたようである。

本社句会（九月）入選句

わくわくと駆け出している酔芙蓉

裏切りのショック真つ赤な保証印

暗いニュース避けてお笑いばかり観る

任せてね奥から妻の声がする

川柳を愛し、ご家族を愛し、友を愛し、それ以上に周囲からも愛された瀧本きよしさんのご冥福を心からお祈りいたします。合掌

平成20年版『全日本柳人写真名鑑』発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を社団法人設立以来、五年ごとに発刊、好評を博してきました。

前回から五年目にあたり、川柳人口も飛躍的に増加している折から、さらに一段と内容を充実し、少なくとも三千人以上を収録する『全日本柳人写真名鑑』平成二十年版を発行したいと存じます。刊行にあたっては、出版委員会を中心として全日本川柳協会が組織をあげて取り組みますが、要は一人でも多くの柳人がこの企画にご参加くださることにあります。

資格は柳人であればどなたでも結構ですので、みなさま方には一人でも多くの柳友をお誘い合わせのうえ、この画期的な名鑑に名をつらね、貴名とその作品を日本川柳史に残されるよう、お勧め申し上げる次第です。

社団法人 全日本川柳協会

会長 今川 乱魚
理事長 塩見 草映

一、書名

『全日本柳人写真名鑑』平成20年版
A5判・約500ページ

二、体裁

本文アート紙・美装本

三、刊行

平成20年3月(予定)全参加者に年鑑を一冊、送付いたします。

四、原稿

- ①姓・柳号 ②本名 ③生年月日
- ④職業 ⑤所属柳社 ⑥住所
- ⑦電話・FAX ⑧メールアドレス
- ⑨自選作品3句(平成15年以降の作品)
- ⑩顔写真(縦横約3cmの近影、写真の裏に氏名を記入)

五、締切

平成19年11月30日(金)当日消印有効

六、書籍発送の為、住所は必ずご記入の上、個人情報に支障のある方は、備考にその旨お書き下さい。

七、参加費

4000円(振替または小為替で申込時に納入してください)

八、申込先

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

郵便振替口座 009970-9-3575
TEL (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

わが世の増

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おとし

福田

登美報

万札がないか毎朝ポスト見る

金なくとも死ぬほどのことでない

お金なくとも死ぬほどのことでない

辞書にない知恵が実ってこはれるか

猛暑でも実る稲穂はツウンと伸び

名人の梨も実って弾む里

ずたずたの絆を母は縫いなおす

戦争でずたずた国はかわいそう

ずたずたを復旧させるにぎり飯

星空の神秘に釣られナゾを解く

星空のひとつ逢いたい人がいる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

千の風の魅力のとりこになった人

生きている宇宙の魅力限りなく

たっぷり甘えて帰る初泊り

引算があれば足算もある魅力

由多香

ヒロ子

真一

道子

風花

雄々

小生

以和万津

艶子

登美

聖子

はるみ

恵美子

好栄

ブルドッグほんに明るい鼻の穴
豊作を願ひ青田を渡る風
新しい浴衣ではずむ夏まつり
私の辞書に魅力が見付からぬ
たっぷり食べた証しの処方箋

和歌山三幸川柳会

玉置

当代報

許さねばわたしの過去が辛くなる

ファスナーをしかと女のへらざり口

心まで暗くはないよ白い杖

ヒマワリの群れに潜んでいた刺客

神様に偶然という策がある

口車にびつたり乗れるサイズです

したたかに生きて笑顔が出来上がる

安いから百貨へ行き買いすぎる

百までは辞書を片手にまだ翔ぶ気

迷ひ百僕の中にもある迷路

百回から出直しますという気概

百貨店と言われるほどの病気持ち

一〇〇%幸せなんて痒すぎる

百に一つの狂いはないぞ山の神

百万の敵より強いペンの先

百代の過客わたしを置き去りに

百年の家にはびこる一大事

事故現場花束の山折ってる

二世帯の親の居場所を決める嫁

置き場所を変えて立派に見える壺

かつ子

ちよえ

伸子

博利

清泉

当代

幹子

朱夏

保州

孝子

准一

信子

徑子

宏夫

桂香

義雄

章子

幸

武

次根

公

一歩

瑛子

美枝子

場違いへひっそり咲いた風媒花
哲學の道それらしく通り抜け
生き場所がそこにもあった崖の花
イギリスの本場仕込みのアクセント
愚かさの中に安らぐ場所がある
正座する場所なら欠にする葉書
特等席で夕陽をあおぐ旅の膳
原点に笑える場所がきつとある
ぎりぎり生きる深夜のネットカフェ
父母のどちら欠けても寒い場所

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

厨房の休む間もない盆の客

忘却をたぐり寄せてる風の駅

横になる事も覚えた腹の虫

呑み込んだ言葉が喉に引っ掛かる

名所とは悲し原爆資料館(広島)

宅急便開ければ母の香りする

試されて初めて知った胸の内

床几には誰を待つのか将棋盤

きれいな事言ってるうちは未だ平和

芸のない夫宴席で聞き上手

色いと思案の揚句受話器とる

東大阪市川柳同好会

森下

半世紀越えた友情あたたかい

川柳の友情男女越えた仲

純子

昇

イセ

かずみ

菜摘

起世子

みね

登美代

町子

和子

放任

八重子

ひかり

賢

あきら

いさむ

よしみ

弘

はつ恵

貞月

寿々女

愛論報

美弥子

克己

自慢話すると友情崩れだす

耐えて咲く椿の赤に足を止め

甲子園辛い練習耐えた顔

陣痛に耐えて母なる朝ばらけ

権利書を握る苦勞が実を結ぶ

権利だけ主張している遺産分け

愚妻にも自己主張する権利あり

懐剣を逆手に白い白い腕

逆風を受けて人間らしくなる

逆もあるアンモナイトは渦になる

定年で夫婦逆転して平和

逆縁の絆へうるむあかね雲

糸車母の鳴咽で逆回り

川柳塔のぞみ

播本

充子報

年金は半分ずつと軽く言う

うっかりと口が滑った軽い罪

カード一枚入れて身軽な旅かばん

名画館昭和の小津をなつかしむ

趣味の欄鑑賞ばかり書き連らね

美術館孫につられて梯子する

絵だけ見にフランスへ行く気が知れぬ

お宝は持たぬが見る目ぐらいある

天女など鑑賞させて骨を抜く

正坊さんの鑑賞文が見えぬ

鑑賞に堪える男の減った街

べらべらとあれは受け売りだと思ふ

和子

美子

秀夫

柳弘

朝子

賢子

シマ子

湖風

三重子

雅文

敏子

あや子

愛論

まくし立てサインをさせる契約書

電話口ただ聞き役になつて

セメダイン食わせないほどよく喋る

古い森と空と溪とでエコ談義

ゲルニカに平和を目指す意志新た

アメノウズメに志功がタツするなんて

鑑賞へ作者とこころ響き合う

古傷をべらべら風が来て捲り

ばあちゃんのリークに我が家大波乱

煩惱を捨て切れなくて居る樹海

存在感示す頑固を笑えない

抱えてるストレス酒で消せるなら

ひまわりに身を振らせる長日照り

格下の相手に負けた腕相撲

真つ当に生きて背骨に芯がある

肩書きに群がついているうすつぺら

松露川柳会

小西

雄々報

熱戦に高校野球夢をくれ

炎天下勝利をめざす甲子園

野球人生あこがれの的大リーグ

青春の思い出燃えた甲子園

観衆のどよめき満塁ホームラン

生活を支えてくれた裁ち鉢

百均で鉄いろいろ取り揃え

良く切れる鉄すつきり美容院

鉄もつ技術に一家支えられ

勝

賀世子

由一

義子

宣子

順風

朝子

権悟

恭昌

昭

千里

清

明夫

てるみ

充子

裕

信子

美草

公美枝

信雄

智恵子

弘子

久子

静江

佳句地十選 (10月号から)

時 広 一 路

指切りげんまんビッグサイズの陽が沈む

切れぎれの想い出つなく故郷の道

我が身内メダカばかりで仲が良い

天の川渡る自転車磨いてる

鏡見たびに足し算繰り返す

童謡のリズムで雨の音を聞く

資格など持っていないがプロの主婦

何もかも含んで静かなる炎

頭の中で自由に心遊ばせる

サンダルの軽さ本音で生きている

力んでも切れない鉄には困る

トラキチが六甲おろし気炎上げ

プロ野球億の単位で稼ぐ金

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

リストラの首口ボットがひき受ける

ばくもあなたも見たことのない風だ

言い訳はよそうモラルが問われてる

使用前のモデルになつてと頼まれる

二人して幸せ一枚出す届

終着駅ほどよい風がほほ撫でる

涙もなく涙溢れてくる軍歌

宝くじ一枚当り争いが

和子

賢

春名

淑子

郁郎

ますみ

美智代

森子

比る志

希久子

鈴枝

和代

雄々

民

知佐子

美代子

莊司

子猫来て何やかやよう動く妻
 訳あつて出会つた人と半世紀
 我が母校再放送で勝つて呉れ
 どんな風吹いたか妻が上機嫌
 返品に顔をしかめるコウノトリ
 サーフアーの板一枚が海を呼ぶ
 世代の差年金談義かみあわぬ
 家計簿のバランス崩す税負担
 九条へ平和を守るモデル国
 純真に白鳥の王子まつている
 ポケットに溜めた優しさ軋みだす
 ロボットに介護託している未来
 試着室モデルのようにとるポーズ
 夏休み財布早秋の風
 生き甲斐を見つけ仕事に粘り出る
 ロボットがケイタイ持つて泳いでる
 笑い種寄席で貰つていま双葉
 直球に心が痛いしめかめ面
 心地好い寝覚め邪魔する蟬の声
 短冊に一枚では足りぬ願い事
 不用意に使つた言葉で火の海に
 水飲める平和ししみ噛みしめる

竹原川柳会

時広

一路報

博子 俊子 たえこ 正春 浩三 幸枝 晴美 宏 朝子 美はる 欣子 ふりこ 義明 いつふみ 宏至 はじめ 妙子 克美 愛子 孝子 和子 一風

古里の墨画のような朝が好き
 朝霧のごと少年の恋をする
 大切な二人だけの記念品
 記念樹が空へと伸びる子が育つ
 記念樹にも一度書いた夫婦の名
 結婚記念日風は亡夫かも戸をたたく
 かずら橋記念写真がブレている
 結婚記念日夫は覚えていなくとも
 敬老の日だとテレビが言うてます
 記念樹の傾き想う祖父のこと
 アルバムの花嫁二十二のわたし
 航が泣く犬も心配そうに見る
 赤ちゃんもママも新米一年生
 自己満足かも知れぬ筆を置く
 万物の命わき出る里の川
 写真展去年の風が蘇る
 孫からのでんわ俄に声弾む
 顔色も電話の声でわかる妻
 真夜中の電話ドッキリつばを飲む
 糸電話何でも聞いてあげたいな
 最後に出る嫁の電話に安堵する
 通話ゼロそれでも払う電話代

川柳ふうもん吟社

夏目

一粹報

火の辻を曲がると修羅が顔を出す
 もめ事は丸く納めるドロイ癖
 なじよむ仲アットホームの風が吹く

淑子 敬子 房子 比呂子 規代 栄恵 力 笑子 静風 半徳 厚子 千枝 史子 太虚 節夫 幸子 汎美 節生 京子 民恵 慶子 一路

煩惱重ね今日も人間しています
 造反が神にもあつた出来心
 自画自賛うんざり聞いている画廊
 造反は無縁真面目なイエスマン
 なじよむ仲それぞれ葛がからみつく
 夫婦喧嘩子の仲裁で分けている
 うんざりとしても連れ合い大切に
 なじよんだは結婚までの数カ月
 負けるが勝ち一步譲つてドロイする
 泥舟の上で正論ばかり吐いている
 キッチンへ一礼をして今日終わる
 ドロイでは気が治まらず眠れない
 花束の中に造反見え隠れ
 ドロイでもむなしさ残る口喧嘩
 造反をするかも知れぬ子に貢ぐ
 まだ知らぬことがいっぱい死ぬません
 若者はすぐになじよんですぐ別れ
 右まわり左まわりで反り合わぬ
 お相撲のドロイは微妙首ひねる
 帰るなり妻の愚痴にはうんざりだ
 造反をしても父には勝てません
 造反をポコポコ聞いた猜疑心
 造反か夫は病気をくり返す
 国民の造反受けてうらたえる
 雑草にうんざり負けていられない
 造反をするなお前は横綱だ
 うんざりとさせる噂のなれの果て

菊香 諏訪男 美恵子 虎尾 春名 毅 圭一郎 志げ緒 かをる 金祥 節子 一京 一瑤 義徳 孝男 善夫 妻子 あしび 蟹郎 由美子 稔 房江 昌鼓 秀四 葛子 一行 男 一粹

サークル檸檬

吉田あずき報

大小の手に助けられ生きてる
平均の海で浮いたり沈んだり
平均をされて個性が薄くなる
平均は聞かぬ私だけの寿命
中とつて売手買手の値が決まり
人生つて平均台を歩くよう
今日から生きる石鹸匂わせて
平均体重聞かないことにする
平均して妻が取つて主導権
平均台上がつては落ちまた上がる
満足していいのだろうか平均値
右脳左脳平均にする大あくび
平均のあたりで安堵して眠る

川柳塔みちのく

小寺

花菱報

まだ役に立つと信じて生きている
ワインの夜クイーンの席は譲れない
おでんにもつまにもなつて秋大根
ゴールまで少ない時をひた走る
陽のあたる花は色良くきれいです
平等に教えていても差が出てる
屋根飛んで有名人になりあがる
一枚の地図で小さな旅支度
子育てに古着のおむつ活躍す
愛憎の爪痕残し火の女

和香子 きよし
美鈴 一呑
準人 てる
順風 隼人
銀波 ふさ
花匠 匠

子の寝顔いつか役立つ母の夢
少額で義理を果した財布袋
夢売りがだんだん日本から消える
少子化に歯止め掛かるか予算措置
孫の悪戯知つてゐるのは襖
野の花を一輪挿してある銚子
ぼろぼろになつても役に立つ軍手
格差は正裏のこうろぎ啼き止まぬ

川柳塔唐津

仁部

四郎報

爺の霊黄蝶となりてつきまとい
百均で真意のセール永田町
お世辞にも素直に乗つて笑つて
足腰の弱りがばれる守備範囲
スタンドの拍手に球児育てられ
先生と呼びあつてゐる井戸の中
一票の重さ次点が噛みしめる
句敵のボディブローが効いてくる

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

狙い撃ちしたい輪ゴムがみつからぬ
いつからか妻が主役の席にゐる
岬まで行つて地球を確かめる
愛情へ割り引かない地のめぐみ
狙つても女神が笑ふことはいない
狙い撃ちされてだんだん強くなる
狙い撃ちされてもみたい貴女なら

愁女 井蛙 岳水 花峯 慕情 五楽庵 実 四郎 勝視 水笑 晴翠 蜂朗 高明 輝夫 登美代 智三 保州 緑良 夕胡 英子

媚を売り年金狙う周到さ
台風も夜を狙うてやつてくる
ジャンケンボン岬はいつも笑つて
人生をリセツトさせて立つ岬
地球の丸さを実感した岬
遊覧船岬まわると旅おわる
待つか奪うか岬の風に問うてみる
岬にはふところ深い癒し力
岬の灯見えて抱き合う帰る船
半額にされて秋刀魚の目に涙
割引と聞けば女が走りだす
割り引いて元値の服を買わされる
タクシー代足せば割引ゼロになり
半分は割引いて聞くコマーシャル
シートから本音の洩れてくる疲れ
羊水を出てからさがる自由席
柔らかなシートに包む挫折感
上席であぐらをかいてゐる驕り
シートベルトその一瞬を抱く命
シート交換あつちこつちと転がされ
レシートが確かな時を巻き戻す
憧れの席へ気合いが先走り
シルバーシート不要の国が美しい

川柳ささやま

遠山

可住報

逆縁の日から忘れていた笑い
叱る人居ないわがまま寂しがる

佐一 三喜夫 大輪 和香 三男 豊太 克和 利治 徑子 順子 和子 稚代 東吉 輝子 小雪 富美子 美子 怜 紀子 ダン吉 純子 美緒子

夢のような新婚時代今地獄

見えかくれわがまま通す回り椅子

毒舌も聞ける嬉しい回復期

独り部屋笑いの電話あればこそ

素うどんの味忘れないレストラン

友一人何時も笑いを提げてくる

たくさん笑いの中で生きてゆく

よかつたら使こてと母の忘れ物

ウインカー笑い声する方へ出す

わがままを許してあげる熱い粥

京都塔の会

都倉

求芽報

無花果のくしゃみに猫と飛び起きる

飽食の里に瘦せてる赤とんぼ

にんげんに合わせて少子化のとんぼ

とんぼ羽化朝のはかな風に揺れ

とんぼから手招きされた吾亦紅

よろこびが不満おはくろもつれあい

ぶつかつてぶつかつて知るわが力

ぶつかつて温い心の人と知る

かくし事包んだ胸が痛んでる

気持ちだけ包んで果たす義理ひとつ

円満へ包み隠さず話し合う

蛇の抜け殻包み財布に母入れる

包まれて夕陽に沈む何もかも

ラップして昔をバネに飛んでみる

典子 葉子 篤子 綾子 庸佑 とし子 宏子 欣之 求芽 輝美 萬的 啓子 和友 ふりこ

針供養ぞうきん一枚縫った針

愛犬の供養に飛んで来た和尚

失った恋を浜辺で供養する

追憶にひたり先祖の墓参り

租供養に亡父の好物ビール券

亡き父へ供養とビールでんこ盛り

せめてもの供養いまでも独りです

川柳塔鹿野みか月

土橋

晴耕雨読珈琲の香で朝動く

口車つて珈琲はる苦い

この度は俺の一票生かされた

盆踊り踊り歩いて結ばれた

煩染めて珈琲カップ待ちぼうけ

投函の音へ合掌して帰る

記念日の主婦を忘れた宿の下駄

コーヒの樹の穏やかに白く咲き

観光地老いも負けじと手を繋ぐ

雨粒が落ちる仕事はすぐやめる

ナイターを踊り切ってる夏祭

希薄な風もナイターの邪魔するな

直球でいけと茶の間もナイターに

ナイターの一人芝居は忙しい

投げた土地団塊たちに拾わせる

ガス灯の下で稲刈りしたむかし

ナイターが睡眠薬のかわりする

福子 則彦 弘之 昌乃 益子 満子 美義 螢報 彩子 みさ子 武彦 幸枝 八重 くに子 和子 諷人 弘子 睦子 永子 富久江 かおる 久枝 孔美子 和子 菊乃 節子

混浴になるナイターの露天風呂

巨人阪神血圧計を用意する

ナイターに食い入る父の生返事

締切日迫る夜なべのエネルギー

投球を受け止める人捜してる

投げ捨てた言葉はもどる負けいくさ

下校する汗も生乾きの背なか

天王山ナイター戦に熱気湧く

眠れないのは珈琲だけのせいでない

こだわりの珈琲よりも缶コーヒ

珈琲のあとのケーキが犯人だ

珈琲の味にも天地人がある

高知川柳社

川竹 松風報

ふる里はとて元気な千枚田

よつちよれの熱気を貰う元気で

幼子が元気の種を蒔いて行き

ケイタイに絵文字があつて父元氣

花作り花を味方にしたパワー

その元氣本気ですかと靴も問う

傷口がふさがる元氣取り戻す

元気です趣味も恋にもまだ燃える

まな板の今朝も元氣な母の詩

元氣と元氣がぶつかる子の喧嘩

熱心に聞く人が居て話し甲斐

熱心に算盤弾く節約家

熱心さに負けて笑顔の契約書

はるお 宣子 和枝 公子 みどり きみ子 汲香 実満 美恵子 芳光 茶子 螢 哲史 良雄 和江 まき子 京子 典雄 幸子 千鳥 美々 てるみ 徳子 勢子 暖

熱心になつては困る趣味もある
熱心な子のなぜなぞを持て余し
熱心さに負けて妥協をする値段
熱心な人へ努力は報われる

川柳塔なら

坊農

柳弘報

八十歳やさしい猿と添い寝する
歳月が許せぬことも灰にする
無料バスやともらえる歳になり
傘で顔伏せて二人の影は逃げ
答弁はゆつくり本を伏せてから
新しいノートに標的が揺らぐ
おしつこの回数書いてあるノート
遺言の下書きしてる雑記帳
ノートした方程式がまだ解けぬ
一冊のノートが暴く闇所得
伏せ字少し読めて遅れた梅雨あける
番大の任務忘れて伏せたまま
人の世の地道を引いている屋台
夏バテを癒してもらう屋台酒
雨の日は妻が屋台の客になる
教養を屋台の椅子で裏返す
ここでも泣ける屋台の白い闇
伏せ字跡には拷問と読める
屋台曳くまでの起伏は語らない
震災にとつこい負けてない屋台
何歳になろうと僕は活火山

千鶴 美はる 博一 千梢 孝子 利昭 富子 茂雄 和夫 のりこ 比呂志 六助 洋子 道子 完次 秋雄 ダン吉 美千子 真理子 良一

突つ伏した娘の肩に触れられぬ
内緒ごと書いたノートを置き忘れ
郷愁が祭り屋台から匂う
B面の顔で弾んでいる屋台
オアシスの屋台は酒の丸裸
夏まつり屋台は万華鏡の中
文庫伏せ本と男とロゼワイン
歳とつて仏の顔に似てきはる
闘病のノートに光る句を残す

南大阪柳会

吉川

寿美報

新内閣回転軸がずれている
年かしら脳の回転きしみ出す
夜空には回転遅い観覧車
回転が鈍く仲間の端にいる
観覧車同じ所へ帰ります
隅っこに回転軸のお母さん
止められぬもつぱらトラで五十年
大好きなケーキもつぱら別の腹
酔うほどにもつぱら妻が美女に見え
サンブルを貰い結局買わされる
茄子キュウリ貰うた汗が有難い
退屈の欠伸を妻に貰う午後
バス停で日陰を貰う炎天下
本心を聞かして貰うのは恐い
バラ十本貰い話が倍になる
貰うのに理屈はいらぬありがとう

理恵 一風 朝子 國治 欣之 順啓 成子 隆盛 昌紀 萬的 弘泰 憲太郎 だんよし ダン吉 和雄 忠昭 更紗 栄子 福世 集一 郁夫 ルイ子 太郎 柳弘

貰つたりあげたり路地にある温み
私学へは行けぬ気配を感じる子
デパートにしかない秋の気配知る
リストラの気配ただよう大赤字
孫が来る気配カレーの匂いする
うっかりと賞めた料理が今日も出る
小咄に笑顔が戻る回復期
火の情け水の情けで生かされる
花も実も好きでまだまだ死にたくない
夏休みけんかも出来ぬひとりっ子
なんとなく許せる人と咲いてみる
茶柱が今日の風向き変えてくれ
内閣改造どうあれ僕は昼寝する
回転のぶい頭に注すお酒

西宮北口柳会

黒田

能子報

絵葉書に無事を書き足す旅だより
一銭五厘悲しい重いのがきです
丹精の絵はがきももう温かさ
食べること優先にする女旅
子沢山残飯食べて親太る
子が目線低くしている何かある
星空に手が届きそう木曽の夏
腰低い女にあつた土性骨
その痛み低い姿勢で聞いている
深海の貝で俗事に遠くいる
抽出しの貝へうれしい内緒ごと

志華子 東吉 尚士 観子 弘子 柳伸 雅文 直子 千里 章久 たもつ 弘風 折杭 いたる 松煙 キヨミ 奮水 わこ 章子 萬的 富喜子 朋月 哲子

貝殻に海の話聞いてみる

貝になり三日も妻は物言わず

貝になるまでにいろいろありまして

胸底に無口な貝を飼っている

泥吐けと鍋で一晩泊められる

さくら貝集めた日々もありました

桜貝拾った頃の夢を見る

ヤドカリになつて一宿一飯世話になる

若い人を求めています敬老会

たわむれの言葉も時にエネルギー

新しい命を庇うローヒール

故郷の山つたいバンザイをしてしまふ

懲りもせず鏡に妥協申し出る

カレンダーの裏に大河が流れてる

ほめられてうぬぼれ過ぎる悪い癖

北の地の白い恋人去つていく

心配が少々あつても笑えます

それぞれのリズムで合唱する夫婦

人生のてくてく雨も晴もある

ほたる川柳同好会

水野

図書館はわたしの避暑地無料です

中味より体裁競う土産物

無料だという勧誘が長すぎる

無料でも不用なものはもらわない

世間体と家計に揺れるやじろへえ

それなりに体裁保ち歩む老い

直

五月

紀乃

晴美

耕治

春美

悦子

順子

宏一

光久

美龍

孝一

比ろ志

弘子

多喜子

二英

求芽

嘉代子

黒兎報

勇治

祥風

見清

桂子

昭子

雪子

軒かく歯きしりはする二人部屋

ぎりぎりに紅を残して吾亦紅

爪弾きされたオハジキ欠けたまま

軸吟に握り潰したメモ五枚

ぎりぎりに起きてきつちり朝ご飯

いつだって母は無償で子に尽す

体裁を気にして触れてこぬ話

腹回りメタボへ僅か一センチ

猫は爪人は頭角磨いてる

無料だと店の物盗るお猿さん

無料と聞けば耳がそばだつ癖がある

衣食足り身の丈なりのボランテア

川柳大阪

長井

善純報

数々のチャンスのがしてまだ一人

若き日々つかみ損ねた数知れず

ルーキが代打のチャンス見せた意地

茶柱の真つすぐチャンス狙つて

惚れ葉チャンス待つ間に期限切れ

逆境をチャンスに男蘇る

気をつけやチャンスの後に来る墓穴

丁度よい暗さになつてきたチャンス

転がってばかり大型ゴミの父

人生の転機に君のアドバイス

回転の寿司でおんなじネタを食い

転んでもころんでもまだ夢の中

また転び外出禁止令が出る

柳童

禮子

宇乃子

信男

美智代

黒兎

久子

幹治

長一

契子

肋骨

勝

笑歩

有美子

五月

洛醉

章久

朝子

和

重人

笑風

利昭

照月

信醉

勝弘

あゝ逆転泣いて笑つて母を見る

基地移転ぐらゐ自前でやりなはれ

善人の仮面かぶるとよう転ぶ

自転転転そして地球は病んでる

今日も鍋料理苦手な妻の策

愚痴もつて苦手な人がやつてきた

お喋りは苦手でも言う有難う

ピーマンの苦手ぐらゐが何やねん

古希過ぎて今なお出来ぬおべんやら

借金苦手だ返す金がない

ズバズバと急所を突いて来る苦手

家事一切苦手ですわと赤い爪

超苦手腹八分目に止める事

機械は苦手温かい血が通わない

苦手だと言いつつマイク離さない

川柳塔まつえ吟社

三島

浜丘報

七つ釘どれほど母の夢みたら

取柄なく飾り釘の位置にいる

夏になると海で恋しい貝釘

白寿まで和服ゆつたり釘なし

礼服の釘泣いたり笑つたり

リフォームの服へお気に入りの釘

明日わびる言葉をさがすソバ枕

水枕チャボンチャボンと独り言

阪神が勝つた勝つたと膝枕

鳴り砂が生きた詩にする旅枕

柳昌

ダン吉

一風

柳弘

川童

花笑

福世

修

東吉

一步

紀雄

まつお

かよこ

美花

善純

蘭水

多賀子

たえこ

ちえこ

たけし

知恵子

紫晃

蘭

螢

日出子

知りたがり枕は耳を立てたまま

夢でいい一度借りたい膝枕

この世からあの世へ渡る割引券

風鈴の音色さわやか風渡る

萩こぼれ刈田を渡る祭り笛

渡る世を雑魚で見上げた青い空

つまずいて起きて渡つて今がある

人の手に渡つてからが気にかかる

さすがだと小さな妹兄立てる

年の功さすがと思う知恵袋

天晴れださすがは母の底力

天才はさすがが命の灯を消さず

大物はさすががこちゃこちゃなど言わぬ

気ままでもさすが一本筋がある

君からの元氣百人力になる

欲張つて元氣印の薬飲む

雑草の元氣しみじみ欲しい夏

必勝の二字に元氣が跳ねている

受話器とる百歳の声元氣かね

まだ元氣美人はやはり美人かな

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

税務署へ口がたつから妻がいく

税金を払つてお辞儀して帰る

年金に話題とられた消費税

がたがたのこの陋屋に重い税

最低限で補償もない上税が来る

畔

茂美

昌枝

博子

房子

スズコ

政子

静恵

礼子

和歌子

多喜

小生

治代

桂子

柳歩

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

幸子

税金はきつちり払う引き落とし

原産地見えない物は遠ざける

ゆるぎない大地近頃よくゆれる

捨てられた思いで生きた大地の子

足あとに残さずやがて去る大地

川柳茶ばしら

板山まみ子報

女性との握手やっぱり動悸する

優先席ゆずらないのは面当てか

休み明け机があつてはつととする

身長のせいです机台にして

片隅に机残して子の自立

専用の机もらつた日の歡喜

擦り減らしやつと手心え百軒目

記憶みな飛んで童となった母

尼崎尾浜川柳会

田原 宏一報

ひと夏のドラマも終る海の色

夕立のパニック見てる喫茶店

曖昧な男も持つてゐる火種

面会のない病人に長い午後

電車の中帽士忘れてチョット待つて

思うほど反応ないが尽してる

スポーツ界は親の光が届かない

要検査にひとり怯える癌の影

お守りの要る平成のお買物

古来稀と言われる命感謝する

慶子

加津子

香住

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

あずき

ギブアンドテイクで世の中善く泳ぐ

贈られた言葉にしかと応えよう

恐かった父が与えた子のしつけ

誘惑という字がおとこ掻き乱す

ポックリと思う心に残る愚痴

感動を与えてくれた握り飯

強烈な個性天が与えた宝物

十七歳無償の愛に気付かない

長 柳 会

村上 直樹報

ノーマイク笑顔美人というおしやれ

うっかりと本音洩らして四苦八苦

本音をはけば何でもぶちこわし

千の風ブームになつてよく売れた

飴と鞭上手に使う良い上司

あつさりとお受けしましょう玉の輿

おしやれには元氣のききめきつとある

弱気です売られた喧嘩借りたまま

酔つたふり本音はき出し人恋し

夫婦とも本音語らず先は闇

色シャツやベレーでしやれて大笑い

おしやれなどしても詮無きことだけど

装いのヒント姿見から貰う

人生をおしやれに生きた友が逝く

着飾つた人がポロッと出す本音

大原女の売り声のどか京の宿

売り出しに無駄を買つてる列に居る

比ろ志

義芳

亀子

孝一

五月

朋月

正治

美籠

直樹

光弘

輝子

よしお

もこ

マサ

正一

明子

ヒロ

武男

明信

敬二

靖子

英美

たけし

けい子

和代

とりあえず明日のために種を播く
本当はノーと言いたいイエスマン
真心の誘いに本音引つ込める
売り言葉まあるく受ける年の功

正博
芳野
三和子

角立てぬ本音建て前使い分け
お互いに本音をくるむ老いの知恵

不二雄

仏壇の前で本音を打ち明ける

幸雄

からっぽのハートを打った一頁

正子

錯覚を売って儲ける化粧品

和子

飲み込んだ本音ぐるぐるとぐる巻く

富美子

本音より優しい嘘に救われる

淳司

ブラウスの胸に留めたい赤蜻蛉

正美

高槻川柳サークル卯の花 釜野

一慧

高槻川柳サークル卯の花 釜野

公子報

補聴器をつけ夏風の愚痴を聞く

昭

バッテリーと出合い時計を巻き戻す

郁郎

逆風に凜と男の顔になる

郁夫

蟬しぐれ肴に亡父と酌み交す

恵美子

生きてたか足はあるかとクラス会

一央

酔っ払い下戸に配達されてゆき

かずお

痛くもない痒くもないと虚勢張る

慶子

昼下がり猫が知ってる風の道

幸雀

見ない振りして良心がむず痒い

孝一

ライバルと微笑の会釈炎の目

砂輝守

風向きが変わると足がもつれ出す

佐代子

ワンクッションおくと和んだ風になる

昭二

消しゴムを使い果たしてまだ迷い

痒いとこ位ひとりて掻きなはれ
道草もまた良し人生遠回り
ラブメールばったり断って恋の賭け

節子
武史
つね湖

下戸の接待お食事だけですぐ終わり
酔ったふり下戸は上手に芝居する

遠野

煽てられむず痒いままボランテア
ブライドはまだ捨て切れず髭を剃る

信哉

酒のせいにできぬ辛さもあつて下戸
善人の仮面の裏がむず痒い

晴弘

ジャンプ台に立つて尻尾を切り捨てる

尚士

その噂打ち消す女の目がうるむ

比呂志

ブライバシーには立ち入らぬ回収車

萬的

クシャミした程度の風で噂飛び

美龍

風向きを読んで手のひらひるがえす

美稲

飲みたい日下戸の夫が邪魔になる

美義

暑いなあ君の笑顔を探してる

泰雄

うぶみ川柳会

八斗藤

小谷美ツ千報

律子

風仙花はじて母の細い骨

美ツ千

やわらかい骨です風の吹くままに

ひろこ

夕闇にクツキリ見える狸の目

睦子

頭も骨も酒のつまみにする鰯

きみ子

小魚の骨で私を補強する

尚子

水着あとクツキリついて夏エンド

幸恵

標本になって錦を飾る骨

和

甘つちよろい考えクツキリと目立つ

あづま

雲の上クツキリ見えた伯爵富士
頭蓋骨立派と言われまあいいか
クツキリと寝敷をつけた顔写す

芳江
和子
京子

仕掛け人誰か知らぬが粹なこと

天人

喧嘩して泣くのはいつも仕掛けた子

龍枝

物言いの相撲クツキリビデオ見せ

かつみ

勉強のはじまりだった文机

玲子

美しい国がクツキリ浮かばない

孔美子

なんだって骨身をわけた子が宝

照彦

口紅をクツキリ女まだ捨てぬ

よしえ

年金が仕掛け火花になったのか

和枝

クツキリと赤字は赤いペンで書く

重忠

梅雨が明けたら恋文が届くはず

螢

文芸は箸の上げ下ろしにあらす

完司

鮮明に春の記憶を残す紅

石花菜

八尾市民川柳会

宣子

富西

弥生報

こつてりと憎まれるほど生きてやる

あかり

強弱をつけてはずんでいる余生

秋雄

ちよつとだけ好きで結婚した不運

耀一

アタックへ鈍い男が憎らしい

朝子

政界の膿こつてりとしほり出す

賢子

使つたら違いが分る金と銀

扶美代

団塊が一斉に買う世界地図

浩三

組閣には事務所費ちゃんとチェックする

紀男

大好きを通す火の中水の中

欣之

腹八分残りの二分にある未練
鈍いのも交じる愉快な縄電車
大臣になつても好きなマンガ本
策のない夫婦でいたい月見草
少年にもらつた席が心地よい
こつてりと師にしはられる芸の道
柿になり栗になつてる夕茜
母さんの空気がつまつた僕の家庭

川柳塔打吹

野口

節子報

開演を待つ間ザワザワ落ち着かぬ
ザワザワと飛び立ち帰る朝青龍
午前様ザワザワしても高いびき
ザワザワとうわさ話に血が騒ぐ
ザワザワと庭木を揺する不穏な風
きび畑ザワザワ歌う鎮魂歌
地震計ザワザワするなまだ余震
ザワザワと九条揺れて秋になる
一匹の虫に静寂破られる
千匹の蟻がうごめく胸の中
よく見ると蟻の列にもある秩序
見られてる緊張感が背を押す
お似合の夫婦を見てる淡い夢
見る位置を少しさげれば許される
戦争を見る人たちが喜寿迎え
見つめられとうとう本音はきだした
皺の手にダイヤは合わぬ見せられぬ

いさお 柳伸 まつお 芳香 一風 宏至 隆子 弥生
美代子 京子 みち子 禎元 和子 三津子 芳光 照彦 孝恵 睦子 美知江 小生 美美子 紀美恵

目の玉が二つあるのにけつまずく
鏡見る七十年の晒し首
醜い処は見てみないふりをする
寺参り伯父が寄附した鐘をつく
警鐘を鳴らす試着室の鏡
半鐘を盗られ火事まで気付かない
鐘の音が心の揺らぎそのままに
タイガースいけいけ行けとかね太鼓
踏切りの鐘が鳴つてくけど渡ろ
嫁には行かぬ鉦も太鼓も聞き流す
悪戯でついてもさみし鐘の音
鐘の音が響き合うまで話し合う
追っかけて亡母にやりたい鐘三つ

大原川柳社

山本

玉恵報

戻るはずない子を待つて母ひとり
終章は背戸に戻つて風になる
戻らない春の記憶をなつかしむ
突き当る度にいろはのいに戻る
再会を誓つた友と久しぶり
二度童子に戻り悲しい紙オムツ
妥協した訳を引きずる戻り道
戻れない未練の過去の老いの坂
戻り道話が尽きず引き返す
だとしても戻らぬ筈に指を折る
妻の待つ港に戻る温い風
貧しくも笑顔豊かな灯に戻る

完司 石花菜 螢 重忠 玲子 玲坊 公恵 善江 きみ子 和枝 克枝 美ツ千 節子

千羽鶴意識の戻り願いつつ
振り出しに戻る途中でけつまずく
度忘れに行きつ戻りつ老いの日々
手戻りはやっぱり歳に逆えず
戻れないあとに引けない崖つ淵
この誓い果たさなければ義理たす
見込みなどないから戻れ母も老ゆ
童心に戻つてうたうわらべ唄
現代版戻つて来いと親は言う
冥界より戻る三夜の盆灯り

岩美川柳会

石谷美恵子報

砂時計砂一粒のいのち抱く
血を抜かれ三分間の砂時計
秋味賞砂地好みのおつま手
茸狩り鈴とスプレーポケットに
ポケットの中でガッツの掌を握る
ポケットのゴミが昨日を語りだす
ポケットに辞表勞使の交渉だ
にんげんを休ませている丸い月
披露宴によはれ休肝日と言えず
年中無休働く妻よありがとう
のこり火を抱いて静かに休む秋
休んだら行方不明になる椅子だ
休むこと覚えましたが母の星
ずる休み明日の荷物が重くなる
リハビリを休むと明日が逃げてゆく

たつ子 あすなろ 絹子 己吉子 エミ子 文代 恵湖 とめの 信子 玉恵 孝男 蟹郎 公子 重忠 節子 清帆 かつみ 螢 はるお 圭一郎 一京 一瑤 一粹 和枝 公乃

父母の待つ故里がある夏期休暇
先頭に知ったか振りがある迷路
お浄土へ行きたし五欲捨てきれず
休みぐせつき弾まない習い事
宝くじ先に買つても当らない
先のこと考えません今生きる
妻よりもちよい先に逝く幸せよ
先ことは判らぬ今を生きている
今の夢中で先はケセラセラ
休ませてあげたいひとが休まない

もくせい川柳会

江見 見清報

うまいまい妻に聞こえるように食べ
順番がなかなか来ない待ち時間
呼びつけてハンコがひとつ抜けてます
呼び出しのチャイムよつこ間に合わず
よちよちがおいでおいでと手で招く
呼びさます脳の働きあれやこれ
温暖化九月半ばの熱帯夜
そこそこの男で我慢してる妻
インテリのつもりひとが御し難い
ちちははが呼んでるような秋の星
退屈はしないふつつか者である
母さんと最後に呼んだ学徒兵
手の平の大きな男花が好き
おいしいとにつこり笑う母になり
自分史に葉はさんだままの秋

幸枝 忠良 茶子 幸子 稔 菖子 幸安 雅女 和子 美恵子 石舟 重人 啓生 タミ 慶子 知香子 萬的 尚士 啓子 朱夏 義夢 義子 宇乃子 玲子

冗談の中に本音のバズル解く
定年や背なの三猿暇を出す
無農薬やはり優しい味がした
冗談でも素振りに迷うおとこです
キオスクで買った郷里の小さい秋
髭剃りながら一日を組み立てる
詰めすぎた筆筒冗談にも聞かぬ
逆境もさすがは友のうまいトス
重い物持てぬ男に用はない
ヒーローを食う脇役の極し銀
揉め事は肝の据わった妻を呼ぶ
直球の冗談軽く打ち返す
冗談で尖った頭がほぐれ出し
うまいとは言わずお代り三杯目
沈黙も返事の二つりんこ剥く

川柳ねやがわ

森

湯上りの浴衣の妻にある色気
浴衣縫うやさしい祖母の鯨尺
糊さいたゆかた着る時よき日本
手をつなぎ少女が脱皮する浴衣
美しい逃げのポーズを追求中
年金の不正追求ゆるめない
追求すると数から蛇がでる
追求してから人間不信になつてい
面倒は追求しないネコの夏
地に書いてケンケン遊び戦中派

巴子 美義 千代 孝一 美籠 遠野 求芽 早人 寿美子 幸雀 寅次郎 勇治 則彦 美智代 十八娘 芭報 寅幸 柳弘 茜 郁夫 典子 ルイ子 じゅんこ 亜成 日出子

雑草に習う地上のたくましき
我が町の広さを知った熱気球
降り立つてホッと安心空の旅
そのうちに地上はきつと海の底
金持はもう地上には夢がない
あなただけあなただけは信じてた
歳の差を忘れてました飲み負けた
北極の水が解けていく不安
うちの子に限つてという親の常
元気だとおだてに乗った不養生
健康の過信を論す内視鏡
存える命の過信輝の声

昨日まで妻は味方と信じてた
脳トレに新聞クイズ解き続け
温度計みるのも怖い熱帯夜
濃淡のリズムに惹かれ水墨画
台風一過を知らぬ顔で赤とんぼ
送り火もテレビで見てる無精者
歳老いてどこに置こうか自尊心
丁寧に残り時間を生きてゆく

川柳塔おとり

福田 登美報

出直しへヘアスタイル変えてみる
老いてまでスタイル維持で走ります
千の風歌って涙拭いている
海ゆかば歌うと胸が寒くなる
ささやかなたのしい吾が家大の字に

一風 一男 弘風 朝子 博泉 あやめ 修 三郎 賢子 とし子 集一 麗 仁清 勇太郎 かすみ 庸佑 洋 たち子 鈍甲 たもつ 由多香 道子 螢 風花 清子

ささやかに引上げ貯金利息つけ
命ある限り大きな夢を持つ

小生 雄々

夢ひとつ追っかけている古桶の坂
初夢を正夢にする汗流す

艶子 以和万津

夢だからライフワークをあきらめぬ
親に似たスタイル何も喋れない

真一 登美

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

試歩の朝杖に頼って踏み出した
回復期はちほち延ばす試歩の杖

敏 庸佑

マイペース歩いて病氣治します
生きている限りあなたと歩きます

フジ みつこ

純真がまだオレオレに騙される
ブーム去り宝の山もゴミとなる

猿沓 正子

ブーム去りミニもロングも寝ています
もう歳だブームに乗らぬことにする

喜久子 真一

バチンコのブーム支える欲の皮
ブームには惑わされずに生きて行く

志洋 静子

しゃくれ顔ずつと猪木と比べられ
額ははずほどに笑ってみたい老い

ちづる かつみ

額ははずほどに笑った寄席帰り
五十年二人の額は噛み合わず

いさお アヤ子

顎乗せて昼の講義は子守唄
泳げない私ブールは歩く場所

久仁子 章司

友禅流し布が泳いで色清か
泳げいくさ目が泳いでるマニフェスト

ヨシ枝 重人

泳げない私水泳指導する

一壺

雑談にちらり本音を泳がせる
犬掻きでビルの谷間を泳ぎ切る

りつえ 一知

三途川泳ぐつもりの水着買っ
泳ぎ着く先は問わない雑魚の群れ

耕策 泰子

城北川柳会

小谷 集一報

背表紙に夫生きている話かけ
推奨の表紙の帯に騙される

千歩 東吉

表紙だけ体裁のよいマニフェスト
表紙では元氣なわたし見せている

ルイ子 勝弘

表紙絵が朽ちても光る夢一の絵
感動を静かに閉じる裏表紙

朝子 あやめ

掃除機はうなる簪は欠伸する
一掃した微罪の陰にある巨悪

昭 萬的

独身の気分転換する掃除
波風に掃いた心を荒らされる

麗 柳弘

掃き捨てる少し手前にある未練
日本列島さつと掃きたい竹箒

とし子 はじめ

商魂を掃いて集める初恵比須
日の丸のマーク一番美しい

昭子 ひさ乃

心根のやさしい人をマークする
十六階静かに雲が動いている

容子 達子

お地藏さまへ小銭たまると詣ります
メールから遠い家族も近くなる

福世 章久

あの人のまたかと思うおべんちゃら
世界陸上メダルと旗は夏の夢

一步 修

女神ふとこつち見たけどそれつきり

半分こいつでも妻におおき方
自慢気に友の話は遺産分け

たもつ 弘風

小刻みに吐き続けている意地の糸
二重丸唇に付けて母が待つ

和夫 明子

寝てる間は喧嘩はしないセミダブル
知らないで済めば得する事もある

順三 志華子

地に足をつけたら見える敵味方
毒少し混ぜて出してる深い味

集一 郁夫

真つ直ぐに歩けば影もまっすぐに

典子

すみよし川柳会

岩崎 公誠報

誘われて赤提灯へ回り道
たらい回しするなど背に書いておく

裕之 桃花

回転の早い頭でクイズ解く
氣を回す訳のありそな二人づれ

ヒ口 萌

波の音寄せては返すむかしより
回り道得た氣配りとお友達

幸子 定子

ひぐらしの輪唱森をわたりくる
一言をゆずると会話回りだし

伸子 舞夢

看護婦が走り回っている不安
親子して回転木馬の夢に乗る

日の出 半銭

芯ずれた地球知らずに回ってる
水すまじぐるぐる迷い抜け出せず

昌紀 かりん

回るたび汚染で重くなる地球
ほろ酔いが絶好調で回る舌

りつえ 遠野

自分史に迂回の個所がたんどある
水車風車自然の力見直され

蕉子 公誠

目の回る高いところは嫌いだ

川柳花の輪

妻谷

重風報

驚きが減って淋しい老いの日々

驚きも感動もなくまた夫婦

そうめんにびつくり水で夏がくる

突然に癌と告げられ嘘でしょう

地球いま虫が鳥食う温暖化

ゆつくりと櫛をとかして髪自慢

ゆつくりと言いつ分を聴くママが好き

初孫がゆつくりムードかき乱す

川柳塔きやらぼく

大塚

恵子報

だいそれた夢は見えないよ一歩ずつ

水割の時間ですよと呼びにくる

老いの身に立ち居振る舞い気をつかう

美しい夕日が映える嫁が島

なんて事ないぎはうしの花が好き

久し振り夫婦でデイナー厚化粧

花たちとはなし静かに待つ天命

七夕に痛み流して天の川

一筆の終わりの文を練っている

着飾って心をどこか置き忘れ

俄か雨つばめと共に雨宿り

転ぶなと我が身と脳に言い聞かす

国立公園世界遺産で影薄れ

キラキラと夏の夕風美しい

ソプラノで陽気に笑う友も逝き

紫泉

山を背に天女が産んだ崖の百合

郁夫

青虫の明日の姿を夢に見る

婦美子

— 122 —

梅雨つゆつゆ心にかびが生えだした

泥仕合いこの達磨が泣くだろう

よく笑う家系であるらしいと公會

もの忘れただひたすらに先を行く

美しく深く技芸天の声

コーヒーカーップに浮かぶ沈みする老後の絵

紫陽花が咲いた鬼門をすり抜ける

空は画布悪戯書きの好きな雲

火傷するかも知れぬのに栗拾う

雑談の中巧く生き抜く知恵拾う

送り火に暫し現世を忘れさせ

クラス会気付かなかったロマン聞く

夕日のセブランコ独り揺れている

いつまでの命が大事な誕生日

穂のゆれるちぎり絵の影西雲

大正昭和の歌声胸を鷲掴み

介護士が介護の人に励まされ

裏通りオイラン草がそつと咲き

詮索はよそう弱味はわたしにも

我が命知ってか知らずか蟬が鳴く

あかつき川柳会

山本

柳昌報

正

郁夫

柳昌報

北野

哲男報

見清

見清

瑞枝

蘭

なみ

寿々女

ふみ

日枝子

千代

てい子

守弘

宏一

武庫坊

幸子

東園

道子

和子

寛之

年代

野薫

ゆき子

久子

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

千恵

寝て起きて食べてまた寝て恵まれる

美しい指だ幸せなんだろう

長生きで金に不自由のない家計

招かれぬ席だと知った座の空気

どんと晴れ茶の間の空気とませる

マドンナが来ると空気が甘くなる

和やかな空気茶の間に母囲む

七色の空気を吸って酔いました

トゲのある言葉で空気くもらせる

最後まで世間の空気読まぬまま

不屈の人ベンモデルは杉とす

懸命に生きたモデルの人が逝く

先取りヘモデル毛皮に汗まみれ

メイドインチャイナを舌は知らんぷり

新米のやさしさ舌が知っている

思い切り毒舌をばく裂けざくろ

六歳の作文に舌巻いている

もう一本の給油を妻に拒否される

首位になるまさかまきかのタイガース

日米の同盟重視民軽視

一国のあるじ投げ出す無責任

職賭ける前に頓挫は無責任

負けたとき腹切つてれば英雄だ

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

敬老の日にも老人孤独の死

紀雄

柳昌

蕉子

良知

祥昭

紀乃

集一

一步

美世子

鈍甲

ダン吉

ルイ子

克己

柳弘

美花

富美

太郎

尚士

朋月

明水

東吉

勝弘

シマ子

見清

見清

見清

見清

見清

見清

見清

見清

ゴキブリにたじろぐ妻のいじめ癖
 ゴキブリが出て断末魔こき声
 秋の虫鳴いているのに草刈機
 DNA調べるまでもない親子
 俺似だと言つて娘に叱られる
 亡母似だと法事の度に出る話題
 三田から全国区へと幕が開く
 神様にまかせ幕の引きどころ
 終演は大見得きつて散るつもり
 秘仏にはまずは逢えない寺参り
 暑いとは言わずいそいそ行く句会
 酔っている男はいつも隙だらけ
 すすきの穂揺れる向うに月愛でる
 今もつて男が守る相撲界
 消ゴムの屑にまるめた我が本意
 敬老日うどんがええと母米寿
 悠久の都が燃える政事

むらつくも川柳会 毛利

忠 好文 歳子 藤朗 正和 章子 光久 千代子 順子 二英 キヨミ 朋月 雅司 一泉 茂山 哲男 哲夫 幸報 幸子 定子 彰 宣雄 美保 美恵子 蘭水 瑞枝

名将は歩の使い道知つている
 夕焼けの下で静かに呼吸する
 体重計もつと減食せよと言ひ
 老いの身で何時まで守る盆行事
 老い進む昔を語る顔の皺
 また一つ忘れてそつとにが笑ひ
 ホトトギス青葉の陰で頻り鳴く
 出雲弁わかつたような顔をする
 四世代時々自分見つめてる
 世の中は親子のしつけ捨ててゆく
 翠洋会 谷口
 風を読むためにときどき立ち止まる
 山男山の空気はすぐに読む
 常識をくつがえす本読みふける
 阿弥陀経読んでお盆のおもてなし
 顔色を読まれ先手を打たれてる
 読みやすい人やほんのり顔に出る
 言い訳の先を読んでる妻という
 老い先を読める眼鏡が欲しいです
 遠慮と言ふ丸い心を持つヒト科
 衿先もきりり女将の奮戦記
 えっほんま今言われても遅すぎる
 漬物がうまくて箸を持ち直す
 心技体心の欠片もないお方
 しおらしいポーズに何度も騙される
 美しい国を見ぬまま総理去る

俊夫 秀夫 嘉寿子 愛子 義良 秀子 惠美子 ます美 喜美 清子 楓楽 桃花 千梢 捷也 蕉子 富子 舞夢 昭 志華子 茶々 すみ子 恭昌 正雄 満作

押し引く呼吸がうまい生き上手
 美しい国は消えゆく絵空事
 ノート出し鉛筆だけが焦つてる
 空白のページ空っぽだったあの日
 玉手箱交換日記の青春譜
 血圧を朝晩記帳わが日課
 一冊のノートでわかるお人柄
 ノートにも変遷があり半世紀
 メモ日記書いてわたしの吸い取り紙
 古日記すっかり秋になりました
 講義より似顔絵描いているノート
 岸和田川柳会 土橋 房枝校報
 じいちゃんの生きがい俺だ孫威張る
 旅の案練るひとときもまた至福
 うるわしい昔が残る里言葉
 うるわしい話は耳にあたにかい
 救助して名も告げないで去った彼
 一心におっぱいのむ子うるわしい
 嫁く娘に白無垢似合う美しい
 うるわしい汗だキラリと光つてる
 美しい仕草に猪口が見惚れてる
 うるわしいネタは追わない週刊紙
 旅路近く亡母どの辺り遠花火
 帰省子と花火楽しむ休耕田
 見事だと花火見上げてスリにあい
 夏の恋花火のようにパツと消え

集一 水昇 日の出 理恵 げんえい 春 照子 千歩 さと美 義 みつ子 洋 檣代 笑司 和美 美世子 美花 柳昌 東吉 仁緑 弘子 香代 房枝

案するな父の一言力出る

妙案で最後を締める年の功

妙案と思つてるのは自分だけ

大威張り九九を正しく言えた孫

この夏を威張り通した蟬時雨

威張ること何んもないが汗流す

キャブテンの道はいつでも向い風

キャブテンに辞めろと吠えるサル

倉吉川柳会

竹信

照彦報

裏側で重き支える裏表紙

少年の心に沁みる漫画本

淋しくて読者にのめり込んだ日々

百科辞典はこりをかぶる時代物

年重ね同じページを繰り返す

辞書開く拡大鏡も友にして

すきな本読んで時間もわからない

ひと言が過ぎて損ねた長い夜

愛妻は機嫌損ねて黙秘中

夫婦さへ蜂の刺し気を損ね

年金が損ねる人とサバイバル

つかみそこねた幸も早や雲の上

破損してぎしぎし回るこの地球

美しい国の行方を聞き損ね

政界は民が損ねる事だらけ

糸瓜の皮にならないうに四股を踏む

思い出の中のおアシス糸瓜棚

君代 俊昭 珠子 幸子 岩夫 ダン吉 集一 蛙城
和枝 芳光 みちる 京子 貞子 風露 美津恵 睦子 泰輔 和子 賀寿恵 克枝 次男 茶子 祐子 龍枝 瑞子

おかめでもへちまころんで美人肌

老いはれの糸瓜の脳に活入れる

糸瓜でもゴーヤでもよい陰ほしい

生き様に丸をくださいお月様

お医者さん信じて病夫の目が丸い

石仏洗う丸あり角もあり

病む妻のしもべとなって丸く住む

輪になると皆んなの顔がよく見える

丸腰で守る平和は危ういか

背を丸く腰低くして芋を掘る

白い丸好きな力士の猛稽古

真心を形に書けば○になる

ボルト一本損ね飛行機炎上す

日出子

常代

由紀子

節子

康子

萩江

重忠

よしえ

鬼一

螢

喜美子

悠子

照彦

「各地句会だより」掲載について

川柳塔社の小集会で、紹介・アピールを
ご希望の会は川柳塔社事務所まで原稿をお
送り下さい。

会の様子、または会員の集合写真を必ず
添付して下さい。

なお掲載順・添削については編集部に一
任願います。

内容：会の特色・行事・これからの予定な
ど自由

行数：たて20字×54行（400字詰原稿用紙2
枚と14行）

京都塔の会

第58回 秋の吟行句会

日時 十一月二十六日（月） 11時20分

集合 嵐電「四条大宮」駅前

行程 四条大宮から約18分・車折くるま
ざき・下車すぐ車折神社

昼食・「車折神社」 京都市右京区嵯峨

句会場 朝日町 TEL 075・861・0039

兼題 「あいにく」「救う」「効果」

「当日雑感」 各題二句

解散 午後4時頃「車折神社」にて解散

費用 4500円（当日頂きます）

締切 十一月十五日

申込 都倉 求芽あて

〒600・8428 京都市下京区諏

訪町通松原下弁財天町三八・二〇二

電話 〇七五・三五五・四二〇九

☆車折神社

祭神は平安末期の儒学者「清原頼業」

境内に新熊神社があり、朱の玉垣が芸

能人により、ぎつしり奉納されている。

☆春の大堰川で行なわれる三船祭はこの神

柳界展望

○第43回雀郎まつり誌上全
国大会(第二部)の同人の
特選句は次の通り。

品 播本 充子

○北見川柳社創立55周年記
念・第44回東北北海道川柳大
会は9月9日北見市市民会
館で開催された。参加者300
人。本社同人の秀句。

みずいろの絵具を足した
放浪記 播本 充子

はのは部屋に毀れたピア
ノ鳴っている 木本朱夏
夏瘦せの森から波浪注意
報 木本 朱夏

○南大阪川柳会句報50号記
念句会は9月24日枚方市立
枚方宿健屋に於て59名の参
加、天位

出られない生まれたまち

の風を抱く 都倉 求芽
昭和史の汚点拭いても洗
つても 西出 楓楽
化粧した言葉心に届かな
い 西出 楓楽

○第13回五呂八祭全国誌上
大会(応募者463名)、本社
同人の特選句は次の通り。

老々介護どんどん波が高
くなる 高瀬 霜石

二極化のうねりが消した
ホイッスル 播本 充子

生きた音死ぬ音波の打つ
太鼓 大橋 政良

向日葵が枯れて日曜日に
なった 谷口 義

雑学の中から生える笑い
茸 高瀬 霜石

総合順位
八位―高瀬啓子、十位―
谷口義。

○東奥日報社主催第61回青
森県川柳大会は9月16日、
青森市文化会館で開催。本
社同人の天位は次の通り。

一家団欒柱の傷も笑って
る 高瀬 霜石

▽御芳志御礼△

西尾美與子二代目主幹西尾
葉氏夫人から金一封拝受

▽出版△

○今愁女さん(同人・弘前
市)は八月、川柳句集『雪
ばとけ』を上梓。(A4版
39頁) 百句を掲載。句集紹
介105頁

○そうりゆう会は合同句集
として、句集その四を發刊。
会員28名の句を、それぞれ
10句ずつ掲載。B6版60頁。

○はたる川柳同好会は15周
年記念合同句集(第3句集)
を發刊。B6版96頁。

▽同人動向△

○同人播本充子さん(東京
都)は『川柳オホーツク』
流水集の鑑賞を、10月号か
ら半年間担当する。

▽訂正とお詫び△

○10月号29頁下段17行目、
五感みな鈍い心眼冴えてく
る↓五感みな鈍り心眼さえ
てくる。125頁、新同人中井
萌さんの推薦者、みつこ↓

新同人紹介

平 島 美智子
―天笑・一步・典子・集一推薦

永 田 章 司
―美代子・敏・玄也推薦

みつ子。三段24行目、米子

氏↓米子市。127頁、八尾市

民川柳会の会場、八尾文化

会館↓山本コミュニケーション

ンター。

○10月号表3面本社11月句

会午後5時半から↓午後1

時から。

▽新誌友紹介△

寝屋川市 角谷 克治

鳥取市 河内 天笑

鳥取市 山川 武彦

大阪府 土橋 螢

大阪府 萩原 大朔

大阪府

西脇 義祐

村上 玄也

大阪府 田中 幸代

河内 天笑

門真市 土屋百合子

常任理事会11月26日(水)

出席15名①同人総会議案書

の最終確認②川柳塔まつり

表彰式・記念句会の詳細打

ち合わせ③懇親宴出席名

簿、余興について④新年度

役員、最終確認⑤その他

同人2名承認。次回10月22

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
ほたる川柳同好会	13日(火)午後1時から かばん・詰める・なじみ	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
高槻川柳サークル卯の花	15日(木)午後1時半締切り 渋い・味噌・しみり・煙 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
岸和田川柳会	17日(土)午後2時締切り 安定・苛立つ・うろうろ クレジット	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳藤井寺	18日(日)午後2時15分締切り 寺・いちいち	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	18日(日)午後1時半締切り ないしょ・変身・奇抜	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	19日(月)午後1時半締切り 結ぶ・虫・ノック・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳さんだ	20日(火)午後1時より 弱気・庭・叱る・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブわたの花	23日(金)午前9時半より 本気・余白・タイミング 自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	24日(土)午後6時から 淋しい・秘密・ダンス・樹	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和歌山幸会三川柳	24日(土)午後1時から 何・映画・図書館	勤労者総合センター 4F 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川柳ふうもん社	25日(日)午後2時締切り プロ・こっそり・失格	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
はびきの市民川柳会	25日(日)午後2時締切り さくさく・リハビリ・肌 「刻む」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳塔みぞくち	26日(月)午後7時半締切り 平凡・損・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	26日(月)午後6時から 足音・溢れる・ゆるい・素敵	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	26日(月) 吟 行 あいにく・救う・効果 当日雑感	句会場 事折神社(詳細P.124) 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	1日(木)午前11時30分開会 秋の吟行 貰う・器・機嫌	あしびの郷 奈良市脇戸町29 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼崎 いくしま	2日(金)午後2時締切り 味・癖・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	3日(土)午後2時締切り あの時・くも(雲・蜘蛛)・反対	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
富柳会	3日(土)午後2時締切り 文句・プラス・自由吟	じないまち交流館2F 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳 ねやがわ	3日(土)祝日正午開場 慰める・忠告・浮く・歌う 紅葉・テーマ	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳塔 唐　　津	5日(月)午後1時半から 白・願う・着物	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(金)午後2時締切り 礼・片方・「スイス(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
城北 川柳会	10日(土)午後1時開場 屋根・悔い・スパイス・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 打　　吹	10日(土)午後2時締切り 辛抱・押す・コトコト	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 ま　　つ　　え	10日(土)午後2時締切り 席・階段・写す・伸びる	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島澄丘
川柳塔 みちのく	10日(土)午後5時半締切り 避難・導く・眠い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉宮宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	11日(日)午後1時から 面影・うっとり・歌う・雑詠	山本コミュニティセンター3F 学習室 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	11日(日)午後2時締切り 足元・東・ラジオ・「果物」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 一瞬・点・痛い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼崎 尾浜 川柳会	13日(火)午後2時締切り だんご・悩む・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治

編集後記

る。

①健康であること

○秋たけなわの10月8日はあいにくの天候であったが第13回川柳塔まつりにご参加いただいた250名の方に心より御礼申し上げます。遠方からお越しいただいた方、翌日観光にも参加いただいた方、二日間にわたるお付き合ひありがとうございました。

②経済的ゆとり（ささやかでよい）

③時間的ゆとり

④人間の社会的つながりを持つている

⑤家族の支えがある

⑥張りのある日常を持つて等である。更に⑥のためには、趣味を持つ・学習をする・ボランティア活動をする・スポーツをするを挙げておられます。特に定年後の男性に向けての発信です。

○木津川計先生は立命館大学教授を退官後、71歳の挑戦として、ひとり語りの長谷川伸劇場を旗揚げ公演されました。人間は何にもせんで生きているといれなうと言っておられます。

○一人でも多く生甲斐に川柳をと思われる方が現われてほしいと切に願っている昨今です。

○人生に生甲斐をもつにはある程度条件が必要である

○川柳塔誌に「川柳讃歌」を執筆いただいている木津川計先生は7月28日のラジオ深夜便の中で次のように語っておられました。

（希）

ひとこと

ク（活用）とシク（活用）

終戦後、漢字を止めて「ローマ字」に変えようという国語審議委員がいました。言語は鍋や釜を取り替えるように、簡単に取り替えられるものではない。たしかに日本人は昔から大ざっぱで、精密にものを見る目が乏しいと言われてきました。日本語にはあいまいな言い方が多い。例えばとか思う、なるかも知れない、そうかも知れない。

また形容詞を例にとると、広く・高く・長くなど客観的な状態を表すク活用の形容詞は少ない一方、うれしく・悲しく・さびしくなどと言ったシク活用のものはたくさんあります。日本では感性つまりシク活用が多いのは、島国で感情や感覚を大事にして何千年も暮らしてきたからです。しかし今の国際社会ではあいまいさを避けて的確に述べないといけないと思います。

（井上桂作）

◇人それぞれ居心地のいいところがあるが、まったくそのとおりなのが家で起つている。夫や息子は、気がつけば何気なく座っている。私は家族が居ない日はたいていここに居る。それがリビングの片隅である。

◇編集者一同も、新しい事務所で席をなんとなくきまっただけである。電話に近く一番忙しい所に希久子編集長がデンと座ってくれている。さてさて座り心地の方はいかにやである。

◇食事の時は主人が座っているが、アイロン、縫い物パソコンを打つ時、ボーとするとき、何だか居心地がいい。たまにくる高校生の姪っ子までここに座ると動かない。というのにもここに「名探偵コナン」四十巻があり、二、三時間でも退屈しないようだ。知り合いの高校生も来ると同じである。

（恵）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号) 地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「これから」 (11月15日締切)

1月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「これから」 (2句) 鈴木公弘共選
西口いゑゑ
一路集 (3句) 「白」 土橋はるお選
「願う」 佐藤古拙選
「着物」 島ひかる選
「絵馬」 (3句) 三宅保州担当

1月号発表 (11月15日締切)

2月号
檸檬抄「火」「餅」「セーター」
一路集「こだわる」
初歩教室「鬼」

本社11月句会

とき 11月7日(水) 午後1時開場・2時締切り
開催時間がかかりましたので、ご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし
兼題「煩わしい」 岩佐ダン吉選
「底」 玉置重人選
「キャンセル」 安芸田泰子選
「底」 山口光久選
「底」 宮崎シマ子選
「底」 松原寿子選
「退屈」 河内天笑選
会費 1000円 投句料 500円 (切手可)
(各題2句以内)

本社12月句会

7日(金) 午後1時から

兼題「びったり」「灯」「ブーム」
「去る」「沈黙」

第26年度 夜市川柳募集

第6回「書く」山本希久子選
ハガキに3句 11月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌誌込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇七年(平成十九年)十一月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

大阪市天王寺区大道一四一七

〒543-0052

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ フロンティアビル TEL 0120-30-5050
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)